TSU YA ZAKI KO FUN GUN

# 津屋崎古墳群Ⅰ

ARA JI TSURUGI ZUKA KO FUN

## 在自剣塚古墳

YUKU E OH TSUKA KO FUN

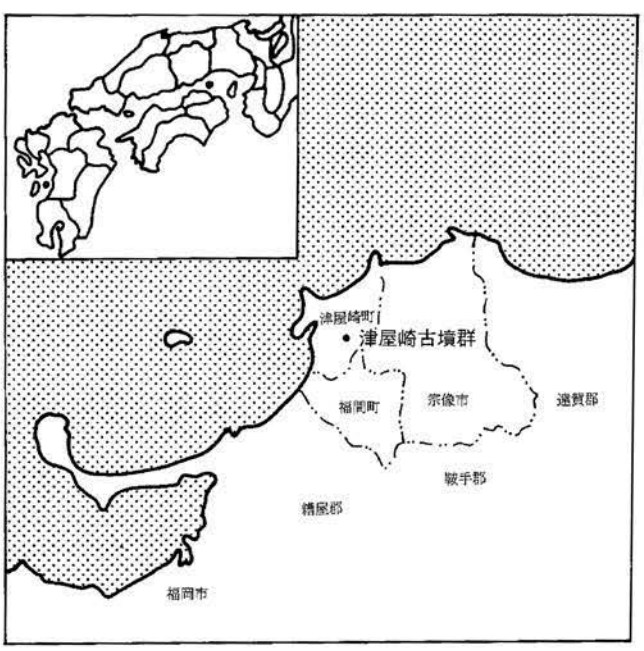
## 生家大塚古墳

OH ISHI OKA NO TANI KO FUN GUN

## 大石岡ノ谷古墳群

津屋崎町文化財調査報告書

第 20 集




2004

津屋崎町教育委員会

津屋崎航空写真

# この本の内容

津屋崎町には古墳時代に宗像地域を支配していた「胸形君（むなかたのきみ）」一族の墳墓である前方後円墳が田園の中に今もその姿を残しています。津屋崎町では、これらの重要な津屋崎古墳群を国指定史跡にするように決定し、そのための調査をおこなっています。

**在自剣塚古墳**では古墳の形や大きさを確認するための測量と、古墳に溝（トレンチ）を掘って古墳のまわりに溝（周溝）が巡っているかどうか確認をしました。

調査の結果、古墳には周溝はないこと、表面に子供の頭大の川原石を敷き詰めた古墳だということ、古墳の長さが101.7mもあり、九州島内に633基ある前方後円墳の内32番目に大きな古墳であることが判明しました。

古墳の大きさ＝その墓に葬られた人物の権力 と考えられていますので、この古墳の主は大変権力を持っていた人物であると想像できます。古墳の中を調査はしていませんので断定はできませんが、古墳は6世紀後半（今から1400年前頃）の胸形君の墳墓と考えています。

この古墳は標高50mの高台につくられており、表面に石を敷き詰めていますから、津屋崎沖をとおる船からは古墳の石が光ってよく見えたと想像できます。

**生家大塚古墳**は生家の集落にある前方後円墳です。古墳の前方部（方形部分）は家の建設時に完全に壊されていると考えられていました。しかし、今回測量調査によって一部前方部が残っていることがわかりました。

古墳の大きさは、削られてはいますが現況で73mあります。周囲には幅9.5mの周溝が掘られていて、古墳の上には埴輪が立てられていたようです。

造られた時期は５世紀後半（今から1500年前頃）と考えています。

**大石岡ノ谷古墳群**は33年に一回の御開帳が行われる平安仏の観音菩薩像が納められている椎ヶ元観音堂の裏にある古墳群です。

前方後円墳２基と円墳１基からなる古墳群です。前方後円墳の1基はみかん園をつくる時に後円部（円形部分）が壊されて中の石室が出てきました。石室は大きくて、内部を赤く塗っていたようです。古墳の全長は1号墳が55m、2号墳は43mあり、1号墳が２号墳より先に造られたと考えています。円墳の３号墳は直径10m程度と考えられますが、詳しいことは、もっと調査をする必要があります。

造られた時期は6世紀後半（今から1400年前頃）と考えています。

今後は今まで調査した古墳と一緒に国指定史跡にする手続きをする予定です。

# 序

福岡県宗像郡津屋崎町は、玄界灘に面する南北に細長い町です。町の中央部の水田地帯は江戸時代に行われた塩田によって干拓されるまでは、在千潟（ありちがた）・桂潟（かつらがた）とよばれる広い入り海が広がっていました。古代の船は平底であり、砂地の傾斜がゆるやかなところが港として適していて、津屋崎の入り海はその点において最適であったようです。そのことは、古代末期から中世にかけてのチャイナタウンである「唐坊跡」が入り海に面した津屋崎小学校内から発見されていることからもわかります。

この入り海に面する台地の上には大きな円墳・前方後円墳が点々と並んでおり、その威容を放っています。これらの古墳は玄界灘の真っ只中に浮かぶ孤島である沖ノ島において祭祀を執り行った「胸形君（むなかたのきみ）」一族の古墳であることがわかっています。宗像地域では現在、この沖ノ島を「世界遺産」にするべく運動を行っています。津屋崎の古墳群もその沖ノ島祭祀との関連で重要視されているところです。

このように重要視されてきた津屋崎の古墳群もこれまでは環境整備面においては遅れており、これらの古墳を活用しているとはいえませんでした。古墳公園構想は昭和５９年度からあり、県教委のご協力で新原・奴山古墳群の測量調査をおこないましたが、当時は国指定申請を行う体制が町には整っていませんでした。

しかし、平成１３年度になって町内にある古墳の重要性が着目され、古墳公園構想を再度進めるべく「古墳公園建設準備室」が新設され、古墳公園建設に向けての取り組みを行うようになりました。この取り組みについては福岡県教育委員会と文化庁のご協力をいただき、本年７月には「津屋崎古墳群」として国指定史跡への申請を行う予定になっております。

古墳公園建設に向けては土地公有化、公園整備工事等まだまだ難題はありますが、この古墳公園建設のために積極的に取り組む所存ですので、各位の一層のご支援をお願い申し上げる次第です。

最後になりましたが、古墳調査にご協力いただきました地権者の皆様方、文化庁記念物課坂井主任文化財調査官と福岡県教育委員会文化財保護課に対しまして、心から感謝の意を表します。

平成１６年３月３１日

福岡県宗像郡津屋崎町教育委員会
教育長　門司　昭徳

# 例言

1．この報告書は津屋崎町教育委員会が国・県の補助を受けて実施した津屋崎町大字在自所在の在自剣塚古墳と大字生家所在の生家大塚古墳と大字大石所在の大石岡ノ谷古墳群の調査報告書である。

2．本書で使用した座標は、日本測地系第Ⅱ系である。方位については、磁北はM．N．と略記し、それ以外は座標北を示す。

3．在自剣塚古墳の測量は、阿部順子、池ノ上宏、小樋恵美子、田上浩司、三原芳子に加えて、宗像考古学研究会の安部裕久、岩下昴介、岡崇、川口陽子、許斐麻衣、神野晋作、谷山修一、原俊一、松永道明、南時夫、山口小百合、吉田恵美の諸兄の協力により完成された。生家大塚古墳の測量は、阿部順子、池ノ上宏、小樋恵美子、田上浩司、三原芳子が行い。大石岡ノ谷古墳群の測量は、阿部順子、池ノ上宏、小樋恵美子、田上浩司、三原芳子に神野晋作の協力を受けた。遺物の整理は天野すみ子、井本眞佐子が行い、遺物の実測は高山美恵子、池ノ上、田上が行い、製図を篠田正子、渋田美代子が行った。

4．遺物実測図において断面は、須恵器は黒塗り、それ以外は白抜きで区別している。単位について特に記述のないものはｃｍ単位とする。

5．本書の執筆は、田上が「Ⅲ　生家大塚古墳」と「Ⅳ　大石岡ノ谷古墳群」、「Ⅴ　津屋崎古墳群の形成　４．新原･奴山古墳群」を行い。その他の執筆と編集を池ノ上が行った。

# 本文目次


Ⅰ　はじめに ..... 1
1．調査の経緯 ..... 1
2．調査の組織 ..... 4
3．立地と環境 ..... 4

Ⅱ　在自剣塚古墳 ..... 8
1．立地 ..... 9
2．墳丘 ..... 9
3．出土遺物 ..... 13
4．小結 ..... 14

Ⅲ　生家大塚古墳 ..... 15
1．立地 ..... 15
2．墳丘 ..... 15
3．遺物 ..... 16

Ⅳ　大石岡ノ谷古墳群 ..... 18
1．立地 ..... 18
2．墳丘 ..... 21
3．遺物 ..... 21

Ⅴ　津屋崎古墳群の形成 ..... 23
1．勝浦高原古墳群 ..... 23
2．勝浦峯ノ畑古墳 ..... 26
3．勝浦井ノ浦古墳 ..... 29
4．新原･奴山古墳群 ..... 31
5．須多田古墳群 ..... 47
6．宮司井手ノ上古墳 ..... 55
7．宮地嶽古墳 ..... 58
8．宗像における首長系譜について ..... 64

# 挿図目次


Fig. 1 周辺遺跡分布図（1/25000）……6
Fig. 2 在自剣塚古墳周辺地形図（1/2000）……8
Fig. 3 第１トレンチ実測図（1/40）……10
Fig. 4 第１トレンチ実測図（1/80）……10
Fig. 5 第２トレンチ実測図（1/60）……11
Fig. 6 在自剣塚古墳出土遺物実測図Ⅰ（1/3）…12
Fig. 7 在自剣塚古墳出土遺物実測図Ⅱ（1/3・1/1）…13
Fig. 8 在自剣塚古墳の現地説明会風景……14
Fig. 9 生家大塚古墳周辺地形図（1/2500）……15
Fig. 10 生家大塚古墳出土遺物実測図（1/3）……17
Fig. 11 生家大塚古墳墳丘測量調査風景……17
Fig. 12 大石岡ノ谷古墳群草刈り作業風景……18
Fig. 13 大石岡ノ谷古墳群周辺地形図（1/2000）……19
Fig. 14 大石岡ノ谷古墳群遺構配置図（1/500）……20
Fig. 15 大石岡ノ谷古墳群表採遺物実測図（1/3）…22
Fig. 16 大石岡ノ谷1号墳石室内写真……22
Fig. 17 勝浦地区古墳位置図（1/2000）……24
Fig. 18 11号墳墳丘測量図（1/800）……25
Fig. 19 13号墳墳丘測量図（1/600）……25
Fig. 20 勝浦峯ノ畑古墳墳丘測量図（1/800）……27
Fig. 21 勝浦峯ノ畑古墳石室実測図（1/80）……28
Fig. 22 勝浦井ノ浦古墳石室実測図（1/80）……29
Fig. 23 勝浦井ノ浦古墳墳丘測量図（1/800）……30
Fig. 24 新原・奴山古墳群分布図（1/4000）……32
Fig. 25 １号墳墳丘測量図（1/800）……36
Fig. 26 7・8号墳墳丘測量図（1/600）……36
Fig. 27 9・10・11号墳墳丘測量図（1/600）……37
Fig. 28 13・14号墳墳丘測量図（1/600）……37
Fig. 29 12・13・14号墳墳丘測量図（1/800）……37
Fig. 30 15・18・19・46号墳墳丘測量図（1/600）…38
Fig. 31 16・17・18・19号墳墳丘測量図（1/600）…38
Fig. 32 20号墳墳丘測量図（1/600）……38
Fig. 33 21号墳墳丘測量図（1/600）……39
Fig. 34 21・22・23号墳墳丘測量図（1/800）……39
Fig. 35 24・47・48号墳墳丘測量図（1/800）……40
Fig. 36 25号墳墳丘測量図（1/600）……40
Fig. 37 26・27・28・29号墳墳丘測量図（1/600）……41
Fig. 38 31・32・33号墳墳丘測量図（1/600）……41
Fig. 39 30・31号墳墳丘測量図（1/800）……41
Fig. 40 34・35・36号墳墳丘測量図（1/600）……42
Fig. 41 36・37・38・39号墳墳丘測量図（1/600）……42
Fig. 42 40・41・42・43号墳墳丘測量図（1/600）……43
Fig. 43 1・7号墳出土遺物実測図（1/8・須恵器大甕のみ1/16）……43
Fig. 44 12・13・20・21・22・25・30・40号墳出土遺物実測図（1/8）……44
Fig. 45 36・44・49号墳出土遺物実測図（1/8）……44
Fig. 46 新原・奴山44号墳石室実測図（1/80）……46
Fig. 47 須多田古墳群・在自剣塚古墳分布図（1/5000）…48
Fig. 48 須多田上ノ口古墳墳丘測量図（1/800）……49
Fig. 49 須多田ミソ塚古墳墳丘測量図（1/800）……49
Fig. 50 須多田下ノ口古墳墳丘測量図（1/800）……50
Fig. 51 須多田天降天神社古墳墳丘測量図（1/800）…51
Fig. 52 須多田ニタ塚古墳墳丘測量図（1/600）……52
Fig. 53 須多田ミソ塚古墳・須多田下ノ口古墳出土遺物実測図（1/8）……53
Fig. 54 須多田下ノ口古墳・須多田天降天神社古墳出土遺物実測図（1/8下ノ口の須恵器甕1/12・1/16）…54
Fig. 55 宮司井手ノ上古墳墳丘測量図（1/600）……55
Fig. 56 竪穴式石室・箱式石棺及び墓壙実測図（1/100）…56
Fig. 57 箱式石棺人骨・副葬品出土状況実測図（1/30）…56
Fig. 58 宮司井手ノ上古墳出土遺物実測図（1/8・ガラス玉と金銅製鈴1/3・短甲1/12）……57
Fig. 59 宮地嶽古墳周辺地形図（1/1000）……59
Fig. 60 宮地嶽古墳石室実測図（1/150）……60
Fig. 61 宗像の前方後円墳と大型円墳……66


# 表目次


Table.1 津屋崎古墳群一覧表……62
Table.2 宗像前方後円墳と大型円墳地名表……67
Table.3 宗像の古墳編年表……68

# Ⅰ　はじめに

## 1．調査の経緯

古くから大陸との交通・交易の要路として栄えた津屋崎は古墳が多数立地している。勝浦から奴山・須多田・在自へと続く山裾には大小200基の古墳がのどかな田園風景の中に点在しており、県内はもちろん九州地方でも有数の古墳密集地帯である。特に勝浦の新原から奴山にかけて密集する古墳は、平成３年に津屋崎を代表する風景として町民の意見などを参考に選定された「津屋崎八景」の中で「新原･奴山古墳群」として親しまれている。

これらの津屋崎古墳群は、平成16年７月に国指定史跡への申請を行うことになっている。以下、これまでの経緯を記す。

昭和59年、国の町づくり特別対策事業の創設に伴って、町のマスタープランに計上している宮地嶽神社、金刀比羅神社、古墳等を結ぶ「歴史、文化の旅」観光ルートとしての整備を検討する。この時に**新原･奴山古墳群**を中心とした古墳公園及び史跡めぐりコースの準備を進めることになった。

昭和60年２月に福岡県教育委員会文化課の浜田信也技術主査（当時）を招き町内の古墳の貴重性の説明を受け、古墳公園等の整備を進めることを話し合う。そこで、古墳の重要性を確認するための調査がなければ、前には進まないことがわかった。まずは基礎資料の作成として、古墳群の墳丘測量を中心とする発掘調査を昭和60年度から４カ年計画で国庫補助を受けて行うことを決定した。

昭和60年９月から**新原･奴山古墳群**の調査を町が事業主体となり、福岡県教育庁福岡教育事務所の橋口達也技術主査（当時）と池辺元明技術主査（当時）の派遣を受けて行った。(1) その間の昭和60年には文化庁記念物課黒崎調査官の現地指導を受けた。

昭和63年には**宮司井手ノ上古墳**が土取りによって破壊されつつあるとの住民からの通報により、福岡県教育庁福岡教育事務所の橋口達也技術主査と町教委の職員が対応して土取り工事を現状で凍結してもらい、平成元年度の国庫補助事業で発掘調査を行った。調査は未盗掘の石棺の中から貴重な副葬品を多く出土して新聞でも大きく取り上げられた。このことから古墳は学術上大変貴重な文化財であるとして、町、地元の働きかけで土取り工事を停止してもらい現状保存されている。(2)

昭和63年から始まった津屋崎地区県営ほ場整備は、その地区内に古墳時代から中世にかけての集落遺跡である**在自遺跡群**と、**津屋崎古墳群**の一角を占める**須多田古墳群**が含まれる103ｈａの広大な事業であった。平成元年10月に町は文化財担当職員を採用するが発掘調査に忙殺されて、古墳の史跡指定の手続きはなされないままであった。

津屋崎地区県営ほ場整備に伴って**須多田古墳群**の各古墳の範囲確認の試掘調査と墳丘測量を行った。平成元年度に行った**須多田下ノ口古墳**の範囲確認調査は、周溝の有無と前方部の盛土を確認するために試掘トレンチを水田内に設定して人力で掘ったが、周溝があると想定した古墳北側部分の水田では、田面を上げるための客土が１ｍ以上あり、何も確認

できなかったので周溝はないと判断した。

しかし平成２年度の秋から行った排水路の建設工事に伴う発掘調査では、前年度試掘した水田の客土を重機で除去したところ、前年度のトレンチからわずか２m北側の古墳から離れた場所で周溝を検出した。(3) 排水路の建設地ということで、今さら設計変更もできず、調査後破壊されてしまった。また、平成４年度の事業地の前方部も計画変更はできず、調査後地盤を下げられてしまったことは担当者として大変残念であり、試掘調査の大事さが身にしみた出来事であった。わずかな救いは須多田下ノ口古墳の前方部を一部巡る周溝の底部がほ場の高さの関係上で残ったことである。

津屋崎地区県営ほ場整備に伴う発掘調査を平成４年度に終了した後は、平成５年８月から福岡ユーアイゴルフ場建設に伴う発掘調査に着手し、平成６年１月からは、担い手育成基盤整備事業勝浦地区に伴う発掘調査に着手した。平成５年４月には新規に文化財担当職員を採用して、２人体制になったが広大な遺跡の発掘調査に忙殺される毎日であった。

平成３年７月18日に文化庁の河原純之主任調査官（当時）が県教委文化課の磯村幸男技術主査（当時）と福岡教育事務所の中間研志技術主査（当時）と来町して、新原･奴山古墳群と宮司井手ノ上古墳を視察した。そこで主任調査官から新原･奴山古墳群だけの指定ではなく勝浦、生家、須多田、宮司の前方後円墳と大型円墳を含めて「津屋崎古墳群」として広範囲の史跡指定を目指すように指摘された。これが現在の指定方針になっている。

その後、福岡県教育庁福岡教育事務所の歴代の文化財担当が機会あるごとに来庁して津屋崎古墳群の国指定申請を働きかけを町に対しておこなっている。

平成６年に福岡ユーアイゴルフ場建設に伴って**勝浦高原２・３号墳**を発掘調査した。その際に緑地として保存される１号墳と、４号墳～10号墳の８基の墳丘測量図を光波測距機とパソコンによって作成した。(4)

平成７年５月には担い手育成基盤整備事業に伴って**新原･奴山古墳群**と同じ台地北端の水田下から削平されて石室と周溝のみになった円墳群を調査した。これが**新原･奴山古墳群第７次調査**となり、11基の円墳を確認した。(5) 同年の10月には当初は保存予定であった**新原･奴山44・45号墳**が水路工事と墓地慰霊碑の建設のために破壊されることになり、保存のために地元の奴山と話し合いをしたが調整がつかず、やむを得ず発掘調査を行った。これが**新原・奴山古墳群第８次調査**となる。(5)

平成８年には文化庁の西田調査官が来町する。新原･奴山古墳群、須多田古墳群、宮地嶽古墳を見学後、調査官から、文化庁では津屋崎古墳群の国指定案件が懸案事項になっているため早急に史跡指定申請を文化庁にあげるよう努力するようにと助言される。

平成10年には**勝浦高原11号墳**上の墓地改葬に伴って古墳の範囲確認を主目的にした発掘調査を行った。その際に設定したトレンチで弥生時代中期の貯蔵穴から銅鐸鋳型未製品を出土している。また、隣接した12・13号墳の墳丘測量図を作成した。(6)

平成11年に文化庁の坂井調査官が来町する。勝浦古墳群、新原･奴山古墳群、須多田古墳群の見学後、大坪町長（当時）と話し合いがなされた。そこで調査官から

・文化庁では津屋崎古墳群の国史跡申請案件が懸案事項になっていること。
・津屋崎古墳群は重要な遺跡であり、広範囲指定を受けることが可能であること。
・史跡指定申請には町当局が主体となって行って欲しいこと　を伝えられた。
これに対して町長は史跡買い上げについては町の財政的負担が大きいのではないかという懸念を伝えた。それについて調査官は史跡指定した後に整備を行う場所から順次買い上げればいいので、すぐにまとまった財政支出はないと答えた。これについて町長は史跡買い上げの先進地視察を県と打ち合わせて行い、今後古墳公園について前向きに考えることを答えた。

平成13年１月に福岡県文化財保護審議会から「福岡県重要・大規模遺跡の保存活用基本計画」が県教委に出された。ここで県内に所在する重要・大規模遺跡の中から積極的に保存活用すべき遺跡を選び、その中でも時節の緊急度に応じた対策を講じるために、特別史跡とそれに準じる遺跡を選定して市町村と共同して地域の特色を生かした保護対策をとることが提言された。そこで**津屋崎古墳群**を含む５地域が保存活用推進の重点地域・遺跡として選定された。

４月に県教委文化財保護課から橋口参事(当時)、伊崎参事補佐(当時)、吉村主任技師(当時)が来町して１月に出された「福岡県重要・大規模遺跡の保存活用基本計画」の説明がなされ、津屋崎古墳群の国史跡申請にむけての町の協力が依頼された。阿部町長は、古墳公園整備についての可能性を文化財担当の教育庶務課長に指示する。そこで、教育庶務課長と文化財担当職員、財政課長、町づくり推進課の企画担当者が、史跡整備の先進である久留米市・大刀洗町・宇美町へ視察。八女市にも教育庶務課長と文化財担当職員が視察に訪れた。

その結果を町長に報告したところ10月に「古墳公園建設準備室」が新設され、教育庶務課長が室長を兼務し、教育庶務係長が古墳公園建設準備係長を兼務、文化財担当は古墳公園建設準備室へと異動となった。翌平成14年１月には人事異動で専任の古墳公園建設準備室長が就任し、本格的に古墳公園建設に取り組むことになった。

この動きに県教委文化財保護課も積極的に協力をすることになり、町との事務連絡会議である「津屋崎古墳群保存活用検討会」を現在まで７回開催して津屋崎古墳群の保護に向けての打ち合わせをおこなっている。

平成14年11月から国指定史跡申請にむけての地元説明会を各集落で行い、翌15年の６月からは個別に地権者のもとへ説明・史跡指定の同意書をもらっている最中である。

平成14年７月と平成16年３月の２回に文化庁記念物課の坂井主任調査官から史跡指定に向けての指導を受けている。

平成14年11月からは史跡指定予定地である**在自剣塚古墳**の範囲確認のトレンチ調査と墳丘測量を行った。

平成15年２月13日には古墳が所在する地元選出議員、地元区長、町文化財専門委員会長と副会長、役場関係課を入れた「古墳公園建設推進協議会」を立ち上げて、古墳公園建設の現状説明を行い、その気運を高めるようにしている。

平成15年４月には新規文化財担当職員を採用して８月から**生家大塚古墳・大石岡ノ谷古墳群**の墳丘測量調査を行った。

これらの古墳測量をもって津屋崎古墳群の基礎資料は整ったことになり、平成16年７月に国指定史跡への申請を行うことになっている。

## ２．調査の組織

今回報告する平成14年度と15年度の調査期間と調査組織は下記のとおりである。

平成14年度　**在自剣塚古墳**　　平成14年11月13日から平成15年３月31日まで

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 津屋崎町教育委員会教育長 | 長瀬　福孝 |
| | 〃古墳公園建設準備室長 | 花田　喜成 |
| 庶務・調査担当 | 〃　主査 | 池ノ上　宏 |

平成１５年度　**生家大塚古墳**　　平成15年８月６日から平成16年１月30日まで

**大石岡ノ谷古墳群**　平成15年10月２日から平成15年12月３日まで

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 津屋崎町教育委員会教育長 | 長瀬　福孝（平成16年１月まで） |
| | | 門司　昭徳（平成16年１月から） |
| | 〃古墳公園建設準備室長 | 花田　喜成 |
| 庶務・調査 | 〃　主査 | 池ノ上　宏 |
| 調査担当 | 〃　主事補 | 田上　浩司 |

## ３．立地と環境

### １）地理的環境

津屋崎町は、玄界灘に面する南北に長い町である。町の東側は標高150～250m級の比較的急峻な地形からなる西山山系に属する山地部が宗像・福間との境界をなしている。町の中央部の国道495号線より東側の練原・奴山・須多田・在自の集落は大昔の平野が海面上昇による侵食からまぬがれた平坦地形（洪積面）の上に立地している。この平坦地形は現在の平野の面（沖積面）からは一段高い位置に独立した面（台地）をつくっている。台地は緩く海側に傾斜していて、山地と平地の接点にできる扇状地の古い形態を残す。今回報告する津屋崎古墳群の多くはこの台地上に立地する。

国道より西側は海岸砂丘地帯の後背湿地（海岸砂丘の背後にできる潟湖）にあたる低平地である。『筑前國續風土記』(7)によると近世まで入り海が広がり、桂潟（勝浦潟）と呼ばれていた。近世～近代の塩田・干拓事業によって形成された低平地である。現在は津屋崎漁港から北側に幅100m、長さ２ｋｍほどの細長い入り江（津屋崎水道）が残っている。

津屋崎水道がかつての勝浦潟の名残である。魚類、甲殻類、貝類などの干潟の生物相が豊富であり、近年、干潟が次々と消滅していく中にあって、希少鳥類のクロツラヘラサギをはじめとする渡り鳥の飛来地としても貴重な自然遺産の一つである。玄界灘に面する西部は弓なりに湾曲した弓状海岸線が続き渡半島につながる。渡半島は東西約１ｋｍ、南北3.5ｋｍ、標高120m以下の起伏に乏しい小さい半島である。東側の山地部とは砂州（海岸砂丘）によって陸続きになった一種の陸繋島である。

### ２）歴史的環境（Fig.１）

津屋崎町内における古墳は約200基あると思われる。津屋崎町では詳細な分布調査を未だ行っていないため、今後古墳の数は変動するものと考えている。

古墳はその位置する場所から３つに大別される。一つ目は、宮地岳（標高182.4m）、在自山（標高235.2m）、水落山（標高247.1m）、対馬見山（標高241.2m）、大石山（標高178.8m）、桂岳（標高165m）という、町の東部に位置する分水嶺の西側山麓部に立地する古墳。これらの古墳は山の斜面や尾根線上に位置する直径10数mの円墳であり、築造時期も古墳時代後期のものでいわゆる群集墳である。

二つ目は、これら町東部山地部より西に延びる低丘陵上や台地上に位置する古墳群。この古墳群には前方後円墳や直径30m以上の大型円墳を含む。

三つ目は、町西部の玄界灘に面する渡半島の森山（標高81.4m）、丸山（標高80.6m）、大峰山（標高114.5m）の山麓部に位置する古墳。この古墳は一つ目の古墳と同じ群集墳である。

本書に記載する「津屋崎古墳群」はこの中の２つ目の古墳にあたる。津屋崎古墳群は５世紀初頭頃から７世紀前半の宮地嶽古墳まで継続して作られ、以下に説明する古墳からなる。

**１．勝浦高原古墳群**　１基の前方後円墳（11号墳）を含む全部で13基からなる古墳群である。古墳の周辺には弥生時代の遺跡もあり、11号墳のくびれ部で弥生時代中期の貯蔵穴から銅鐸鋳型未製品が出土している。(4)(6)

**２．勝浦峯ノ畑古墳**（旧　津屋崎41号墳・勝浦14号墳）　全長97mの前方後円墳。特徴として横穴式石室を３等分するかのように、中軸線上に２本の石柱が立っている。このような古墳は未だ国内にはなく、高句麗の双楹塚古墳と似ている。(8)

遺物は鏡７枚、鹿角製装具付き剣と大刀、素環頭の大刀か剣、短甲、刀子、銅釧、ガラス玉、勾玉、管玉、棗玉、瑤珞がある。(9)

**３．勝浦井ノ浦古墳**（旧　津屋崎10号墳・勝浦12号墳）　全長70mの前方後円墳。前方部に竪穴系横口式石室をもつ。遺物は短甲、挂甲、衝角付冑、鉄矛等の武具と三環鈴、木心鉄板被壺鐙、木心鉄板被輪鐙、轡、鞍金具等の馬具がある。(9)

**４．新原・奴山古墳群**　現在まで８次の発掘調査を行っている。古墳群は、５基の前方後円墳と１基の方墳、53基の円墳から構成される。１号墳は全長50mの前方後円墳で横穴式

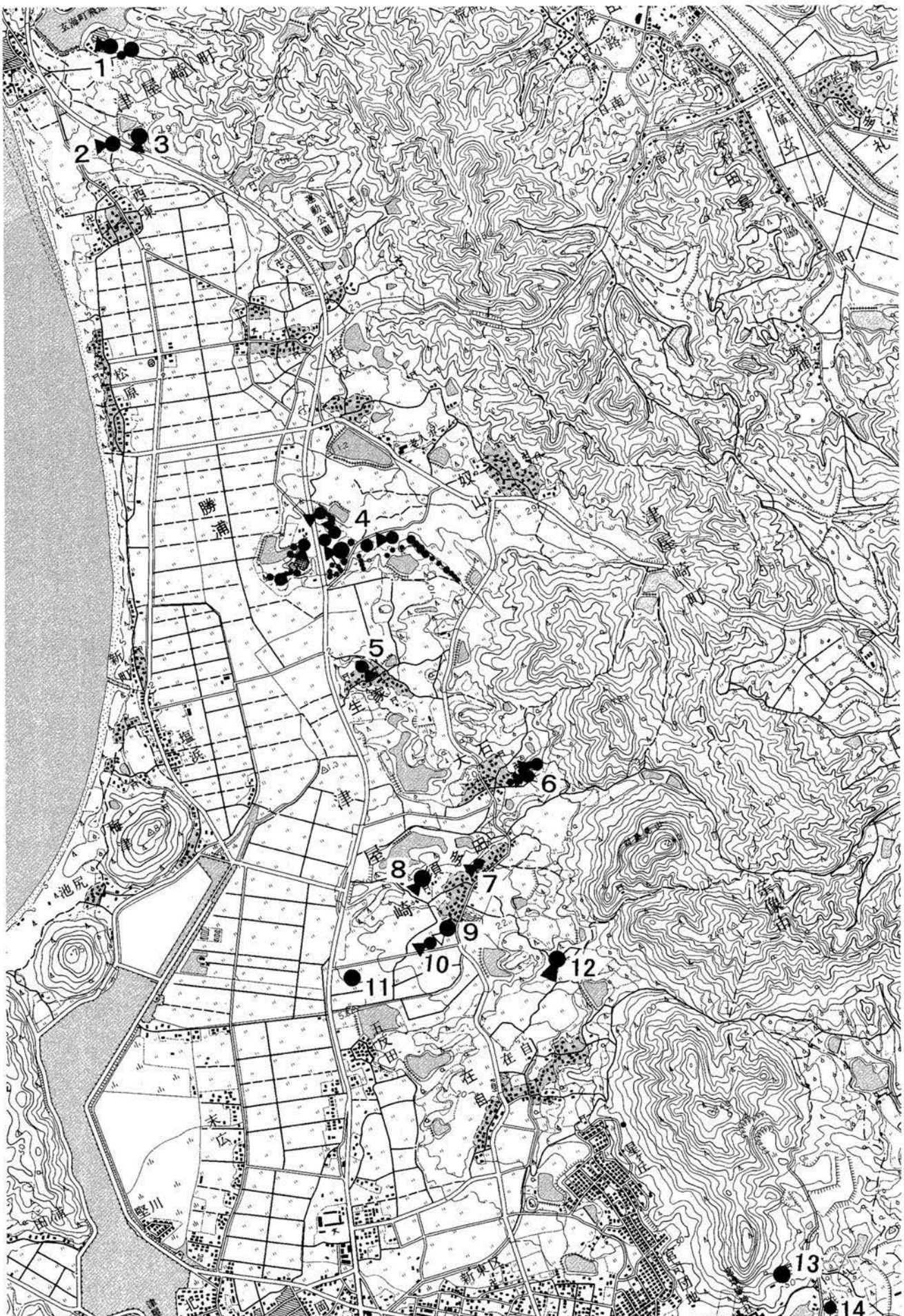



Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25000）番号は歴史的環境の番号と対応する。

石室をもつ。出土遺物は衝角付冑、短甲、鹿角刀装具、鐙等の武具と錐、大型鋸、鉇等の工具に鑿、鑿、鉄鉗等の鍛冶工具が出土している。7号墳は方墳で平坦面が大変広くて玉砂利が敷き詰められており、鉄斧、琥珀原石が出土していることから、祭壇のような用途も考えられている。44号墳は径15mの円墳で複室の横穴式石室には石棚をもつ。遺物に大型鋸、鉋型鉄製品、鉇、鑿、鉄斧等の工具に漁労具のやすが出土している。49号墳は径13mの円墳で周溝から3連瓩が出土している。(1)(5)(9)(10)(11)

**5．生家大塚古墳**　前方部を失っているが前方後円墳である。

**6．大石岡ノ谷古墳群**　2基の前方後円墳と1基の円墳から構成される。前方後円墳の1号墳の横穴式石室から鋸と漆塗りの木製「案」の脚部が出土している。

**7．須多田上ノ口古墳**（旧　津屋崎52号墳　須多田10号墳）全長43mの前方後円墳。(3)

**8．須多田天降天神社古墳**（旧　津屋崎53号墳　須多田11号墳）　全長80mの前方後円墳。墳丘上から円筒埴輪や形象埴輪を出土。(3)

**9．須多田下ノ口古墳**（旧　津屋崎54号墳　須多田15号墳）　全長82mの前方後円墳。2重の周溝を前方部で検出している。(3)

**10．須多田ミソ塚古墳**（旧　津屋崎55号墳　須多田14号墳）全長67mの前方後円墳。(3)

**11．須多田ニタ塚古墳**（旧　津屋崎56号墳　須多田12号墳）　径33.5mの円墳。墳丘に葺石が施されている。古式の横穴式石室をもつ。1重する周溝と山側の標高の高い部分に馬蹄状に巡る溝がある。(3)

**12．在自剣塚古墳**（旧　津屋崎64号墳　須多田22号墳）　全長101.7mの前方後円墳。墳丘に葺石が施されている。

**13．宮地嶽古墳**（旧　津屋崎70号墳　宮地岳大塚）　径35mの円墳。全長23mの全国第2位の横穴式石室をもつ。遺物に復元長2.4mの金銅装頭椎大刀、金銅装壺鐙、金銅装鞍金具、銅鋺、鉛ガラス製玉、鉛ガラス製板が出土している。これらは全て国宝に指定されている。(12)(13)

**14．宮司井手ノ上古墳**　径26mの円墳で、1つの墓壙の中に竪穴式石室と箱式石棺がつくられ、墓壙のすぐ北側に石蓋土壙墓がつくられている。箱式石棺からは短甲と剣、矛、鉄鏃等の武器武具と鉄柄手斧、U字形鋤先、鉄斧、鑿、鎌等の工具が出土している。(2)

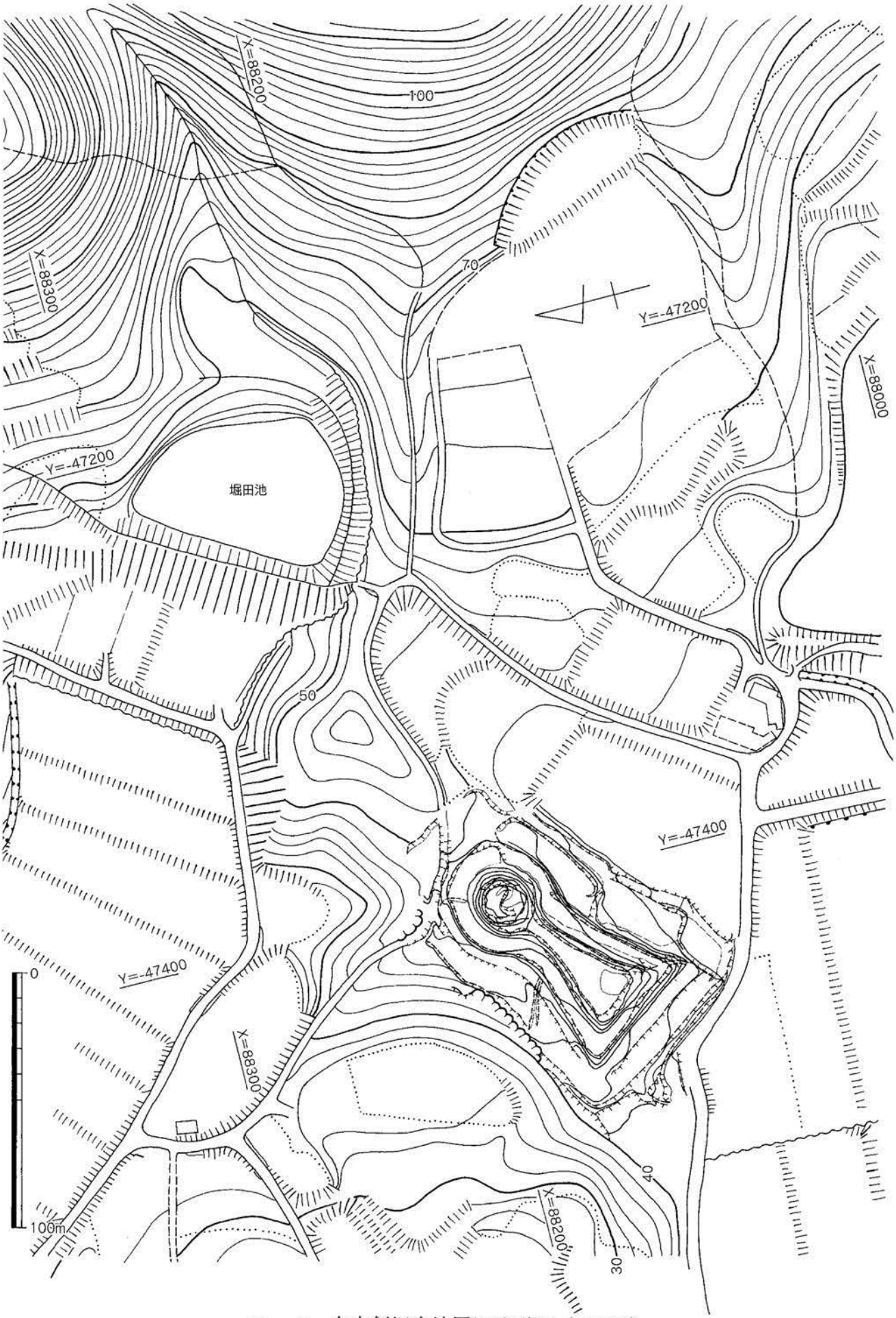



Fig. 2　在自剣塚古墳周辺地形図（1/2000）

# Ⅱ　在自剣塚古墳

## 1．立地（Fig．２）

在自剣塚古墳（旧 須多田22号墳、津屋崎64号墳）は、水落山（標高247.1m）から西に広がる台地の付け根にあたる標高50mの地点に位置する前方後円墳である。古墳南側の地形はなだらかに傾斜して、谷部を在自川が流れている。圃場整備前の水田からの比高４mを測る。北西側は須多田からの谷が深く入り込んでいる。江戸時代に加藤一純と鷹取周成により編纂された『筑前國續風土記附録』(14)の在自村の項に「村内に南北五十間計の高き所あり。其北の方に窟あり。口ハ崩て入りかたし。劔塚という。神功皇后の劔を納め給ひし所也と里民いへり」とあり古くから塚として地元では認識されていたし、また石室も開口していたようである。

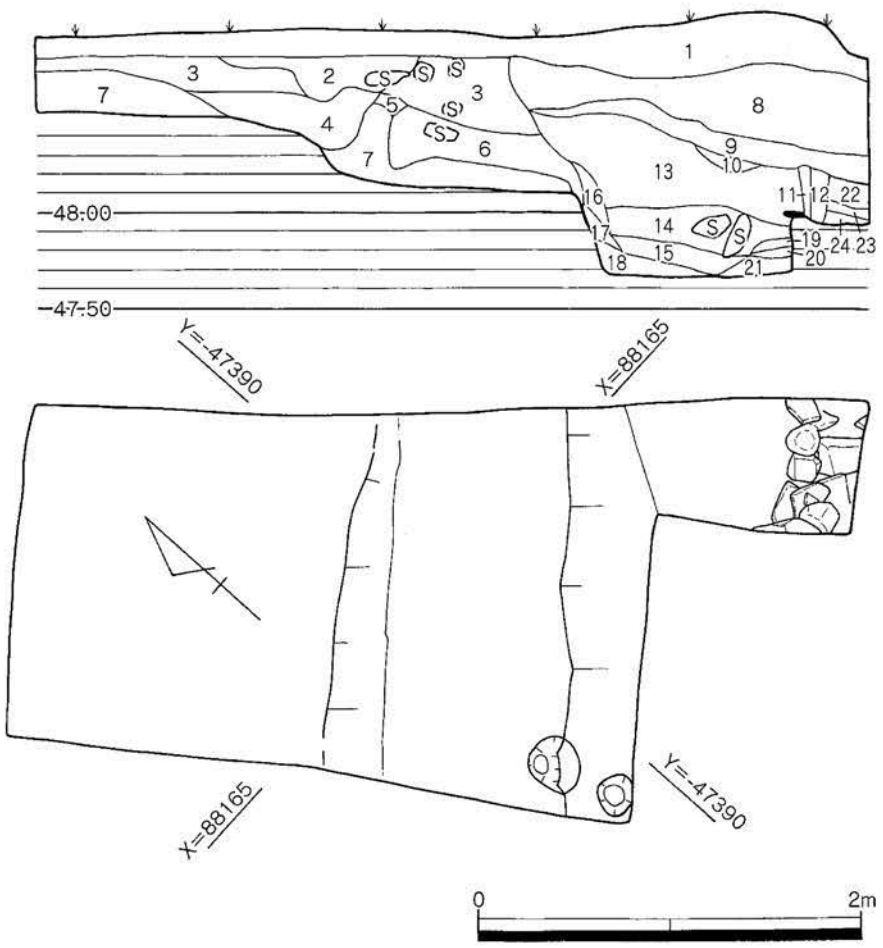
## 2．墳丘（付図１、ＰＬ．２・３）

古墳は杉の植林と果樹園の造成によって削平がみられるが全体として残存状態は良い。現状での墳丘長は96mを測る。墳丘端が急斜面をしているために古墳は削平を受けているようである。そこで本来の墳裾を確認するために、後円部に２本、全長を確認するために前方部に１本トレンチを設けて発掘した。主軸上にあたる後円部端は道にあたるため今回は調査を行わなかった。

**第１トレンチ**（Fig．３、ＰＬ．４－１・２）後円部東側の墳裾を確認する目的で、後円部中央の東南部の畑に設定した。表土下20cm～30cmで地山になった。畑の作物の関係でより東側へとトレンチを延ばすことはできなかったが、トレンチの東端で段落ちを確認した。これが墳裾と考えておきたい。

**第３トレンチ**（Fig．４、ＰＬ．７－１・２）古墳墳丘の西半分は植林等で前方部端が墳丘側に削り込まれており急斜面になっている。後円部西側の墳裾を確認する目的で、後円部中央の北西部に設定した。表土下20cm～30cmで地山になっており削平によって墳裾の段はトレンチでは確認できなかった。墳丘測量の結果、古墳の西側で５ｃｍ程度の段がかろうじて確認でき、このラインが西側の墳裾を示していると推定している。

**第２トレンチ**（Fig．５、ＰＬ．４－３、５－１・２・３、６－１・２・３）前方部墳裾を確認する目的で設定した。表土下の１・６は整地層でしまりがなかった。30・24は墳丘盛土が崩れて堆積したものであろう。24に含まれる石は古墳築造当時のものではなく、墳丘上の葺石が崩落したものと考えている。トレンチ北側で20cm程度の段落ちが墳丘裾の可能性がある。また13・16から南側の24までの細かい層の解釈が難しく、見学に訪れた方にも意見を求めたが、盛土とみるか崩落した土とみるかで解釈は分かれた。地山整形の外側に古墳盛土があるかという点で解釈が分かれる。葺石が地山整形の段落ち近くには確認されなかった点、崩落土にしてはしまりがある点、ピットのような穴は地山整形の外側に盛土を行うために杭を打ち込み、その杭の間に板を横にして渡して盛土を行った跡であるという仮説を考えることにより、この層は墳丘盛土の一部と考えている。




1.淡紫褐色土（耕作土）　2.褐色土（攪乱）　3.淡黄褐色粘質土　4.淡褐色土（砂が多い）　5.褐色粘質土　6.橙褐色粘質土　7.赤褐色土（地山）　8.濃黒褐色粘質土　9.淡黒褐色粘質土（炭化物含む）　10.淡黒褐色粘質土　11.淡黒黄褐色粘質土　12.淡黄褐色土　13.濃褐色粘質土　14.濃褐色砂質土　15.褐色砂質土　16.淡茶褐色砂質土　17.橙色砂質土　18.黄褐色土（地山）　19.淡赤褐色砂質土　20.淡黄褐色砂質土　21.淡茶褐色砂質土　22.褐色粘質土　23.淡茶褐色土　24.濃褐色土

Fig. 3　第１トレンチ実測図（1/40）

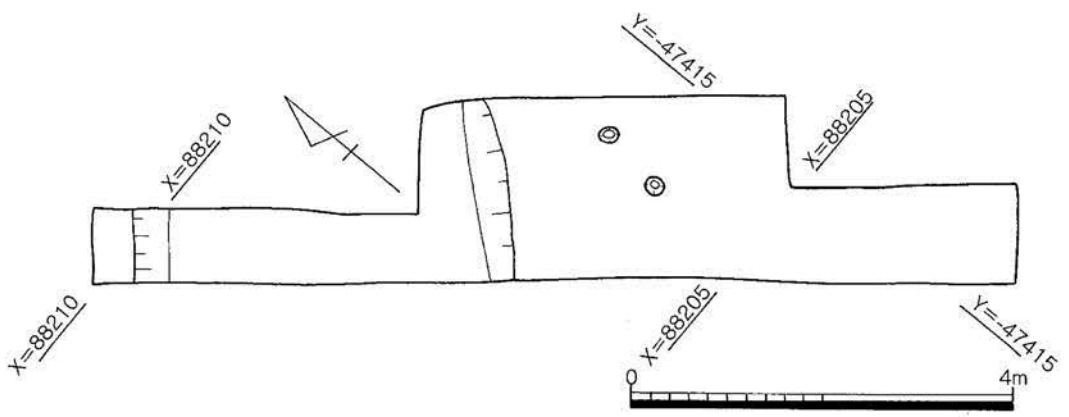
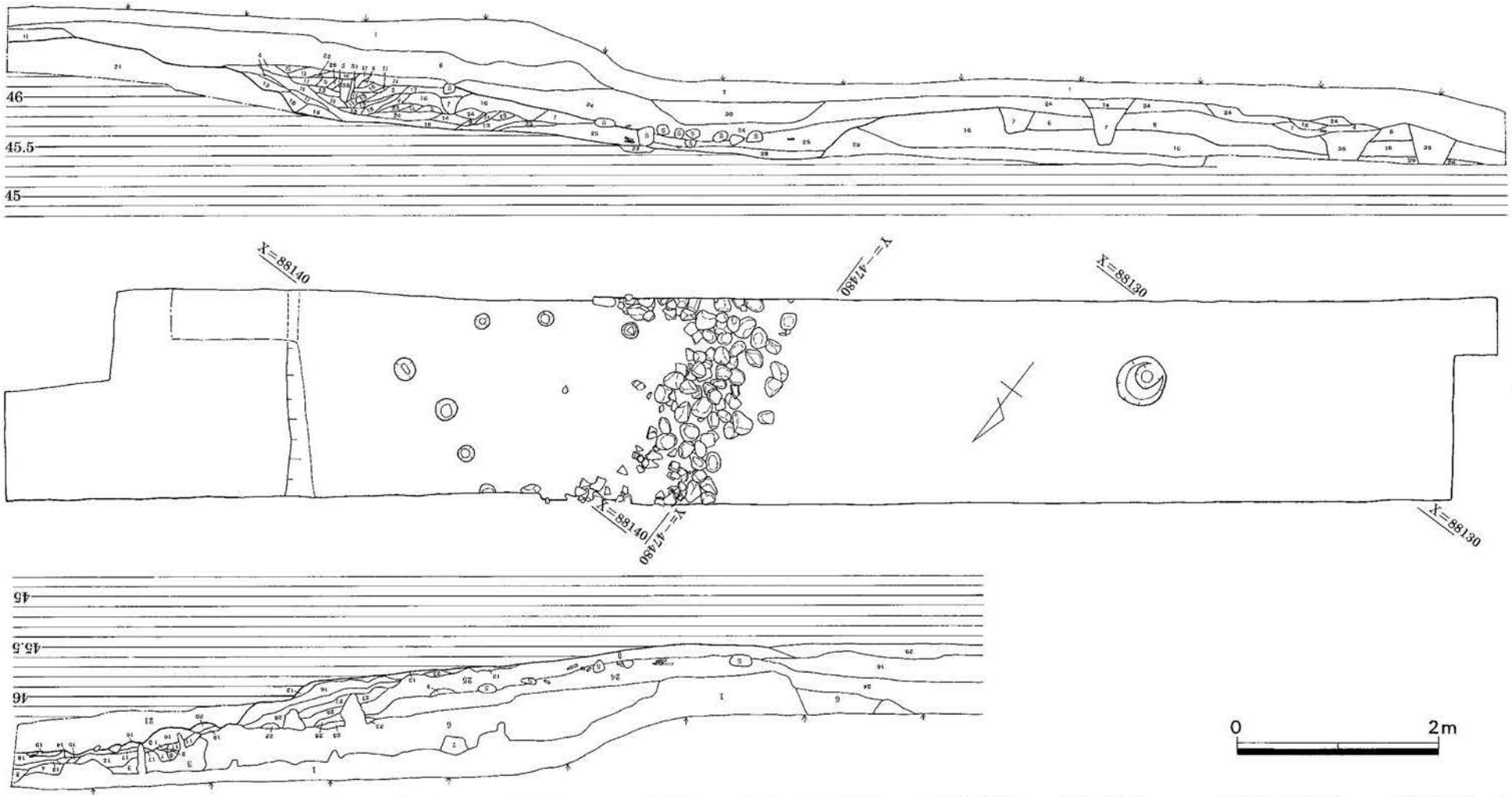



Fig. 4　第１トレンチ実測図（1/80）




1.灰褐色砂質土（表土）　2.灰褐色土ややしまる（攪乱）　3.褐色砂質土0.5～2cm大礫混　4.暗褐色＋橙色粘質土　5.灰褐色砂質土　6.褐色砂質土0.5～2cm大礫混（造成土）　7.褐色砂質土　8.黄褐色粘質土マンガン含む　9.黄褐色粘質土　10.茶褐色粘質土　11.灰褐色砂質土　12.灰褐色細粒土　13.黒色砂質土＋橙色粘質土　14.褐色砂質土＋橙色砂粒　15.明灰色砂質土しまりが悪い　16.暗灰色砂質土　17.橙色粘質土　18.暗褐色砂質土＋橙色粘土粒　19.暗灰色砂質土　20. 濃灰色砂質土　21.黄褐色粘質土（地山）　22.褐色＋茶褐色砂質土　23.明褐色砂質土　24.暗灰褐色砂質土　25.黄褐色＋橙色砂質土　26.褐色砂質土　27.褐色砂質土＋橙色ブロック　28.褐色＋黄褐色砂質土　29.明褐色砂質土＋マンガン多く含む　30.灰褐色砂質土しまり悪い　31.黒色＋暗褐色砂質土　32.暗灰色砂質土　33.暗灰色砂質土しまり良い　34.橙色砂質土　35.暗灰色砂質土＋マンガン

Fig. 5　第2トレンチ実測図（1/60）

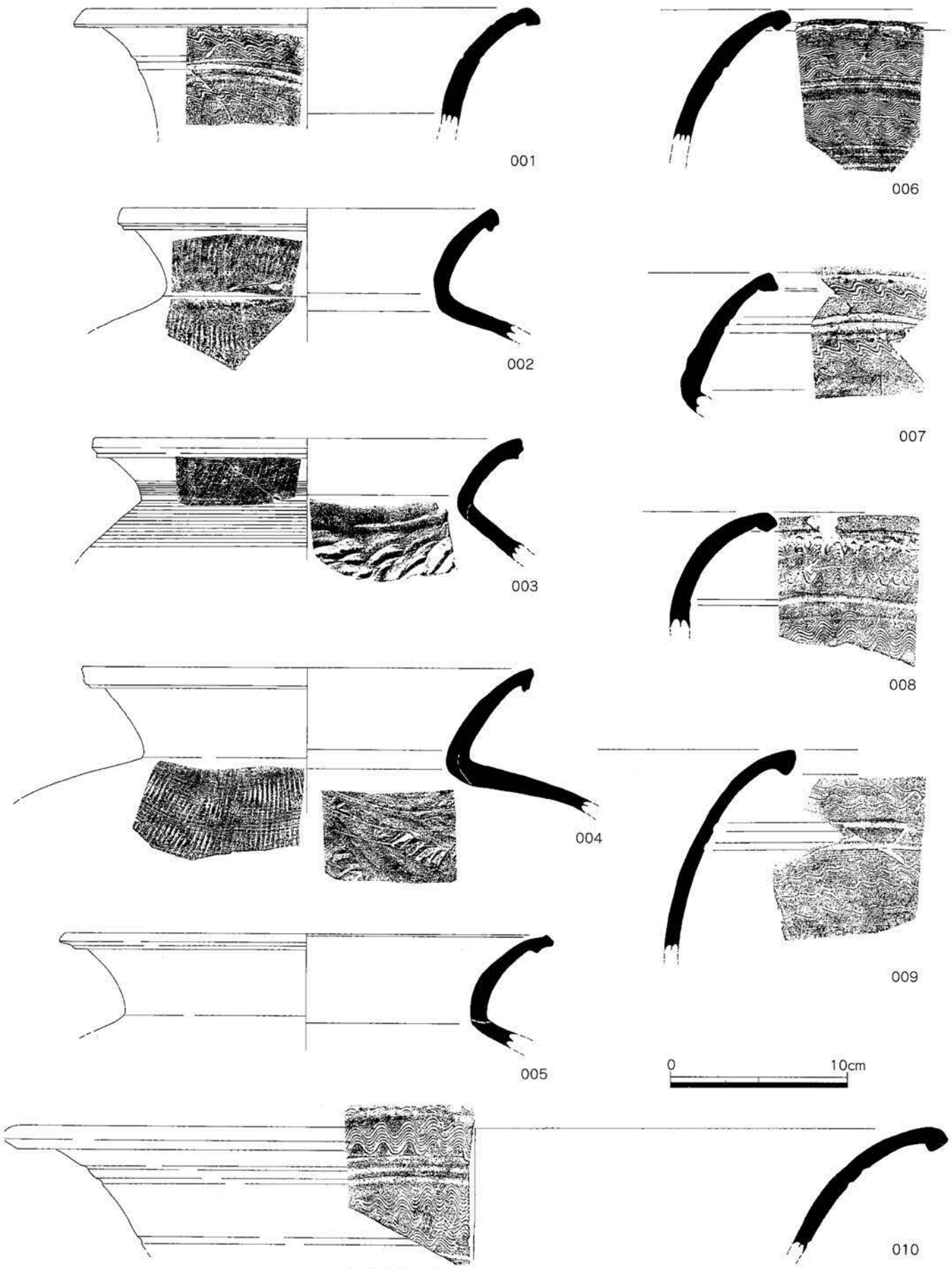



Fig. 6　在自剣塚古墳出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

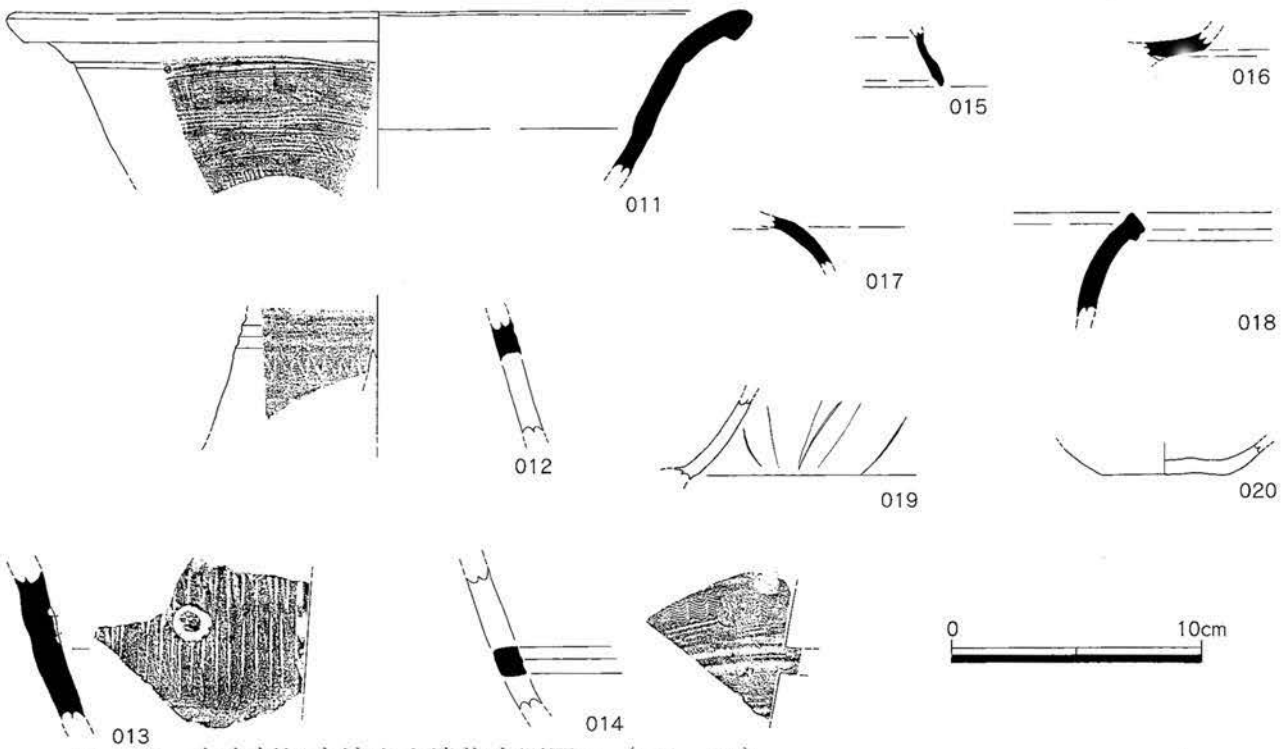
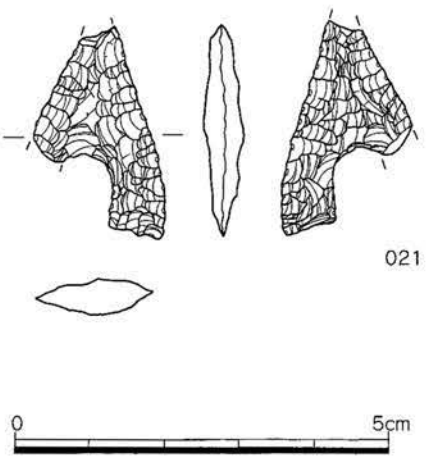



Fig. 7　在自剣塚古墳出土遺物実測図Ⅱ（1/3・1/1）




## 3．出土遺物（Fig. 6・7、ＰＬ．14）

図示した出土遺物は墳丘測量時に表採した土器と第２トレンチから出土した土器である。

001から010までは須恵器甕の口縁片である。001は復原口径15.2cm。口縁下に波状文を施し、２条の沈線の下にも波状文を施している。002は復原口径21cm。口縁外面に縦方向の櫛描き直線文を施している。胴部外面に平行タタキを施す。003は復原口径24cm。口縁外面に縦方向の櫛描き直線文を施している。頸部から肩部にかけて粗いカキ目を施す。内面は青海波文の当具痕が残る。004は復原口径25.4cm。口縁部は内外面ともに横ナデ、肩部外面に平行線タタキを施している。内面は当具痕をナデ消すが、半すり消し状態である。005は復原口径27.2cm。口縁部は内外面ともに横ナデを施す。006は沈線で区切られ２列の波状文が施されている。007は沈線で区切られ波状文が施されている。 008も沈線で区切られた２列の波状文様帯が施されている。009 は２本の沈線で区切られ２列から３列の波状文様が施されている。010は復原口径53cm の大型甕の口縁片である。口縁外面には２本の沈線で区切られ２列から３列の波状文様が施されている。011から014は須恵器の高坏型器台の破片である。011は復原口径30cm の坏部である。内面底部は当具痕をナデ消している。外面はタタキ後に粗いナデが施されている。012は脚部で三角形すかし孔の痕跡がある。表採資料のため風化が激しいが波状文が確認される。013も脚部である。方形すかし孔の痕跡がある。竹管文と波状文が施されている。014も脚部である。三角すかし孔と台

形すかし孔の痕跡がある。波状文が施されている。015は須恵器の坏蓋口縁片である。口縁端部に段をもつ。016は須恵器の高坏の坏部の底部である。すかし孔の痕跡がある。017は須恵器の坏蓋片である。天井部と口縁部の境にわずかではあるが段らしきものをもつ。018は須恵器甕の口縁片である。019は青磁碗の破片である。鎬蓮弁文をもつ。020は土師器の坏底部である。019と020は中世の混入品であろう。021は黒曜石の石鏃である。先端と基部を欠損している。012･013･017･018は表採資料である。その他は第２トレンチからの出土である。

## ４．小結

古墳は台地の基部に立地しており、後円部をつくるために丘陵を削り出した丘尾切断でつくられている。後円部墳丘端から15m程度の幅の凹地が弧をえがいており、この部分が切断面と考える。

古墳の墳丘規模は全長101 7m、後円部径49m、後円部高7.3m、後円部頂の径13.5m、前方部幅64m、前方部長54.5m、前方部高8.8m、くびれ幅34.8m、後円部と前方部の高低差は後円部が3 7m高い。墳丘の主軸方向はＮ　128°　Ｗを測り、前方部を南西に向ける。墳丘の段築は前方部２段、後円部２段である。墳丘には10～50cmの川原石を使用した葺石が覆っている。墳丘上には須恵器の大甕や高坏形器台が置いてあったようである。

古墳築造は出土した須恵器からTK　43併行期、前方後円墳集成編年[15]の10期、６世紀第４四半期と考える。

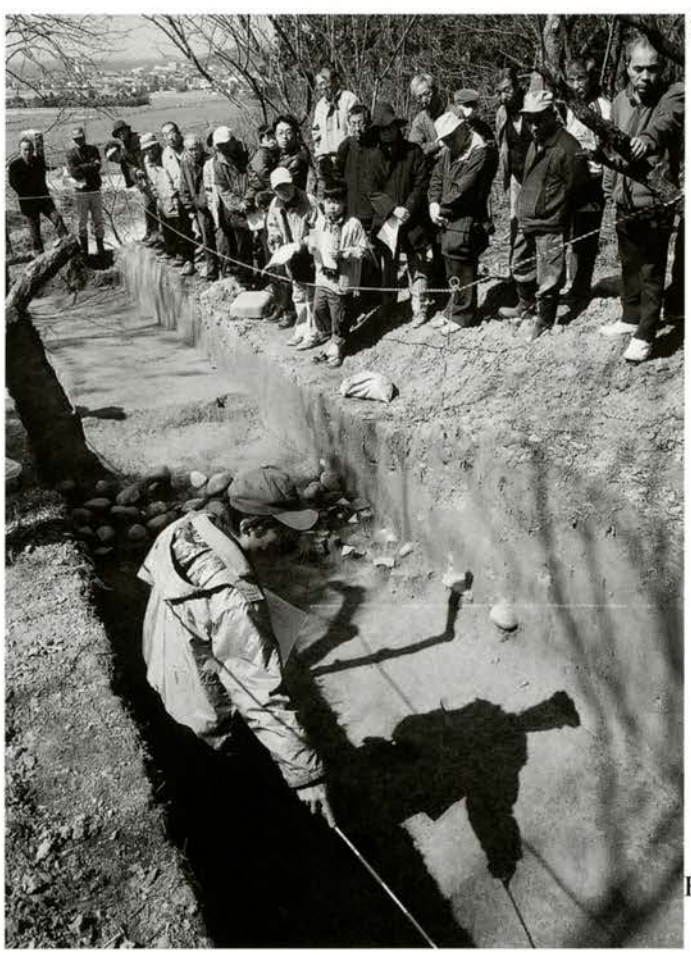


Fig. 8　３月21日に行った在自剣塚古墳の現地説明会風景

# Ⅲ　生家大塚古墳

## 1．立地（Fig. 9）

大石山から西方に向かって派生する細長く延びた丘陵縁辺部の標高15mに位置する。丘陵裾からの比高差は10mを測る。丘陵の最高所に後円部を配置しており、前方部は個人住宅建設によって破壊されているものと思われていたが、今回の調査によって土地の境界として残されていた尾根が前方部の一部であることを確認した。この古墳の西側に円墳が1基所在する。また、この丘陵から北側に400mほどの距離を隔てた台地上には新原･奴山古墳群が所在する。

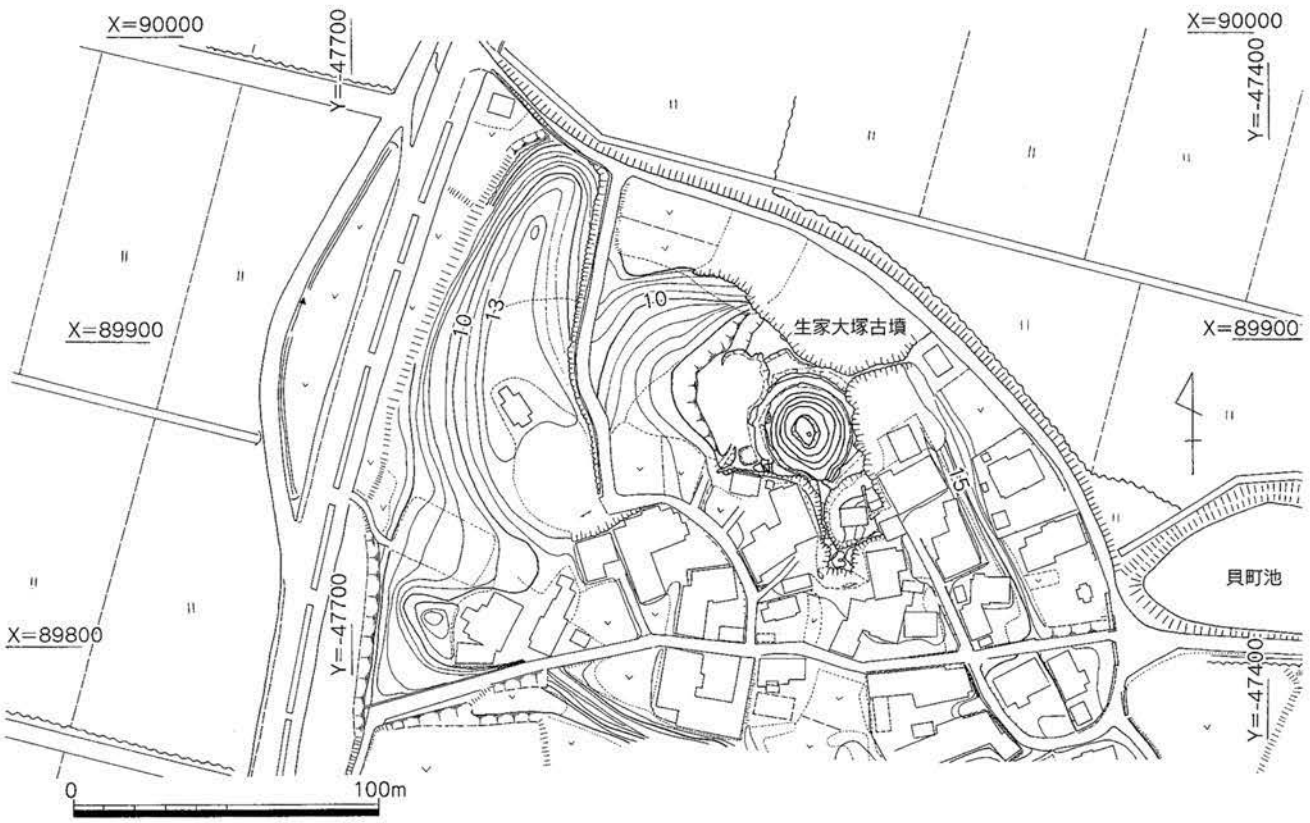



Fig. 9　生家大塚古墳周辺地形図（1/2500）

## 2．墳丘（付図2、ＰＬ．8･9）

墳丘の主軸方向はN－173°－Eを測り、前方部を南に向ける前方後円墳である。全長は現況で73mあり、周溝を入れると80.5mほどになると思われる。後円部北側は崖面になっており、大きく削平されているが一部地形の改変をあまり受けてないと思われる部分がある。東側は畑と個人住宅によって、南側は個人住宅によって削平されている。西側は昔、住宅を建てるために、1mほど土地を低くして平坦にしている。後円部北側の一部が古墳

築造時の地形をとどめていると思われるのみであり、周辺地形を把握するのは難しい状況であった。

後円部は径28.5m、墳頂径10m、高さ8mをはかる。墳裾の大部分が削平されていると思われるが、概して残存状態は良好である。

後円部北側の一部は地形が改変されていない可能性が高いことを先に述べたが、この部分において幅9.5mの周溝を現況においても確認することができる。また、古墳北側の崖面においても周溝を確認することができ、その崖面において円筒埴輪を発見した。横に倒れた状況で上からの土圧がかかり潰されたような状態であった。（ＰＬ．9－3）さらに、この周溝の外側に幅７～10mの高まりが認められるが、これは周堤であろうと思われる。

後円部の東側に現在、細長い尾根になっている部分がある。これは現在、土地の境界線となっている。現在、この尾根の西側は個人住宅が建っているが、数十年前に家を建てる際、古墳の前方部を破壊したということであるから、この尾根は境界であるために削平を免れて残った前方部の一部と考えられる。この尾根は、さらに南側では高まりがありその先で崖になっている。その崖面で版築を確認することができた。ゆえに、この尾根が前方部の一部であることは確実であろう。以前はこの前方部の上にお大師様の祠があったそうである。今も祠の基礎のコンクリートが細長く残っている。この大師堂が公民館の道をはさんだ北側の場所に移動した後に土取りが行われて、現在の標高13.5m前後の高さまで地盤を下げた。以前は小高くなっていたと区長さんよりお話をうかがっている。南西部の崖面に残っている平坦部（標高15.184m）が土取り前の地盤の高さの可能性があるのではないかと、ここではふれるにとどめておく。

現況での前方部長は36.5m、高さ6.8mで、後円部との比高差は－3.8mである。葺石は確認できていない。

## ３．遺物（Fig．10、ＰＬ．14）

調査中に古墳北側崖面において発見した円筒埴輪の他に、須恵器を数点採集した。

001は円筒埴輪の胴部。以前報告した[16]生家大塚古墳墳丘表採埴輪と接合した。ここで改めて紹介する。突帯部分の径は20.2cm、残存高は14.3cmをはかる。器壁は１～1.7cmで、やや薄い。2cmほどの粘土紐を巻き上げて製作されており、内面に継ぎ目が明瞭に観察できる。タガは先端が約1cm、付け根が約2cmの屈曲がややあまい台形を呈し、不明瞭ながら上下の接合部分に指頭圧痕を残す。外面は縦方向のハケ調整を施し、内面はナデ調整を施すが、内外面ともやや摩滅している。胎土は密で焼成は良好。内外面とも黄味がかった橙色を呈する。

002～004は須恵器。002は前方部で採集した破片。甕か。器壁は３～６mmと薄い。外面に平行タタキを施しており、内面は青海波をナデ消しているが、半すり消しの状態である。胎土は密で焼成は良好。外面は黒色、内面は灰色を呈する。003は甕の口縁部。内外

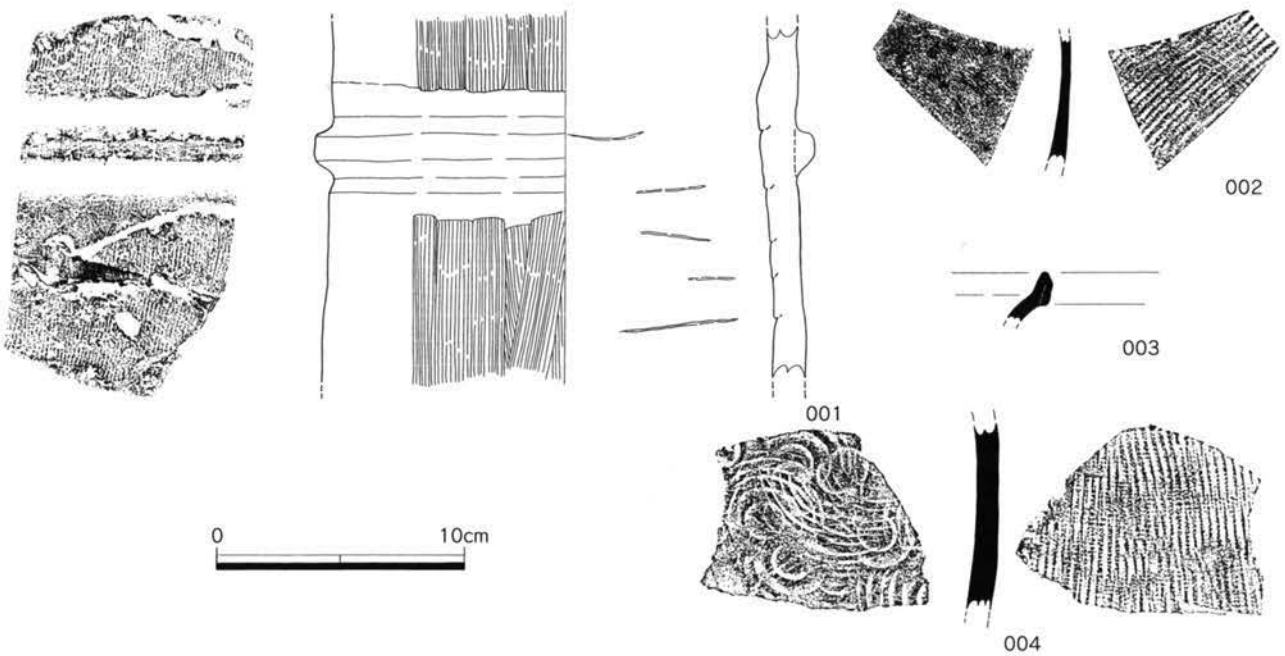



Fig. 10　生家大塚古墳出土遺物実測図（1/3）

面ともヨコナデを施す。胎土は密で焼成は良好。灰色を呈する。004は甕の胴部と思われる。器壁は約1cm。外面に平行タタキを施し、内面には同心円文が残る。胎土は密で焼成は良好。灰色を呈する。

埴輪は高橋徹氏の埴輪編年[17]のⅣ期に比定できる。これらのことから生家大塚古墳は前方後円墳集成編年[15]８期の古墳。５世紀後半に位置づけられる。

Fig. 11　生家大塚古墳墳丘測量調査風景

# Ⅳ　大石岡ノ谷古墳群

## 1．立地（Fig. 13・14）

大石岡ノ谷古墳群は大石山山麓の西に向かって派生する尾根上に所在する前方後円墳2基と円墳1基からなる古墳群である。丘陵の先端部には大石区椎ヶ元観音堂がある。ここに収められている観音菩薩立像は平安時代後期の地方様式を示す。津屋崎では唯一の平安仏である。(18) 古墳の主軸は尾根線と凡そ平行している。標高のより高い方の古墳を1号墳とする。いずれも前方部を低い方向に向ける。津屋崎町内の多くの古墳が、海に接するか近接した位置に造営されているのに対し、比較的内陸部に造営している点で特徴的である。

2基の前方後円墳は、1号墳の前方部と2号墳の後円部がほぼ接するかのような配置となっている。1号墳は、1970年代のみかん畑造成の際に後円部が大きく削られており、石室も一部破壊されている。石室は横穴式石室であり、壁面には赤色顔料を塗っていたようである。（Fig. 16）石室は埋められているが、大きく抉られた状況が今でもはっきりと確認できる。石室から木製の案や鉄製品などが出土したということである。

2号墳の西側は、近世の墓地が造営されて地形も平坦に改変されているが、尾根が一部膨らむ部分があり、円墳の可能性も推測される。

Fig. 12　大石岡ノ谷古墳群草刈り作業風景

Fig. 13　大石岡ノ谷古墳群周辺地形図（1/2000）

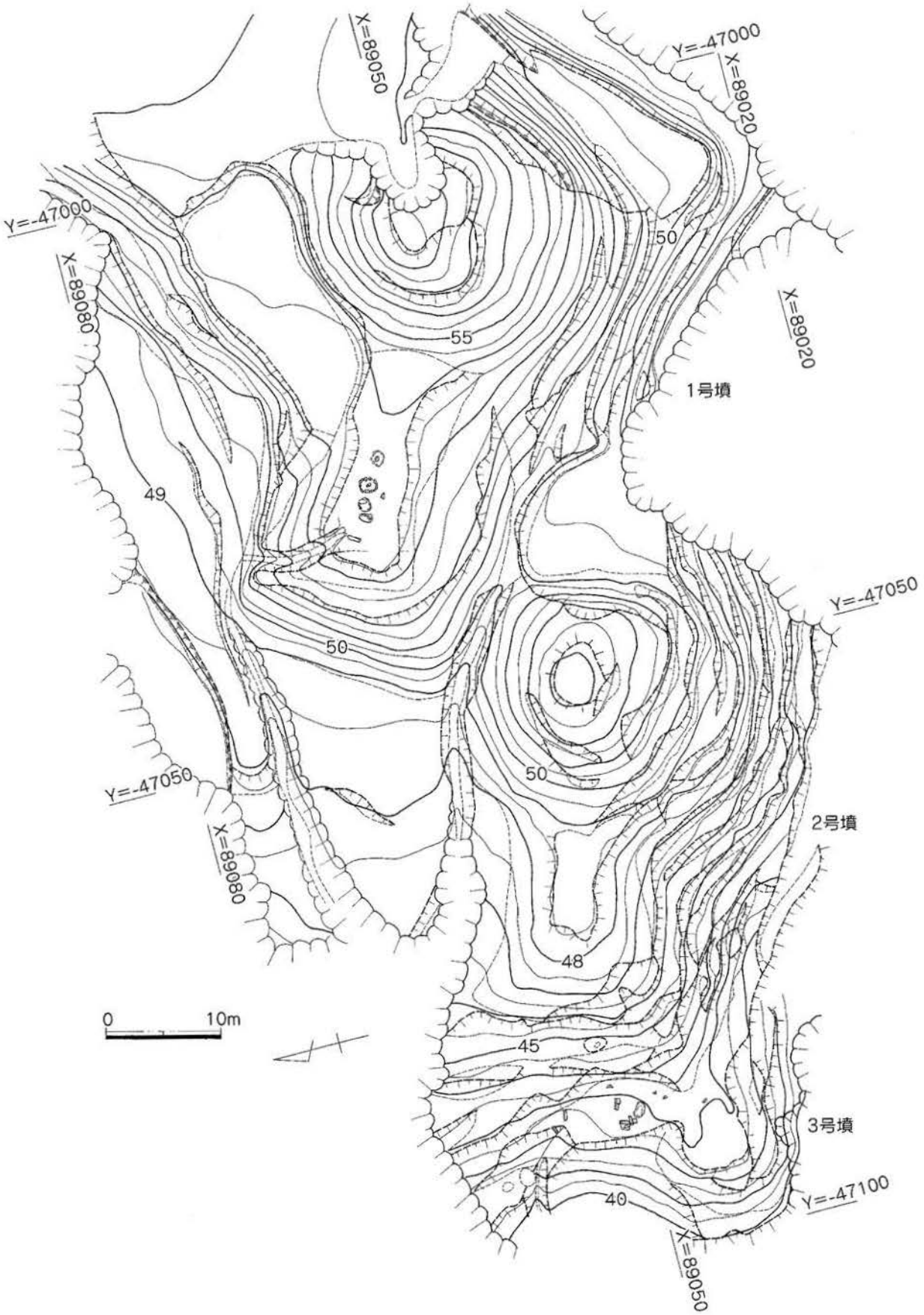



Fig. 14　大石岡ノ谷古墳群遺構配置図（1/500）

## 2．墳丘

### 1）1号墳（付図3、ＰＬ．10・11・12）

墳丘は主軸方向がN－57°－Wで前方部を北西に向けた前方後円墳。墳長は現況で全長43mを測るが、後円部が大きく削平されているので本来は55mほどになるかと思われる。後円部を抉られている以外に、北側はみかん畑によって平坦に整形されている。いくらか土を盛っているようで前方部北側は平坦面との比高差が20cmほどしかない地点もある。それ以外の部分は、いくらか削平を受けているものの残存状態は良好である。

後円部は現況で径31.5m、頂径6.7m、高さ7.4mをはかる。前方部は長さ29m、幅22m、高さ５mをはかり、後円部との比高差は－５mである。前方部には近世の墓地が作られているが残存状態は良好で、現況において二段築成が明確に確認できる。前方部北西側の墳裾もはっきりと認められる。くびれ部の幅は現況で17.5mをはかる。

周溝はないようである。埴輪、葺石は未確認である。過去に6世紀後半に比定できる須恵器を採集されている。特に北側くびれ部の崖面において多く発見するようである。

### 2）2号墳（付図４、ＰＬ．12・13）

墳丘は主軸方向がN－73°－Wで1号墳と同様に前方部を北西に向けた全長43mの前方後円墳。1号墳と比べ小さい。墳丘は大きな削平を受けていないと思われるが、南側は植林によると思われる地形の改変が認められる。西側は近世の墓地を造る際の地面を平坦にならしているようである。

後円部は現況で径26.5m、頂径4.5m、高さ3.6mをはかる。前方部は長さ20m、幅15m、高さ４mをはかり、後円部との比高差は－4.6mである。くびれ部の幅は12m。北側の墳裾は容易に確認できるが、西側･南側は後世の地形の改変により細かな段がたくさんあり、墳裾が判然としない。

１号墳と同様に周溝はないようで、葺石・埴輪は確認できていない。

### 3）3号墳（付図４、ＰＬ．13）

先に円墳の可能性があると述べた部分。古墳であるかどうかはっきりとしないが、一応古墳と報告しておく。径10m、高さ1.5mをはかる。頂部はやや凹む。近世の墓地を造る際に地面を平坦にならしていると思われ、高まりとしては確認できないが、周辺地形と照合した場合、この部分だけが不自然に尾根から膨らんでいる。

## 3．遺物（Fig．13、ＰＬ．14）

全て1号墳採集の須恵器である。001は後円部採集の甕の口縁部。残存高8.8cm。頸部にヘラ記号有り。外面はタタキの痕跡をナデ消している。内面には当て具痕が明瞭に残る。

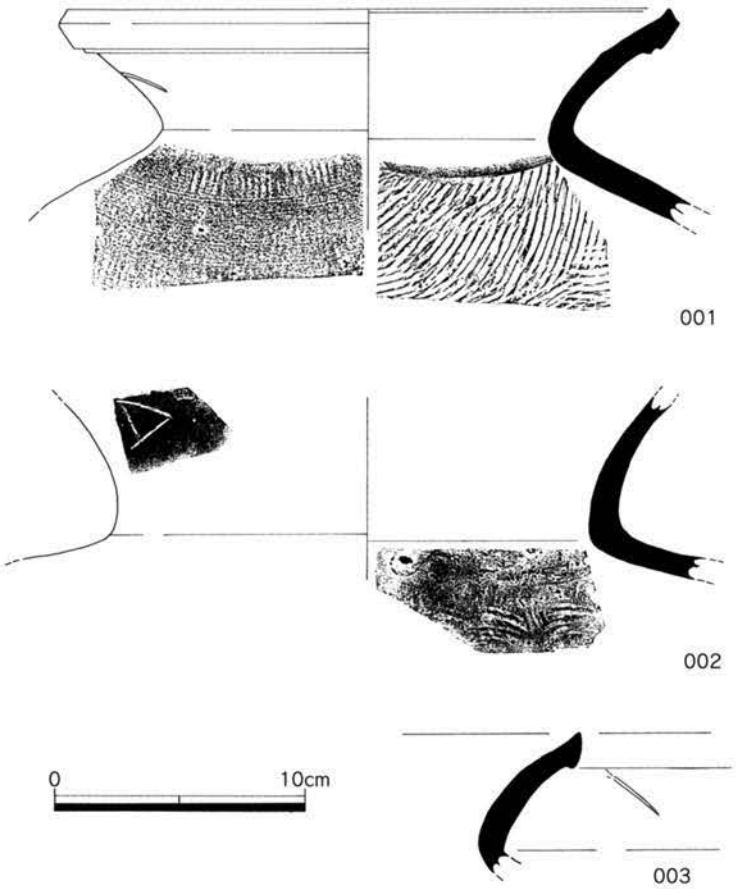



Fig. 15　大石岡ノ谷古墳群表採遺物実測図（1/3）

胎土は密で焼成は良好。外面は灰色～黒灰色、内面は灰色を呈する。002はくびれ部採集の甕の頸部。残存高7cm。外面はタタキの痕跡をナデ消し、内面は同心円文を確認できる。さらに内面には黒灰色の自然釉がかかっている。頸部にはAを横向きにしたようなヘラ記号を確認できる。胎土は密で焼成は良好。内面は黒灰色、外面は黒灰色～灰褐色を呈する。003は前方部採集の甕の口縁部。内外ともヨコナデを施す。頸部にヘラ記号有り。胎土は密で焼成は良好。内外とも灰色を呈する。また、002と同様に自然釉がかかる。

1号墳の土器は表採であり、なおかつ破片であるために古墳の時期を示す良好な資料とはいえないかもしれないが、前方後円墳集成編年9期の6世紀後半頃の比定されるものと考える。2号墳は土器等の資料がなく年代根拠が弱いが、後円部を1号墳の前方部と接して築造されており、1号墳の前方部を意識して後円部をつくっている感がある。そこで2号墳は1号墳に後出する時期の前方後円墳集成編年[15] 9期を考える。

Fig. 16　大石岡ノ谷1号墳石室内
造成工事によって開口した石室内に入って撮られた写真『つやざき明治百年記念発刊』昭和48年発行より

# Ⅴ　津屋崎古墳群の形成

津屋崎古墳群が「胸形君（むなかたのきみ）」一族の墳墓として認識されているのは論をまたない。今回調査した在自剣塚古墳、生家大塚古墳、大石岡ノ谷古墳群を理解する上で、他の津屋崎古墳群について以下に考察する。

## １．勝浦高原古墳群

所在地：勝浦字高原
立　地：宗像市との境である山地から西方へ延びる丘陵尾根線上標高20～34m
築造時期：前方後円墳集成編年10期
総　数：13基（前方後円墳１基、円墳12基）
現存数：11基（前方後円墳１基、円墳10基）
調査歴：①1994年ゴルフ場造成に伴って、２・３号墳を発掘調査した。
　　②1998年墓地改葬に伴って、11号墳の範囲確認調査をした。
文　献：①安武千里編『勝浦北部丘陵遺跡群』津屋崎町文化財調査報告書第13集　津屋崎町教育委員会1998年
　　②池ノ上宏編『津屋崎町内遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第19集　津屋崎町教育委員会2002年

### １）古墳群の概要

勝浦高原古墳群は津屋崎古墳群の中でも最北に位置する古墳群である。古墳は標高165ｍの桂岳から北へ延びた丘陵の派生丘陵上標高20～34ｍに位置する。

1994年ゴルフ場造成に伴う１次調査では、２・３号墳を発掘調査し、他の１号墳、４号墳～10号墳の墳丘測量を光波測距機で行った。[文献①]

1998年墓地改葬に伴って、11号墳の墳形確認を兼ねた範囲確認調査をした。２次調査[文献②]

各古墳の内容は、次の通りである。

**１号墳**　推定径10ｍの円墳で内部に単室の横穴式石室をもつ。石室の規模は現状で2.8×2.0ｍの縦長プランを呈する。

**２号墳**　開墾によって石室の奥壁と側壁が１個残っているだけであった。中世墓として再利用されたようで、中世の土師皿が出土している。調査後破壊。

**３号墳**　径12ｍの円墳で複室の横穴式石室をもつ。石室につく短い羨道は石室と同時期に作られたものではなく、後から付設されたようである。後室は中世墓として再利用されており、その際に石が抜かれたようであるが、痕跡から後室の奥壁に併行して屍床仕切石があったようである。調査後破壊。

**４号墳**　推定径26ｍの２段築成の円墳である。葺石をもつ。

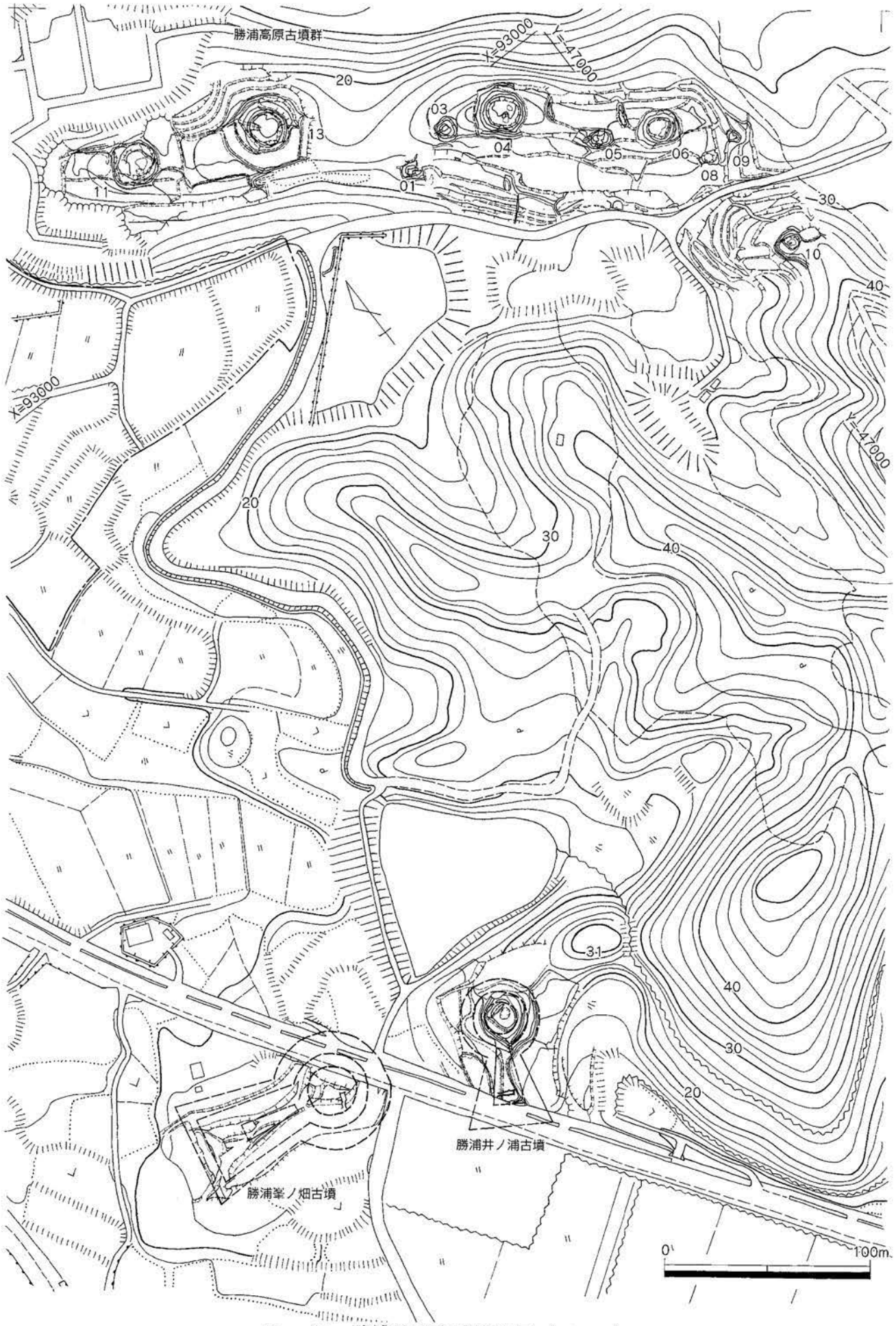



Fig. 17　勝浦地区古墳位置図（1/2000）

**5号墳**　推定径13mの円墳である。内部に複室の横穴式石室をもつ。後室の規模は現状で3.0×2.4mの縦長プラン、前室は1.5×2.2mの横長プランを呈する。奥壁に石棚をもつ。

**6号墳**　推定径23mの円墳である。

**7号墳**　開墾により墳丘は失われている。石室の天井石が露出している。石室は複室の横穴式石室である。後室の規模は現状で1.7m四方の正方形プラン、前室は1.2×1.7mの横長プランを呈する。後室・前室ともに奥壁・両側壁を一枚石で構築している。

**8号墳**　推定径14mの円墳。

**9号墳**　推定径20mの円墳。

**10号墳**（旧　津屋崎7号墳　勝浦10号墳）一番高所の標高34mに位置する推定径14mの円墳。

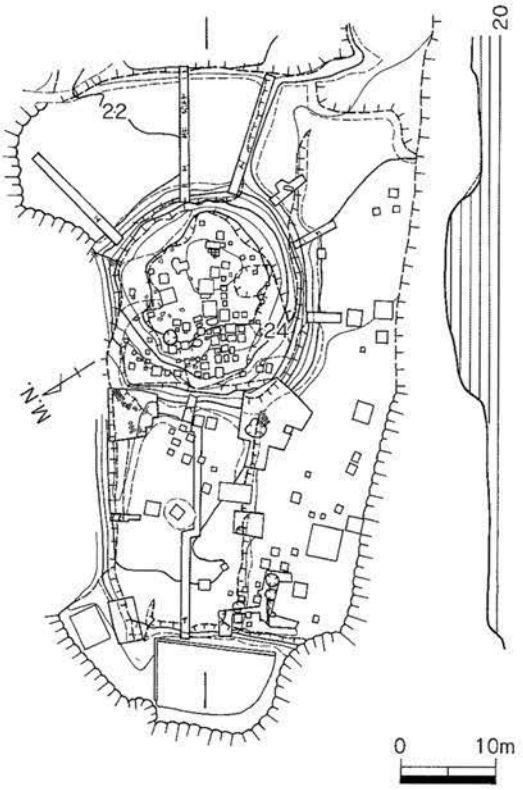



Fig. 18　11号墳墳丘測量図（1/800）

**11号墳**（Fig. 18）（旧　津屋崎2号墳　勝浦2号墳）古墳群の中で一番西側の丘陵先端部標高20mに位置する前方後円墳である。古墳は主軸方向がN－57°－Wで前方部を北西に向ける。墳丘規模は全長49m、後円部径26m、後円部高3m、前方部幅16m、前方部長23m、くびれ幅14mを測る。古墳は勝浦浜の墓所として利用されており削平が著しい。昭和37年の納骨堂完成による墓地改葬によっても攪乱を受けている。墳丘規模確認のトレンチ調査中、弥生時代中期の貯蔵穴を検出して調査した。中から滑石製銅鐸鋳型未製品が出土している。

**12号墳**　開墾によって墳丘は失われている。

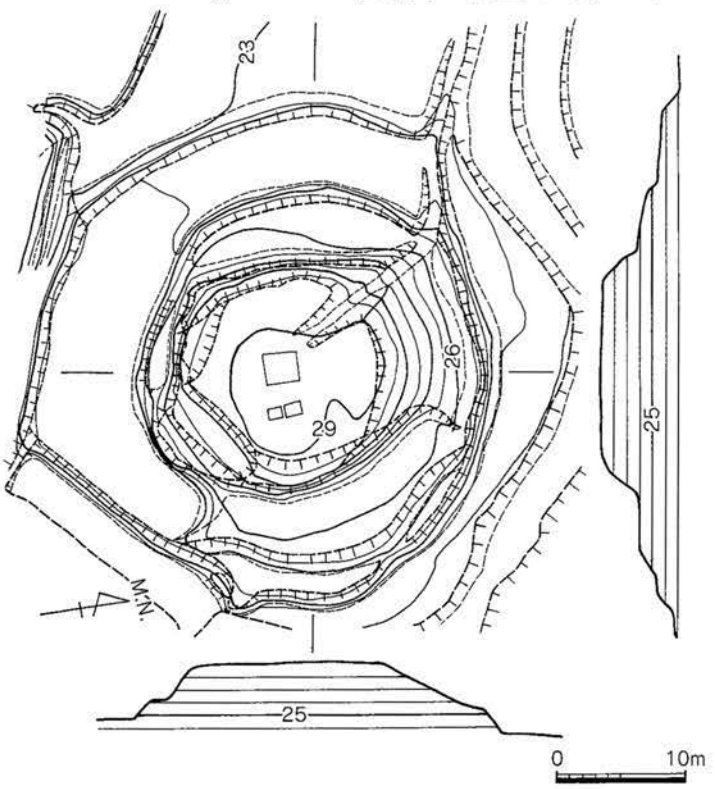



Fig. 19　13号墳墳丘測量図（1/600）

**13号墳**（Fig. 19）（旧　津屋崎1号墳　勝浦1号墳）　推定径31m、高さ4.2mの古墳群中では最大の円墳である。

### 2）古墳の築造時期と古墳群の消長

内部調査を行った古墳は2基（2・3号墳）の円墳だけであり、築造時期及び古墳群の消長は不明である。2号墳は6世紀後半の古墳だと考える。11号墳も6世紀後半の古墳だと考える。

### 3）古墳群の特質

周辺の丘陵部には宗像市側を含めて古墳が多数存在するようである。多くは群集墳と考えられるが、桜京古墳のように前方後円墳であり、内部に装飾をもつ古墳もある。勝浦高原古墳群には、前方後円墳と径が26mと31mの大きな円墳があり、石室内部に石棚をもつ円墳を含んでいる。胸形君を支えた在地小豪族の墓ではないかと考える。

## 2．勝浦峯ノ畑古墳（旧　津屋崎41号墳、勝浦14号墳）

所在地：勝浦字峯ノ畑
立　地：宗像市との境である山地から西方へ延びる丘陵尾根線上標高15m
築造時期：前方後円墳集成編年7期
調査歴：①1975年、県道（現在の国道495号線）の工事に伴い、県教委による発掘調査。後円部を一部削るが、石室は残る。
文　献：①川述昭人「1．第41号墳」『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書第54集　1977年
②橋口達也「3．周辺大形古墳との関係－特に勝浦古墳群との時間的対比」『新原・奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第6集　1989年
③高久健二「津屋崎41号墳（勝浦14号墳）」『前方後円墳集成　九州編』山川出版　1992年
④佐田茂「勝浦峯ノ畑古墳」『津屋崎町史　通史編』津屋崎町　1999年

### 1）古墳の概要

勝浦峯ノ畑古墳は勝浦井ノ浦古墳のすぐ西側にある前方後円墳である。宗像市との境である山地から西方へ延びる丘陵尾根線上標高15mに位置する。古墳時代当時には古墳から、津屋崎から入り込んだ入り海の最奥部まで南方向に500m、玄界灘へは西方向へ400mの距離に造られていた。周辺の水田からの比高差10mを測る。

**墳丘**　古墳は主軸をN－74°－Wにとり、前方部を西に向けている。開墾によって墳形は相当崩れているが、墳長は復原すると97m、後円径58m・高さ6.8m、前方部幅54m・長50m・高さ6.5m、くびれ幅32m、後前高差－0.3mを測る。

**外表施設**　埴輪・葺石あり

**内部主体**　後円部にくびれ部に向かって南南西方向に開口する単室の横穴式石室。石室規模は長さ4.3m、高さ1.8m、奥壁部幅2.5m、玄門部幅2.15mで羽子板状プランを呈する。

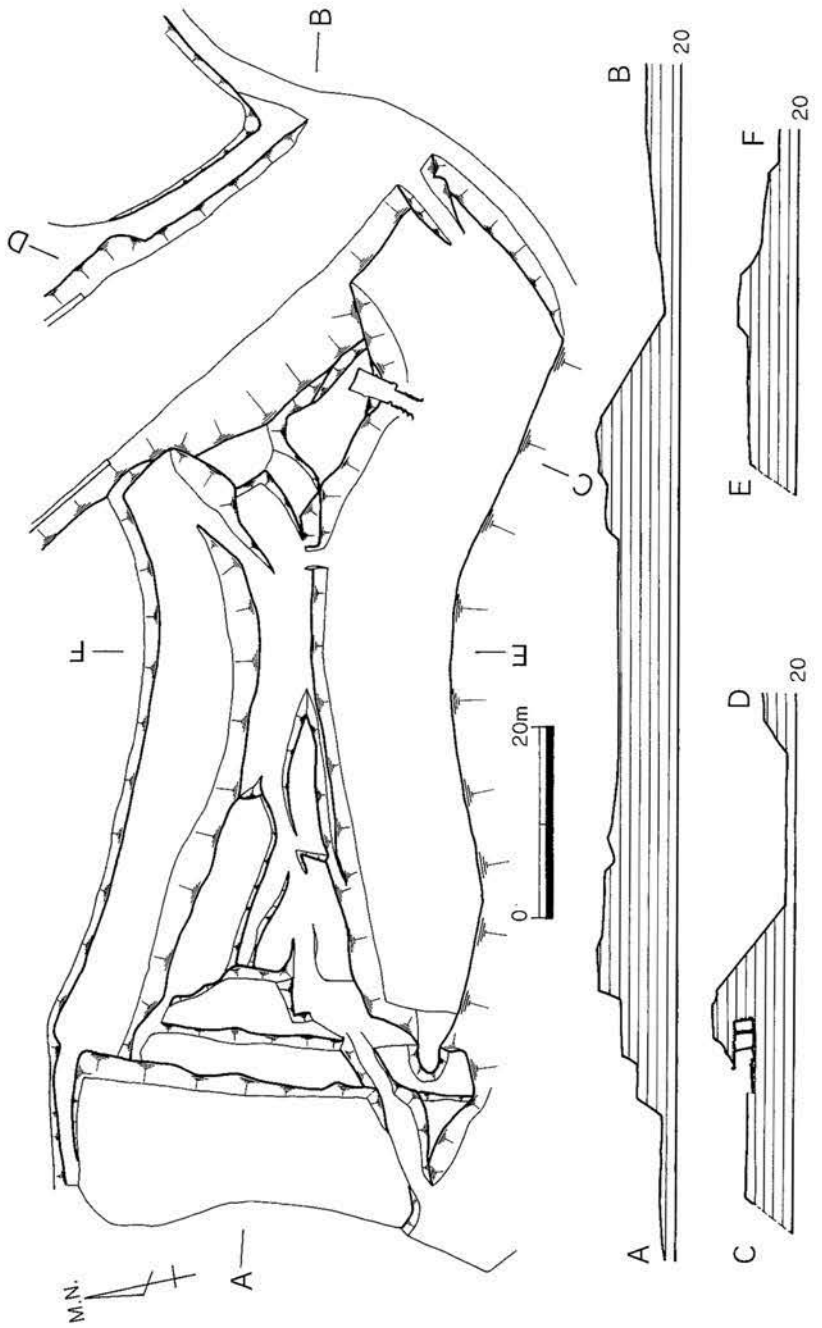



Fig. 20　勝浦峯ノ畑古墳墳丘測量図（1/800）

玄門間には柱状の仕切石が置かれ、ここに一枚の板石を扉状に立てかけて閉塞石としている。石室を３等分する位置に石柱を立てるのが特色である。

**出土遺物**　三重県神前塚古墳出土鏡と同笵鏡の可能性のある画文帯神獣鏡、連弧文鏡、珠文鏡など７面の鏡。武器として鹿角装具付き大刀40振以上、鹿角装具付き剣４振、素環頭大刀か剣、銀製鞘尻金具、鉄鏃30以上がある。武具の短甲。工具は鹿角装具付き刀子６本、鉄刀子21本。装身具は銅釧、ガラス連玉６、ガラス玉１万以上、琥珀製棗玉92個以上、琥珀製勾玉８、翡翠製勾玉、碧玉製管玉４、ガラス製管玉、琴珞５がある。

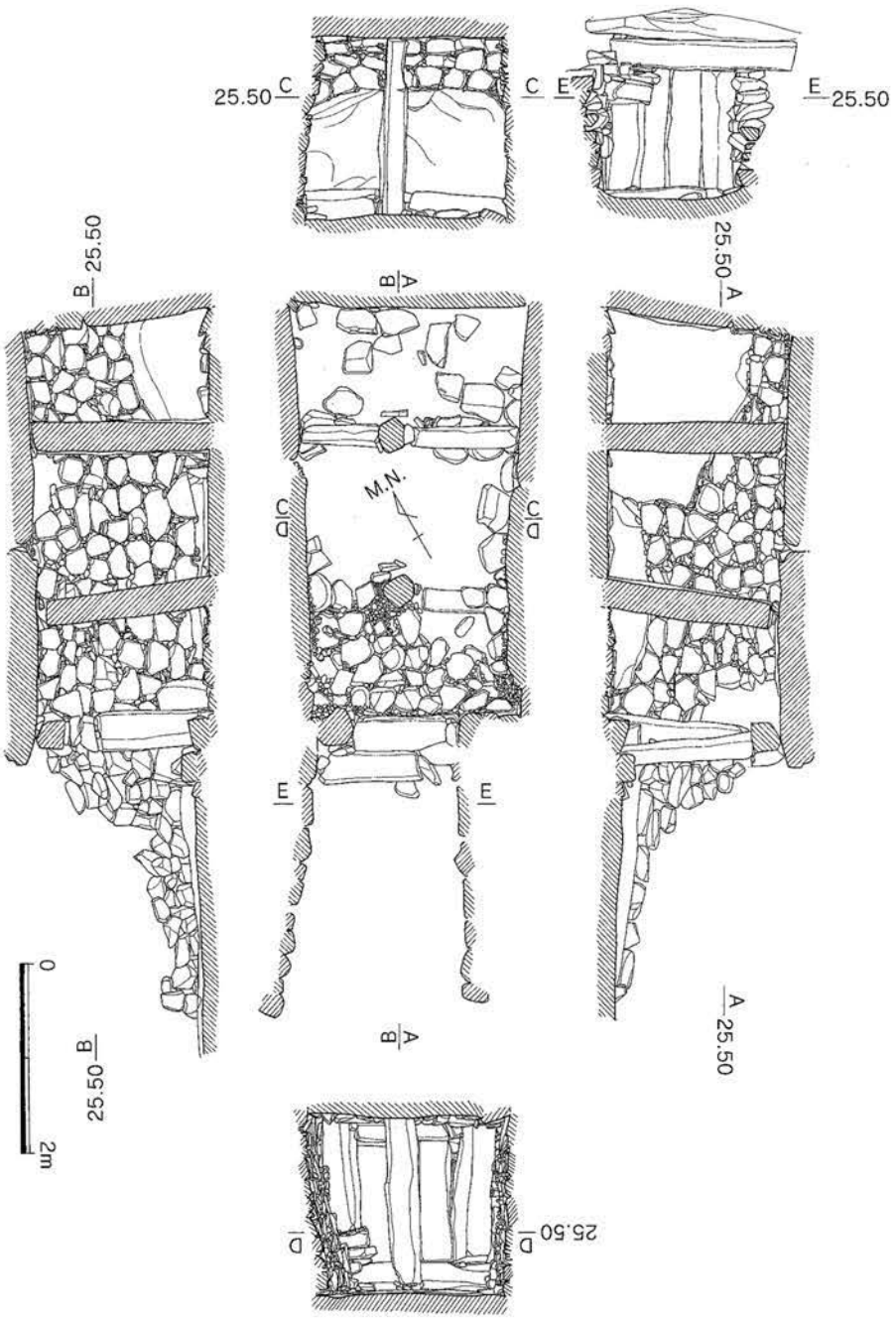



Fig. 21　勝浦峯ノ畑古墳石室実測図（1/80）

### 2）古墳の築造時期

挂甲片をもたない点から勝浦井ノ浦古墳よりも古いと考えられている。[文献②] 石室形態等を考えて前方後円墳集成編年７期と考える。

### 3）古墳群の特質

石室内に石柱をもつ古墳は国内では例がない。類例としては高句麗の双楹塚（そうえいづか）古墳をあげられる。石室内に石柱を立てる方法は、家屋を表現する漢代の横穴式石室に見られ、中国東北部から高句麗へと伝わったと考えられている。この家屋を意識した石室構造の伝統が間接的に伝わった結果がこの石柱と考えられている。[文献④]

## 3．勝浦井ノ浦古墳（旧　津屋崎10号墳、勝浦12号墳）

所在地：勝浦字井ノ浦
立　地：宗像市との境である山地から西方へ延びる丘陵縁辺部の標高20m
築造時期：前方後円墳集成編年７期
調査歴：①1975年、県道（現在の国道495号線）の工事に伴い、県教委による発掘調査。前方部を一部削るが、石室は残る。
文　献：①川述昭人「１．第10号墳」『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書第54集　1977年
②橋口達也「３．周辺大形古墳との関係－特に勝浦古墳群との時間的対比」『新原・奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第６集　1989年
③高久健二「津屋崎10号墳（勝浦12号墳）」『前方後円墳集成　九州編』山川出版　1992年
④佐田茂「勝浦井ノ浦古墳」『津屋崎町史　通史編』津屋崎町　1999年
⑤石山勲「Ⅳ結語」『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書第54集　1977年

### １）古墳の概要

**墳丘**　古墳は主軸をN－145°－Wにとり、前方部を南西に向ける３段築成の前方後円墳。開墾によって墳形は相当崩れているが、墳長は復原すると70m、後円径37m・高さ7m、前方部幅37m・長37m・高さ4.5m、くびれ幅17m、後前高差－1.5mを測る。

**外表施設**　埴輪・葺石あり

**内部主体**　前方部に墳丘主軸と直交して北西方向に開口する無袖の竪穴系横口式石室がある。石室規模は長さ4.2m、奥壁部幅1.35m、玄門部幅0.95mである。天井石は盗掘時に持ち去られていて高さは不明。現存高1.3mで当初も大差ないと考えられている。玄武岩の割石を使い石室を構築している。横口部は石室の腰石大の石を２段横積みにして閉塞して

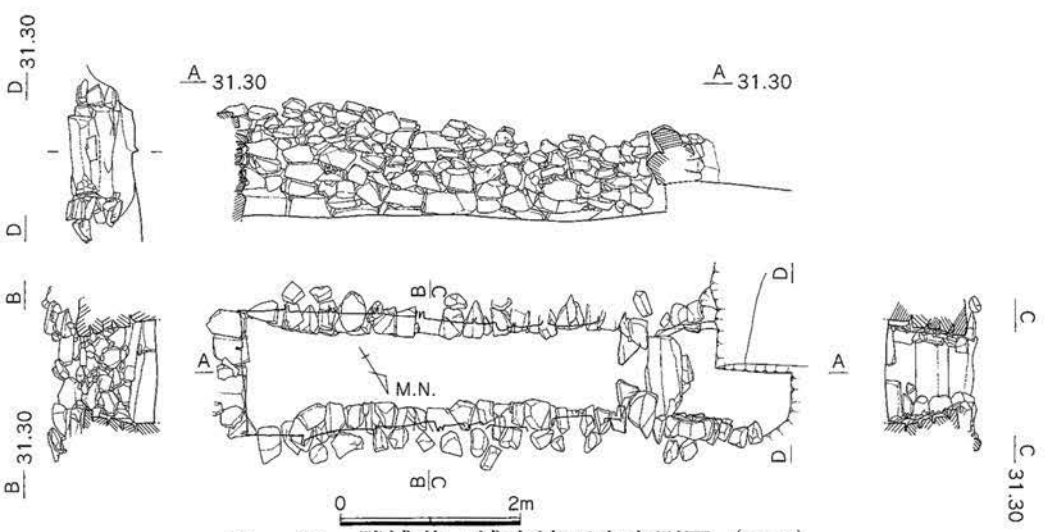



Fig. 22　勝浦井ノ浦古墳石室実測図（1/80）

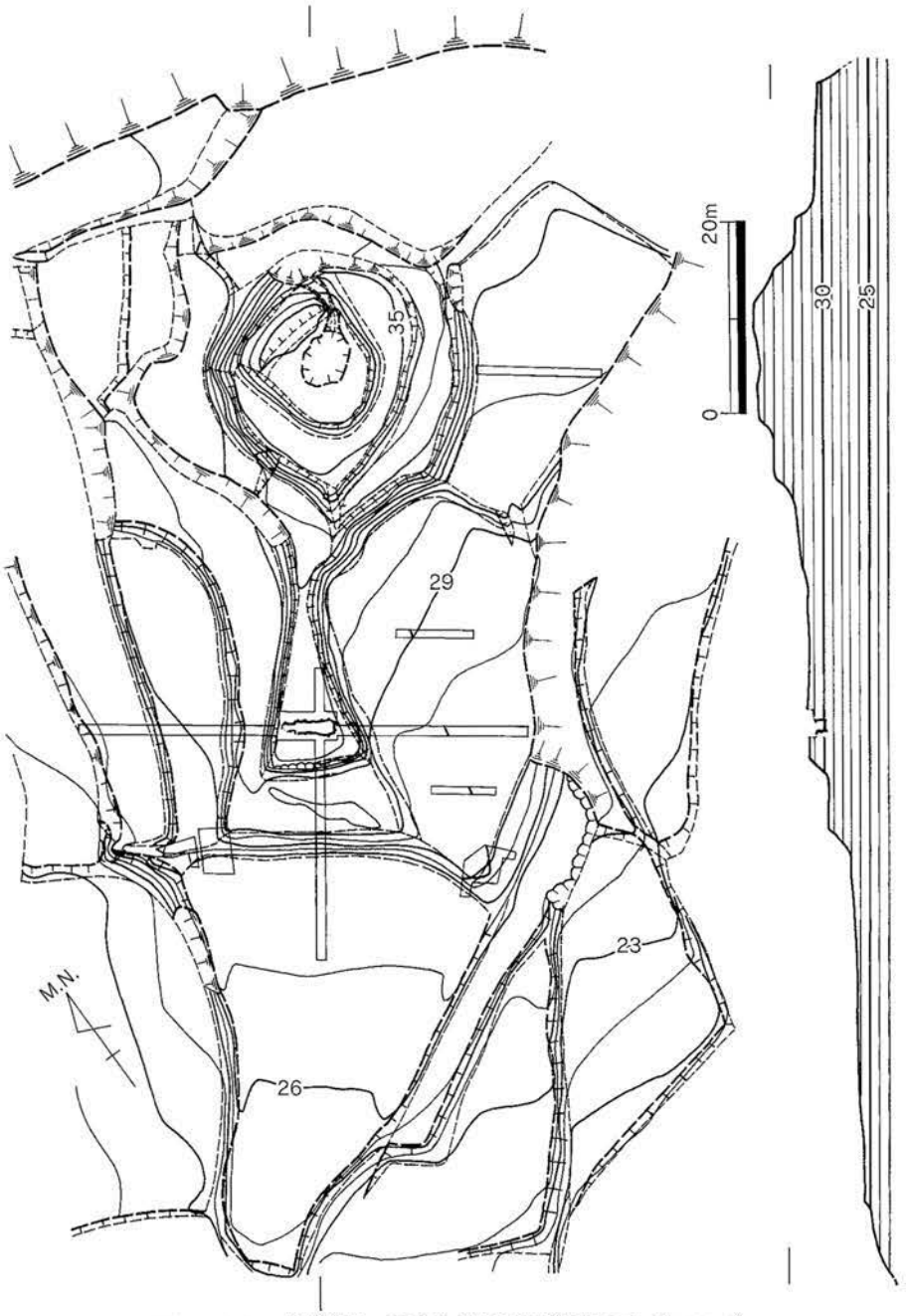



Fig. 23　勝浦井ノ浦古墳墳丘測量図（1/800）

いる。福岡市の老司古墳４号石室や朝鮮半島忠清南道の論山表井里１号墳と類似している。宗像に多い竪穴系横口式石室の出発点と考えられている。[文献④]

**出土遺物**　武器として大刀、鉄矛11本、石突8個がある。武具の挂甲、金銅装の挂甲、短甲。工具は鉄斧２。馬具は三環鈴、鉄地金銅張杏葉10、木心鉄板被壺鐙１対、鉄地金銅張鋲留金具22、鋲留金具10、鉸具10、轡２、金銅張磯金具、銅製鞍２、鞍金具がある。装身具は六葉形金具がある。

**２）古墳の築造時期**

前方後円墳集成編年７期と考える。勝浦峯ノ畑古墳より新しいと考えられている。[文献2]

**３）古墳群の特質**

三環鈴を持つ人物を朝鮮へ渡った将軍と考える説もある。[文献⑤]

## 4．新原・奴山古墳群

所在地：大字奴山
立　地：東側の山塊から西に細長く延びる台地上
築造時期：前方後円墳集成5～10期
総　数：58基(前方後円墳5基、円墳52基、方墳1基)
現存数：40基(前方後円墳5基、円墳34基、方墳1基)
調査歴：①1976年、国道建設に伴い1、2、3、4号墳の発掘調査を行なう。[文献①]
②1980年、農協関連施設建設に伴い5、6号墳の発掘調査を行なう。[文献②]
③1985～1989年、重要遺跡確認調査として国庫補助を受けて古墳群の墳丘測量調査、範囲確認調査を行なう。[文献③][文献④]
④1995年、圃場整備に伴い44、45、49、50、52、53、54号墳の発掘調査を行なう。[文献⑤]

文　献：①石山勲編『新原･奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書　第54集　福岡県教育委員会　1977
②児玉真一編『奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書　第3集　津屋崎町教育委員会　1981
③橋口達也編『新原･奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書　第5集　津屋崎町教育委員会　1987
④橋口達也編『新原･奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書　第6集　津屋崎町教育委員会　1989
⑤池ノ上宏編『新原･奴山古墳群Ⅱ』津屋崎町文化財調査報告書　第17集　津屋崎町教育委員会　2001

### 1） 概要と特徴

津屋崎町に所在する古墳群の中で、最も密集度の高い古墳群である。東西に延びる約800mの台地上に古墳が築造されている。現在までに道路建設･圃場整備等によって、いくつかの古墳が調査されている。

**1号墳**は、県道建設に際して調査された前方後円墳である。古墳は主軸をN－50°－Wにとり、前方部を北西に向けている。墳丘は、全長約50m、後円部径29m、高さ4.6m、前方部幅31m、高さ3.7mを測る。石室内は盗掘が激しかったが、武器･武具･馬具･工具･装身具などが出土している。また、羨道部においては工具類が出土しており、なかでも鉄鉗･鉄鑿など鉄器製作に関わる遺物が出土していることは注目される。

**2号墳**は径13.3m、高さ2.7mの円墳で、2～2.5mほどの浅い周溝が存在する。単室の横穴式石室で、盗掘が激しく石室内からは鉄鏃･装身具が出土するのみである。調査後破壊。

Fig. 24　新原・奴山古墳群分布図（1/4000）

3号墳は墳丘が完全に削平されており、石室周辺部が残存するのみであった。しかし残存していた周溝から墳丘の径が推測され、径13.5mほどの円墳に復元できる。単室の横穴式石室で、武器･装身具が出土している。また、羨道からは須恵器が出土している。調査後破壊。

4号墳は径13.5m、高さ1.9mの円墳で、浅い周溝をもつ。単室の横穴式石室で、石室内からは武器･工具･馬具･装身具などが出土している。調査後破壊。

5号墳は径13m、高さ2～3mの円墳で、単室の横穴式石室をもつ。石室内からの遺物は刀子4点、須恵器のみと少ないが、墳丘中より古墳築造に伴う祭祀に用いられたと思われる土器群が検出されている。調査後破壊。

6号墳は径10.6m、高さ1.7mの円墳で、単室の横穴式石室をもつ。石室内からは武器･工具･装身具などが出土している。調査後破壊。

7号墳は一辺20～24m、高さ2.2～2.7mの方墳である。墳丘上から、初期須恵器片･鉄斧･琥珀原石などが採集されており、祭壇を兼ねた古墳かとも指摘されている。

8号墳は径10m、高さ１～2mほどの円墳。

9号墳は円墳であると思われるが、墳丘の大部分を削平されている。

10号墳は現況において径12m、高さ2.6～3mをはかる円墳。

11号墳は径12～13.5m、高さ約2.5mの円墳。

12号墳は主軸をN－120°－Wにとり、前方部を南西に向けている。墳丘は、現況で全長43m、後円部径25m、高さ5.1m、前方部幅29.5m、高さ6m、くびれ部幅21mを測る前方後円墳である。

13号墳は径11.5～14m、高さ1.6～3mの円墳。

14号墳は径14m、高さ2.2～3mの円墳。

15号墳は径18～19m、高さ4.1～5mの円墳。

16号墳は本来、円墳であると思われるが盗掘によって墳丘は削平を受けている。現況で70cmの高まりが認められる。

17号墳は径11m、高さ1～1.7mの円墳。

18号墳は径10m、高さ1.5mの円墳。

19号墳は径9.5～11.5m、高さ2mの円墳。

20号墳は径29m高さ5m強の円墳。

21号墳は径16～17m、高さ2.3mの円墳で、墳頂に県指定文化財である百塔板碑が建っている。トレンチ調査によって周溝が確認されている。

22号墳は推定で全長80mほどの前方部を西に向ける前方後円墳になると思われる。22号墳は新原･奴山古墳群の中心の位置を占め、規模も最大である古墳である。現在は前方部は残存していないが、トレンチによってくびれ部を確認していることから、前方後円墳であることがわかっている。後円部径は54m、高さ7.8m、周溝幅は7.5～11mを測る。須恵器･円筒埴輪が採集されている。

23号墳は径12m、高さ1.5mの円墳。

24号墳は主軸をN－20°－Wにとり、前方部を北に向けている。墳丘は、全長53.5m、後円部径31m、高さ7m弱、前方部幅28.5m、高さ5m弱、くびれ部幅14mを測る前方後円墳。トレンチ調査によって幅4mほどの周溝をもつことが確認されている。

25号墳は径35～36m、高さ5.7～6.3mの円墳である。トレンチ調査によって幅12.5～13.5mの周溝が確認されている。

26号墳は径14.5～17m、高さ3.5mの円墳。

27号墳は径11.5～15.5m、高さ2～2.5mの円墳。

28号墳は径12.5～15m、高さ2～2.5mの円墳。

29号墳は径10.5～12m、高さ1.5mの円墳。

30号墳は主軸をN－70°－Wにとり、前方部を西に向けている。墳丘は、全長54m、後円部径27.5m、高さ8m、前方部幅34m、高さ4m、くびれ部幅15.5mを測る前方後円墳。器台の脚部を採集。

31号墳は円墳であるが、墳丘が削平を受けており8m×13mのやや方形となる。高さは2.5～3mほどである。

32号墳は墳丘が変形しているが円墳である。高さは2mを測る。

33号墳は墳丘が削平されており、石室周辺のみが残っている。現況の径は8m、高さは1～1.5mを測る。

34号墳は径24m、高さ5～5.8mの円墳である。横穴式石室に石棚を持っている。

35号墳は径13m、高さ1.4mの円墳。

36号墳は径16～17m、高さ4mの円墳。

37号墳は径13～14m、高さ3mの円墳。

38号墳は円墳であるが、削平を受けて8m×9mの方墳状を呈する。高さは1.5mを測る。

39号墳は墳丘が完全に除去されている。現況では、横穴式石室の天井石が露出。

40号墳は径17～18m、高さ3.5～4.5mの円墳。

41号墳は径10m、高さ1.2～2mの円墳。

42号墳は径11.5m、高さ2.1mの円墳。

43号墳は水田･畑の畦畔によって石室の周辺が残っているのみである。

44号墳は径15mの円墳である。複室の横穴式石室で、石棚をもつ。(Fig.46) 奥室から出土した長さ35cmを測る鋸は注目される遺物である。他に奥室から金環、留金具、鞍金具、刀子が出土し、前室から鉄斧、鉇、鑿、ヤス、鉋型鉄製品が出土している。鉋型鉄製品は国内での出土例を知らない、韓国の雁鴨池、咸陽白川里1号墳から出土したものは鉋形鉄器として紹介してあり、清州新鳳洞古墳群の22・33・36号墳から出土したものはサンカル(麻刀) と紹介してある。麻の表面を剥いでなめすのに使われる道具らしい。いずれにしても渡来系遺物の１つであろう。墳丘馬蹄状溝から子持台付壺が出土している。古墳は調査後破壊。

45号墳は中世墓によって削平を大きく受けており、石室床面付近のみが残存する。しかし床石も残っていない。調査後破壊。

47号墳は径17～19m、高さ1.5mの円墳。調査後破壊。

48号墳は径9.5m、高さ1mの円墳。調査後破壊。

49号墳は、墳丘は削平されて残っていないが径12mほどに復元できる。単室の横穴式石室で、内部から武器･装身具が出土している。周溝が確認されており、その中から三連鏡が出土している。調査後破壊。

50号墳は径4.2mほどの円墳と思われる。削平によって周溝しか残っていない。調査後破壊。

51号墳は円墳と思われる。削平によって周溝しか残っていない。調査後破壊。

52号墳は径14mほどの円墳と思われる。削平によって周溝しか残っていない。調査後破壊。

53号墳は径12mほどの円墳と思われる。削平によって周溝しか残っていない。調査後破壊。

54号墳は径9mほどの円墳と思われる。削平により周溝しか残っていない。調査後破壊。

55号墳は円墳と思われる。削平によって周溝しか残っていない。調査後破壊。

56号墳は円墳と思われる。削平によって周溝しか残っていない。調査後破壊。

57号墳は円墳と思われる。削平によって周溝しか残っていない。調査後破壊。

58号墳は円墳と思われる。削平によって周溝しか残っていない。調査後破壊。

59号墳は円墳と思われる。削平によって周溝しか残っていない。調査後破壊。

### 2） 築造時期と消長

新原･奴山古墳群は文献④以後、東側の一部が圃場整備によって調査され、44号墳のような重要な古墳の発見もあったが､その他の部分は1990年代以降調査が行なわれていない。したがって、橋口達也氏が文献④の中で詳述されている内容は今でも有効であると考えるので、本節に関わる内容を要約して紹介したい。

古墳群のなかで最も早い時期に属する古墳は21号墳で、周溝内出土の須恵器によって5世紀前半代でも早い頃と位置付けられている。また、これに続くと想定される22号墳は、21号墳と一部重複するような配置で築造されている。橋口氏は、21号墳を「奴山川が形成するまとまりに依拠した在地小豪族」の古墳、22号墳を「中央権力の強制によって墓地をこの地に築造した宗像君一族」の古墳と捉え、中央権力によって在地首長は古墳の造営を停止され、それ以降は規制を受けて宗像君一族がこの地に造墓を開始するようになると考えている。

古墳群の形成時期は前述したように5世紀の早い段階にあったと思われる。下限は6世紀後半頃に位置付けられる古墳がいくつか調査されているので、この辺りにおけるかと推測される。

### 3） 特質

この古墳群は先に述べたように、津屋崎古墳群の中でも最も密集度の高い古墳群である。さらに比較的良好な状態で残っているので、古墳群の一類型として参考になると思われる。この古墳群は勝浦古墳群・須多田古墳群と比較すると、円墳の数が多いということ、古墳の数は多いが勝浦峯ノ畑古墳・在自剣塚古墳に勝る規模の古墳がないこと等に気付く。このことが何に起因するのかは分からないが、類似点・相違点を把握することとその積み重ねが古墳群の性格の解明に繋がるだろうと思われる。

また、これらの古墳群が中央権力の強制により、この地に墓地を造営した宗像君一族の墓とみる場合、同様に理解される勝浦古墳群・須多田古墳群との関係は考慮されなければならないし、宗像内陸部にある古墳との関係も考えなければならない。

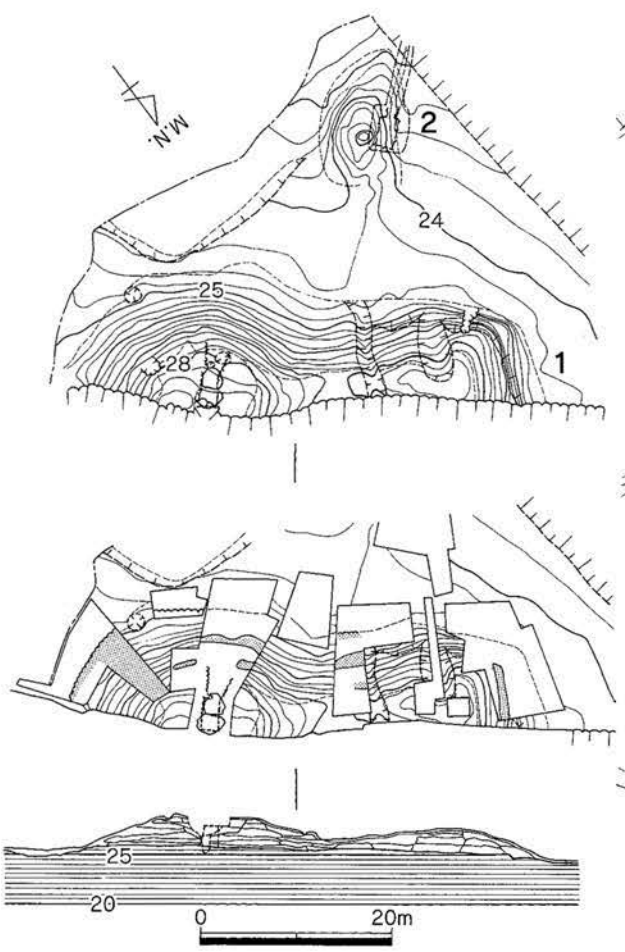



Fig. 25 1号墳墳丘測量図（1/800）

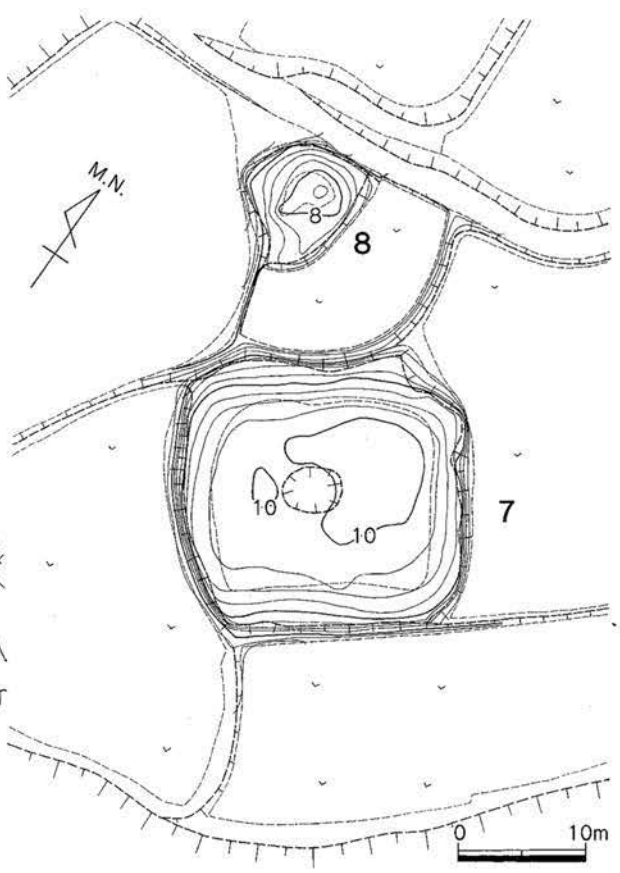



Fig. 26 7・8号墳墳丘測量図（1/600）

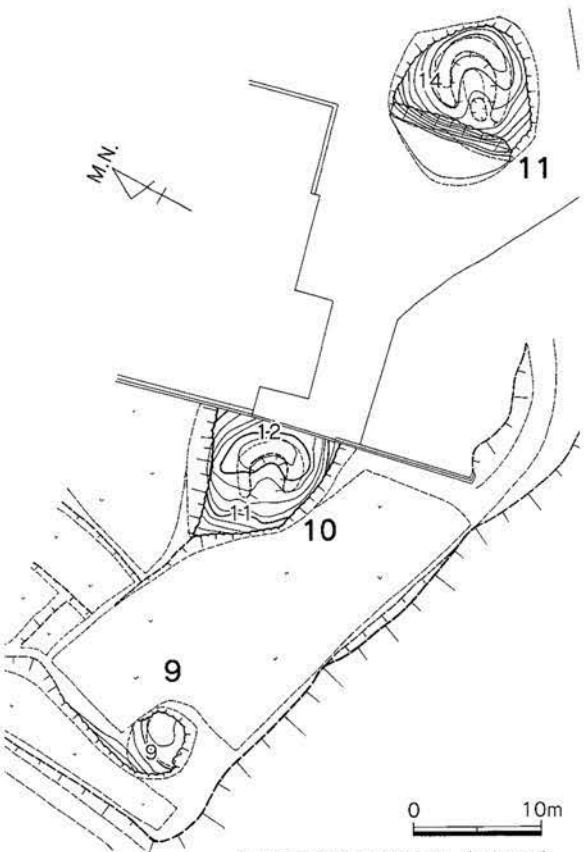



Fig. 27 9·10·11号墳墳丘測量図（1/600）

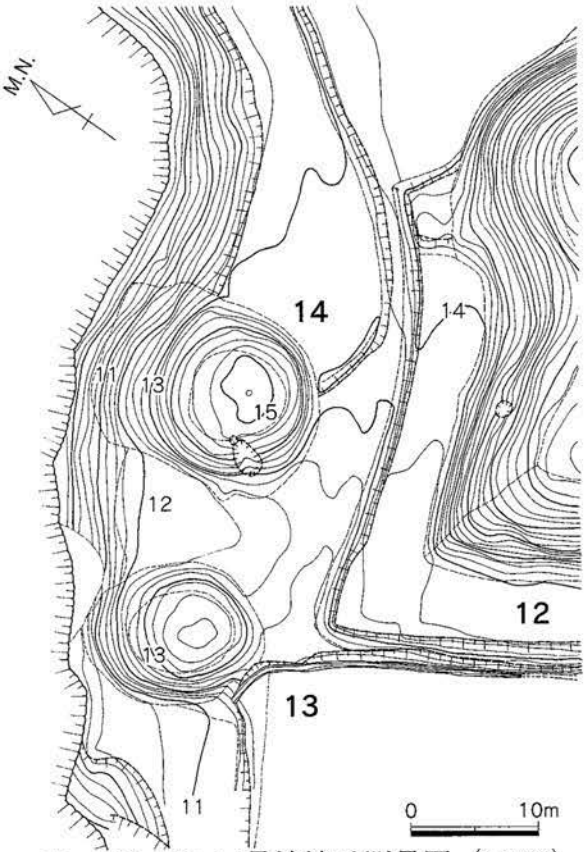



Fig. 28　13·14号墳墳丘測量図（1/600）

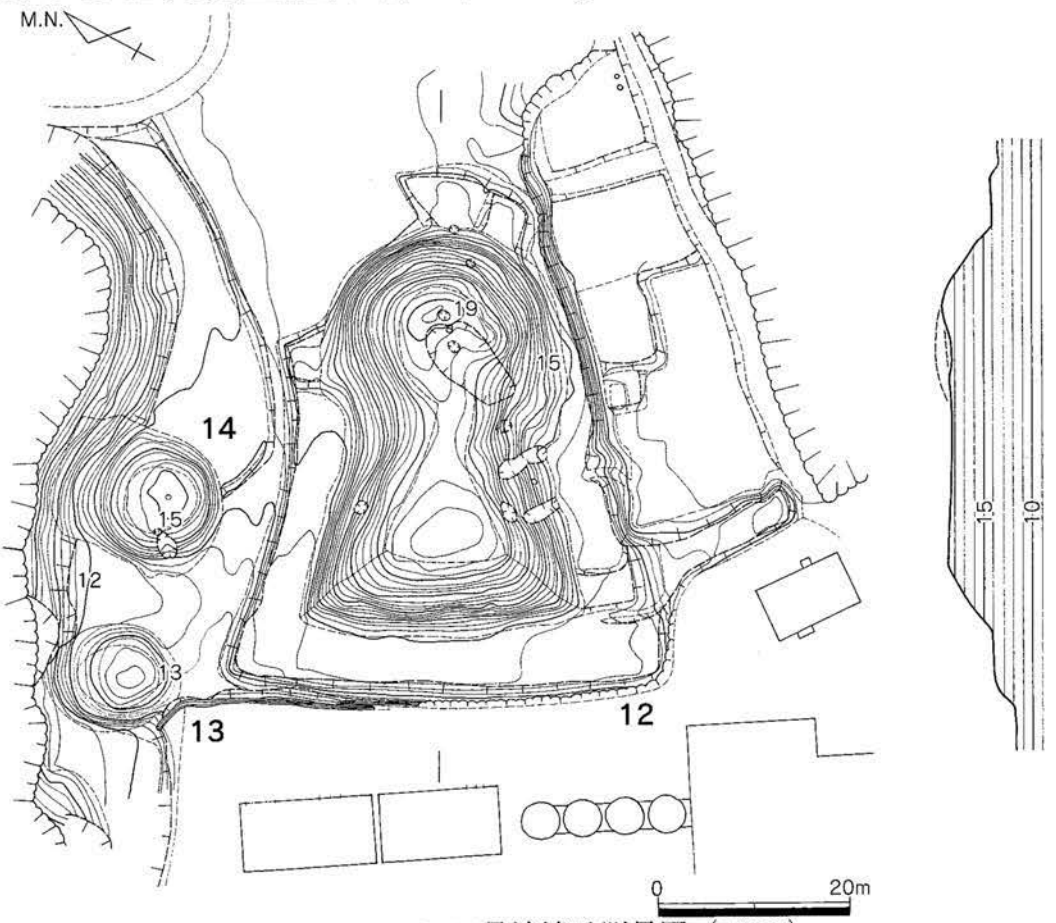



Fig. 29 12·13·14号墳墳丘測量図（1/800）

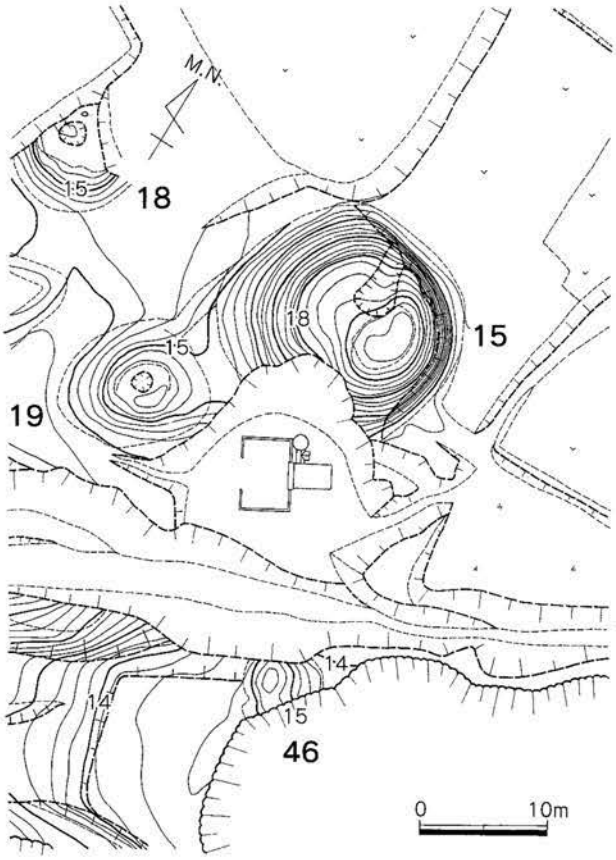



Fig. 30 15·18·19·46号墳墳丘測量図（1/600）

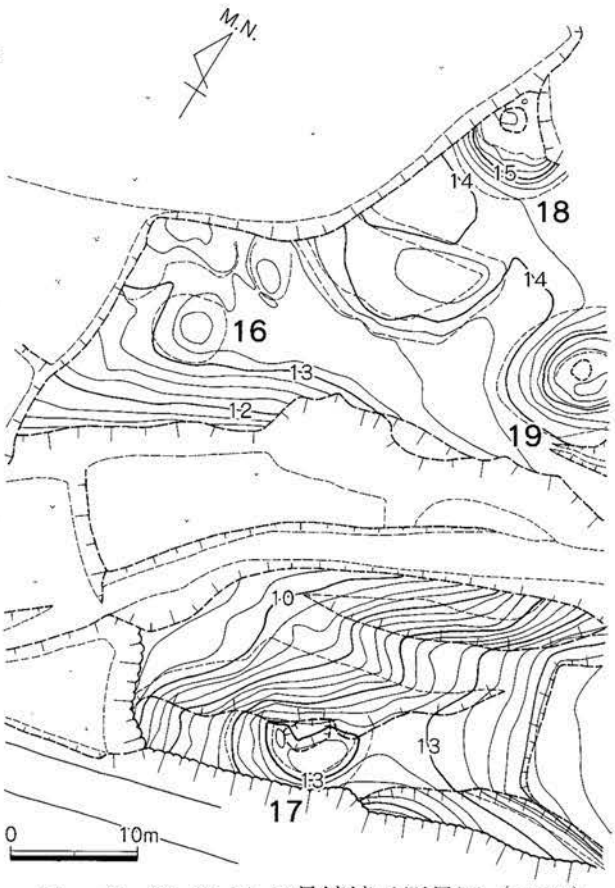



Fig. 31 16·17·18·19号墳墳丘測量図（1/600）

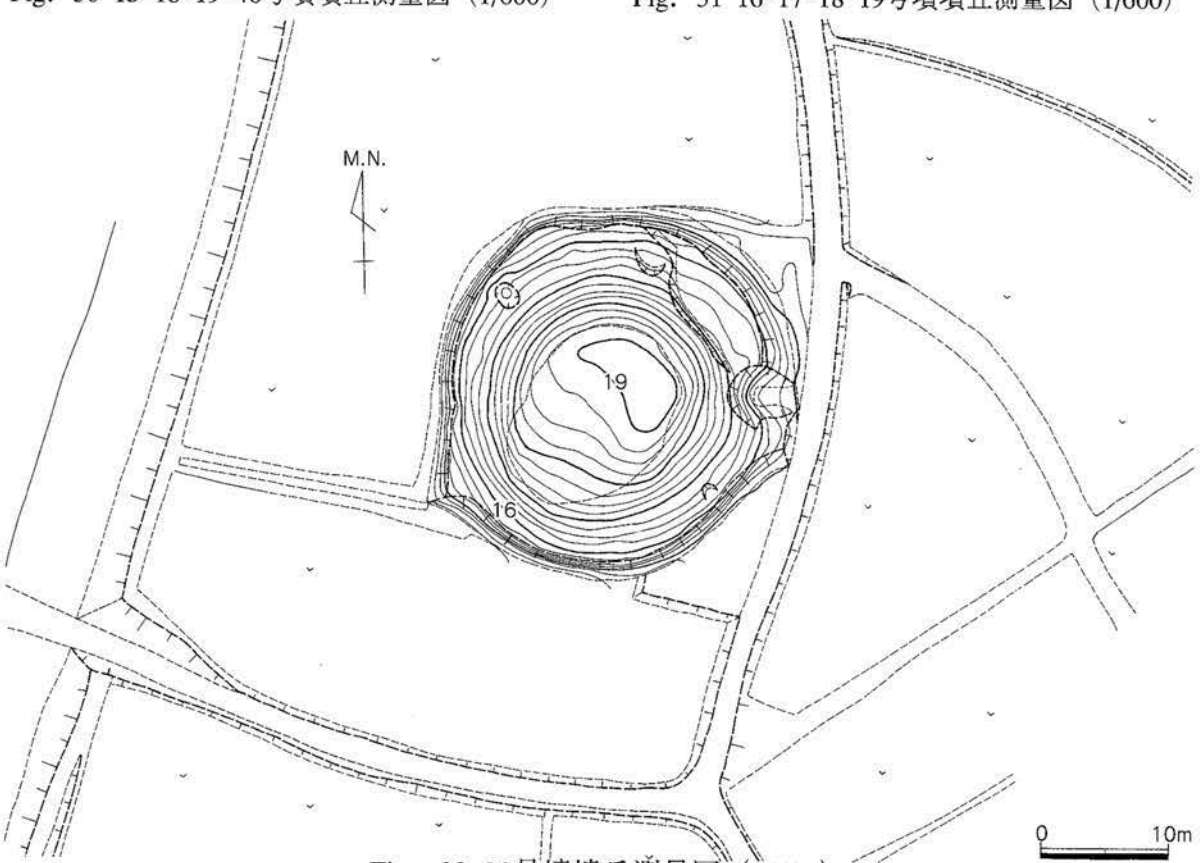



Fig. 32 20号墳墳丘測量図（1/600）

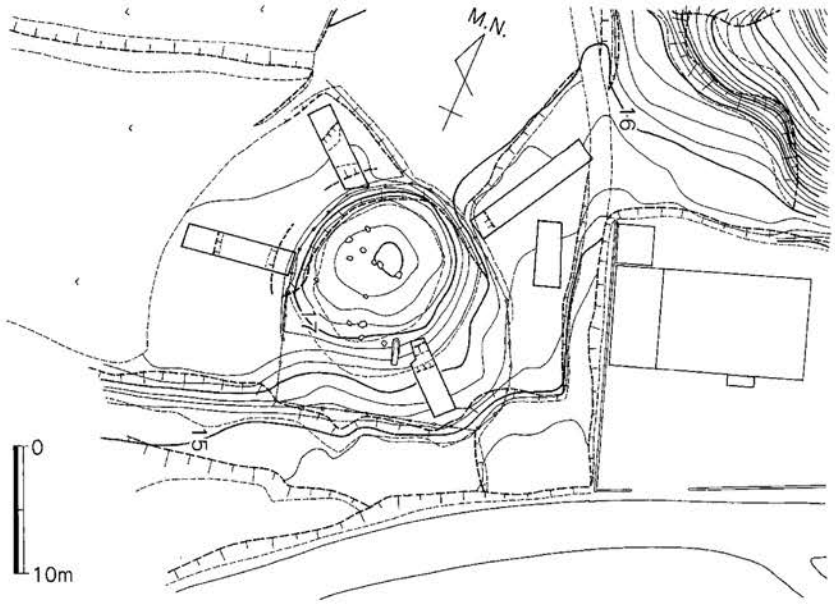



Fig. 33　21号墳墳丘測量図（1/600）

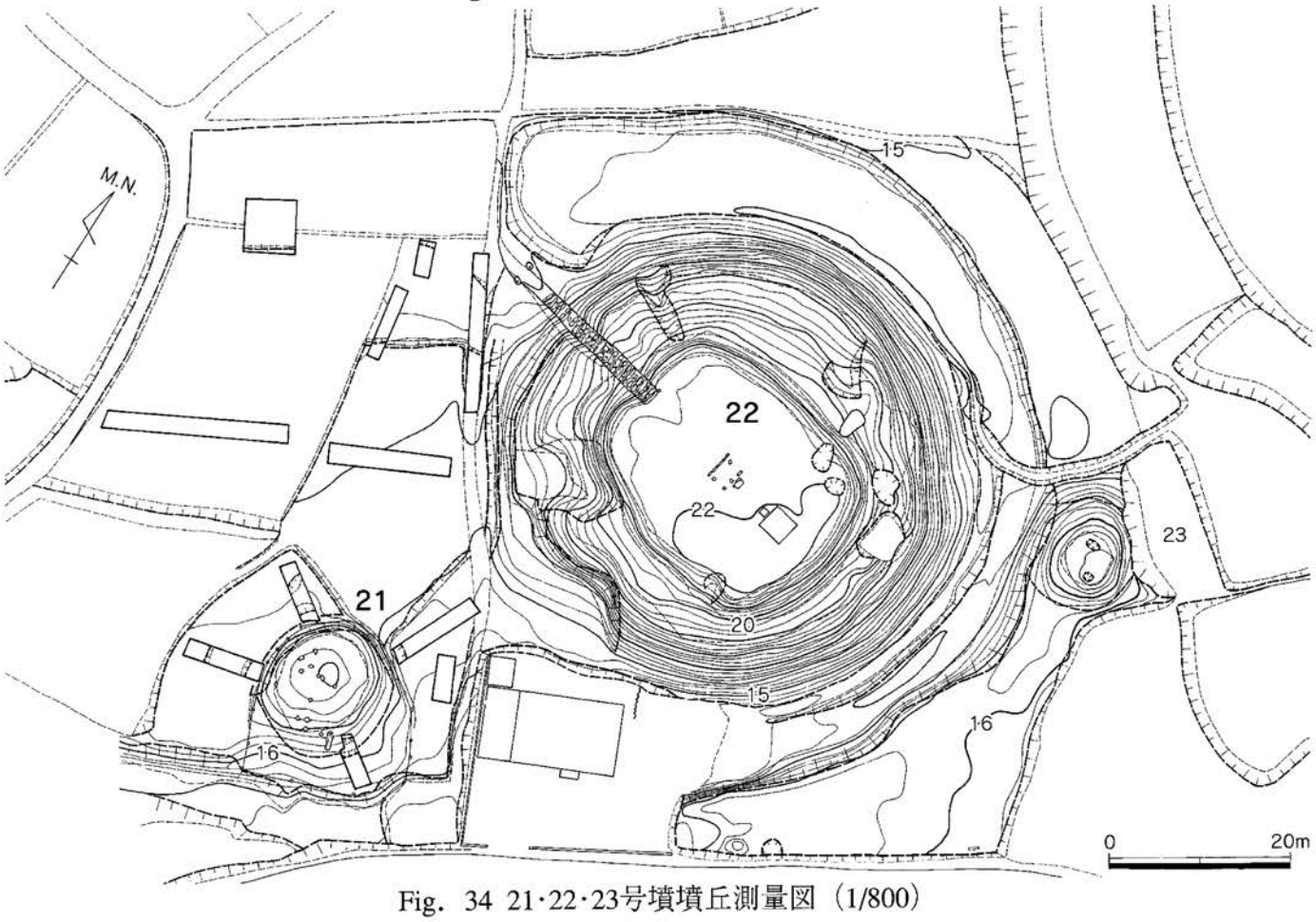



Fig. 34 21·22·23号墳墳丘測量図（1/800）

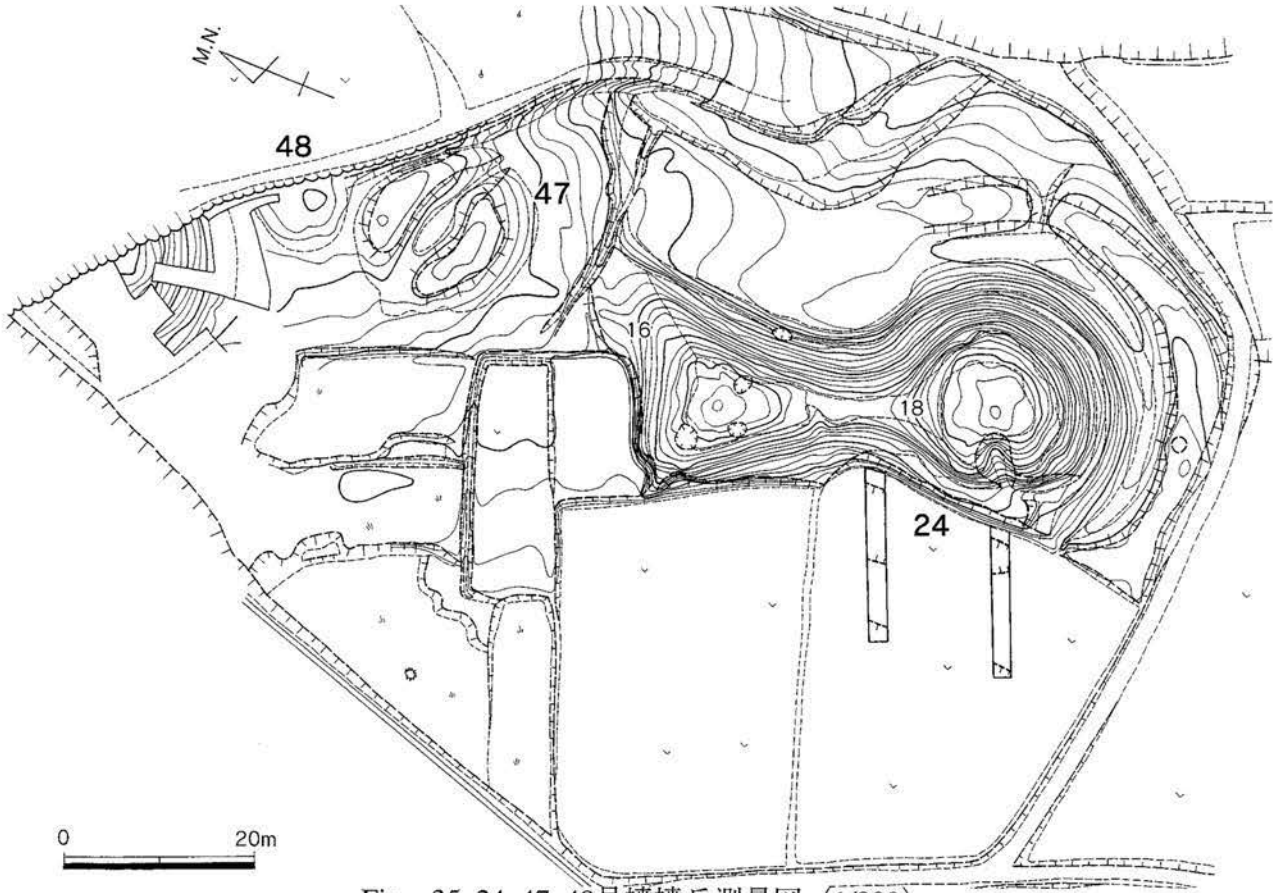



Fig. 35 24·47·48号墳墳丘測量図（1/800）

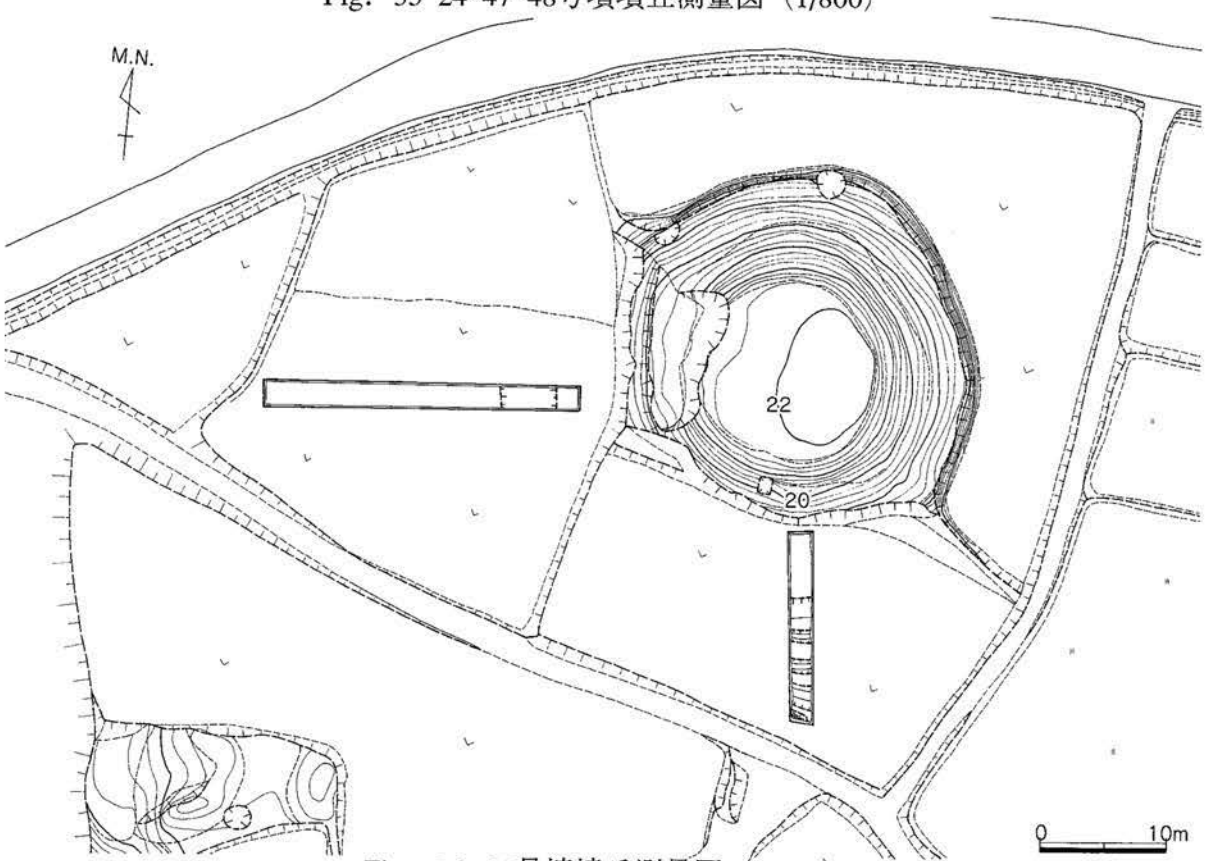



Fig. 36 25号墳墳丘測量図（1/600）

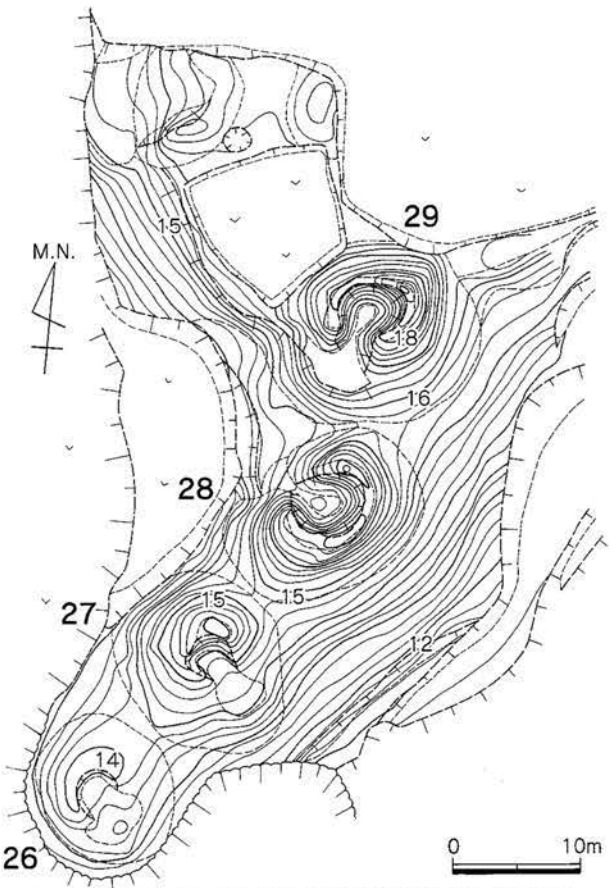



Fig. 37 26·27·28·29号墳墳丘測量図（1/600）

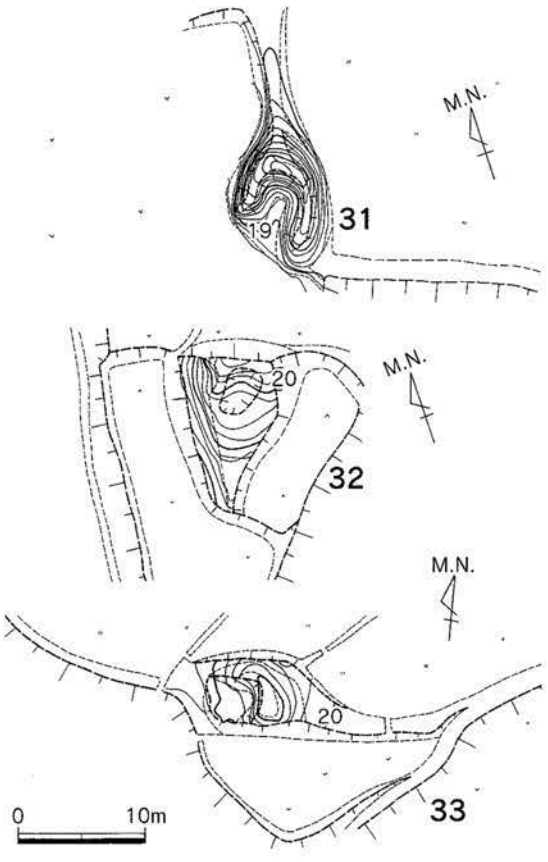



Fig. 38 31·32·33号墳墳丘測量図（1/600）

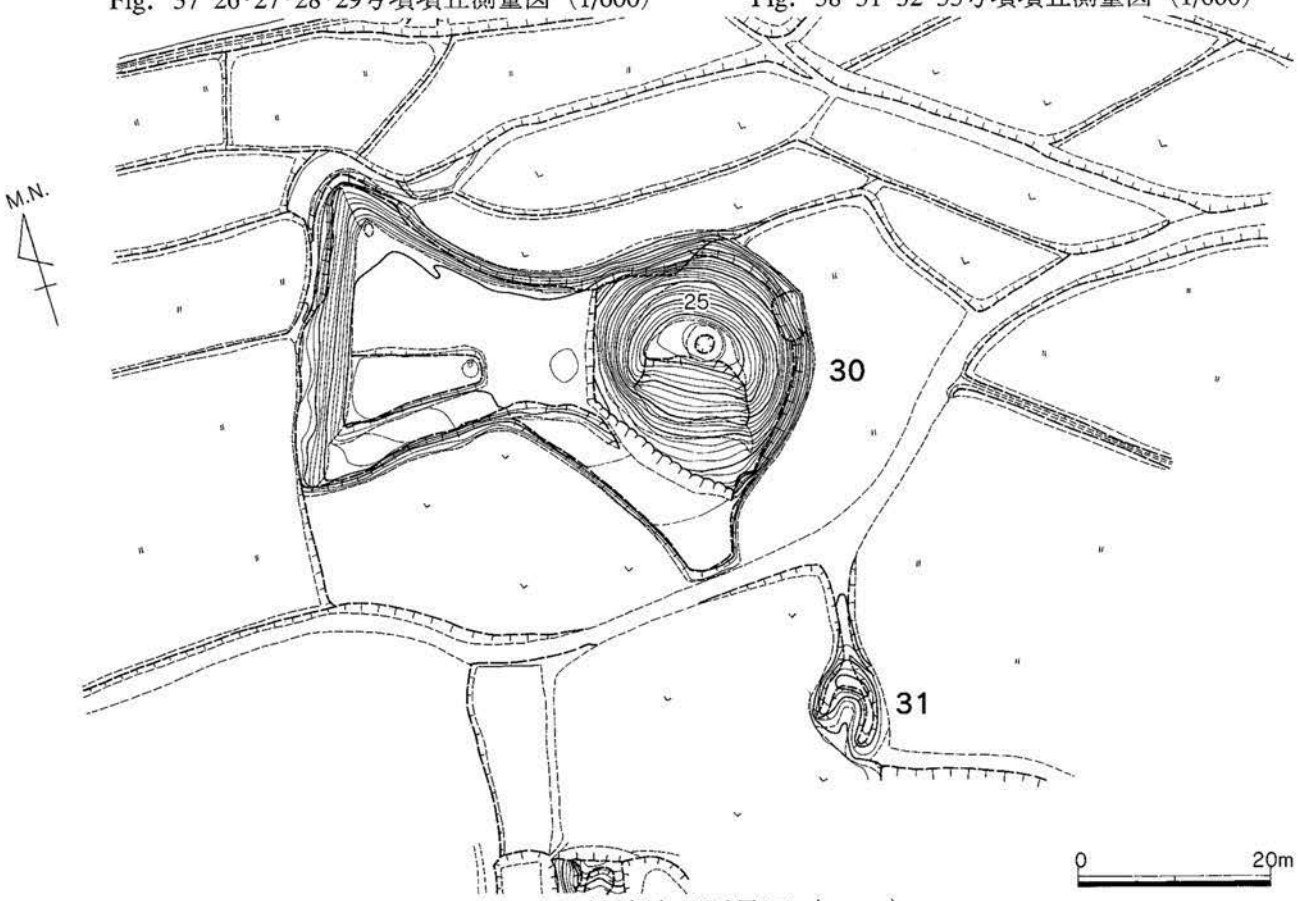



Fig. 39 30·31号墳墳丘測量図（1/800）

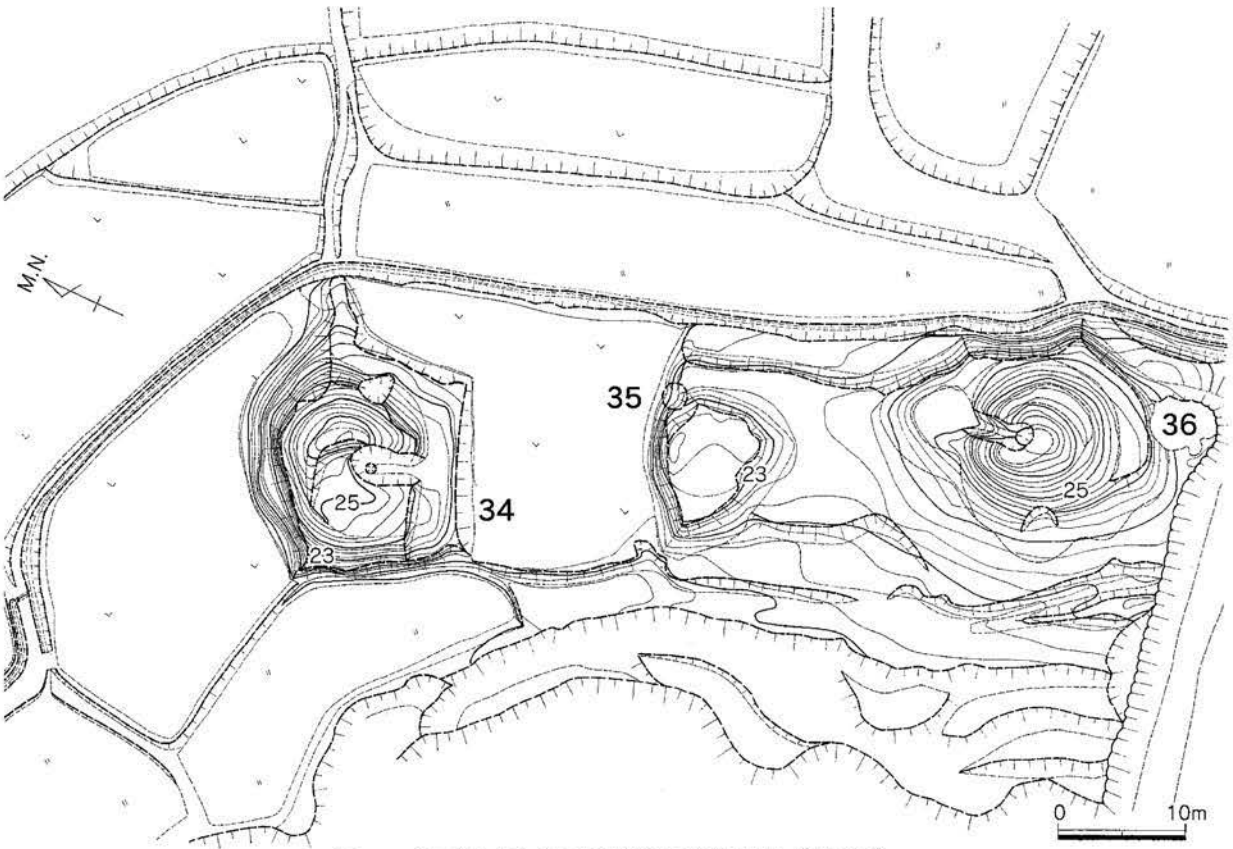



Fig. 40 34·35·36号墳墳丘測量図（1/600）

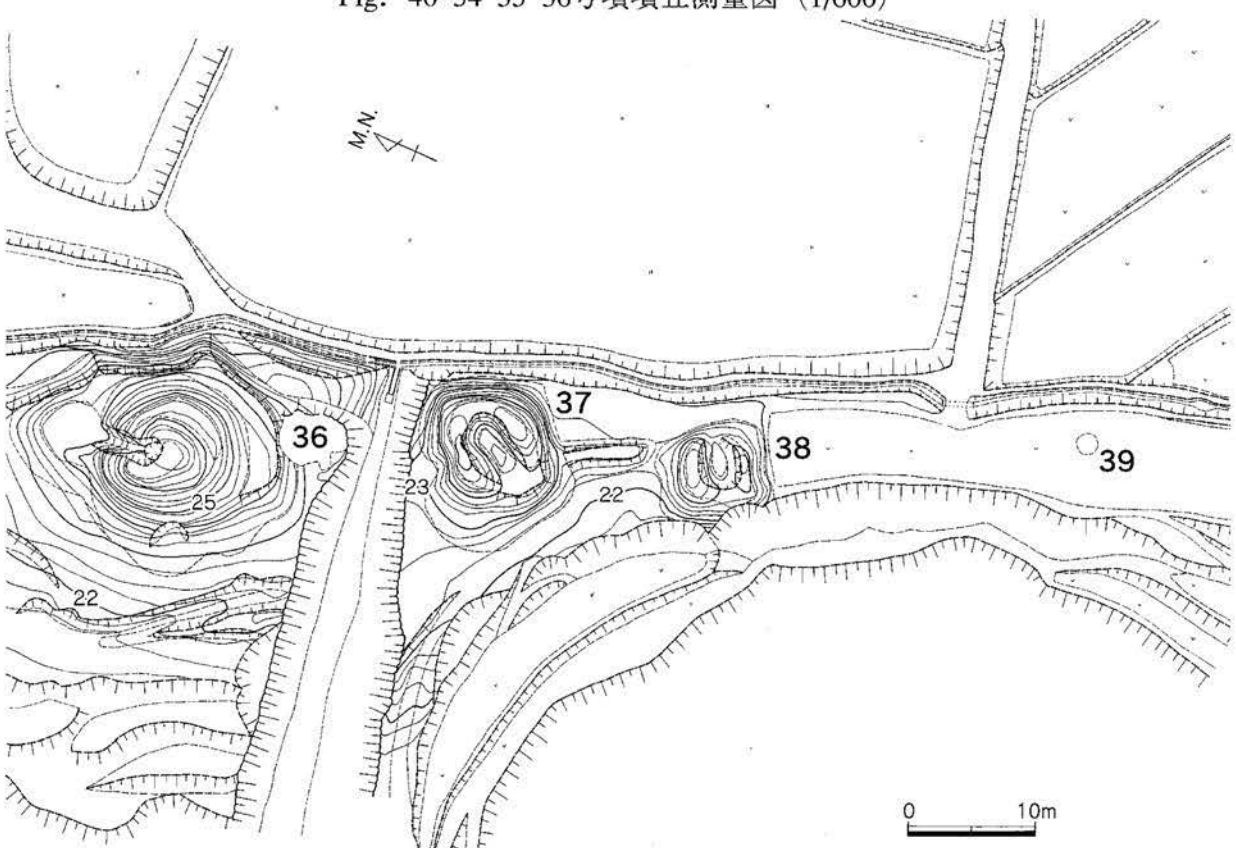



Fig. 41 36·37·38·39号墳墳丘測量図（1/600）

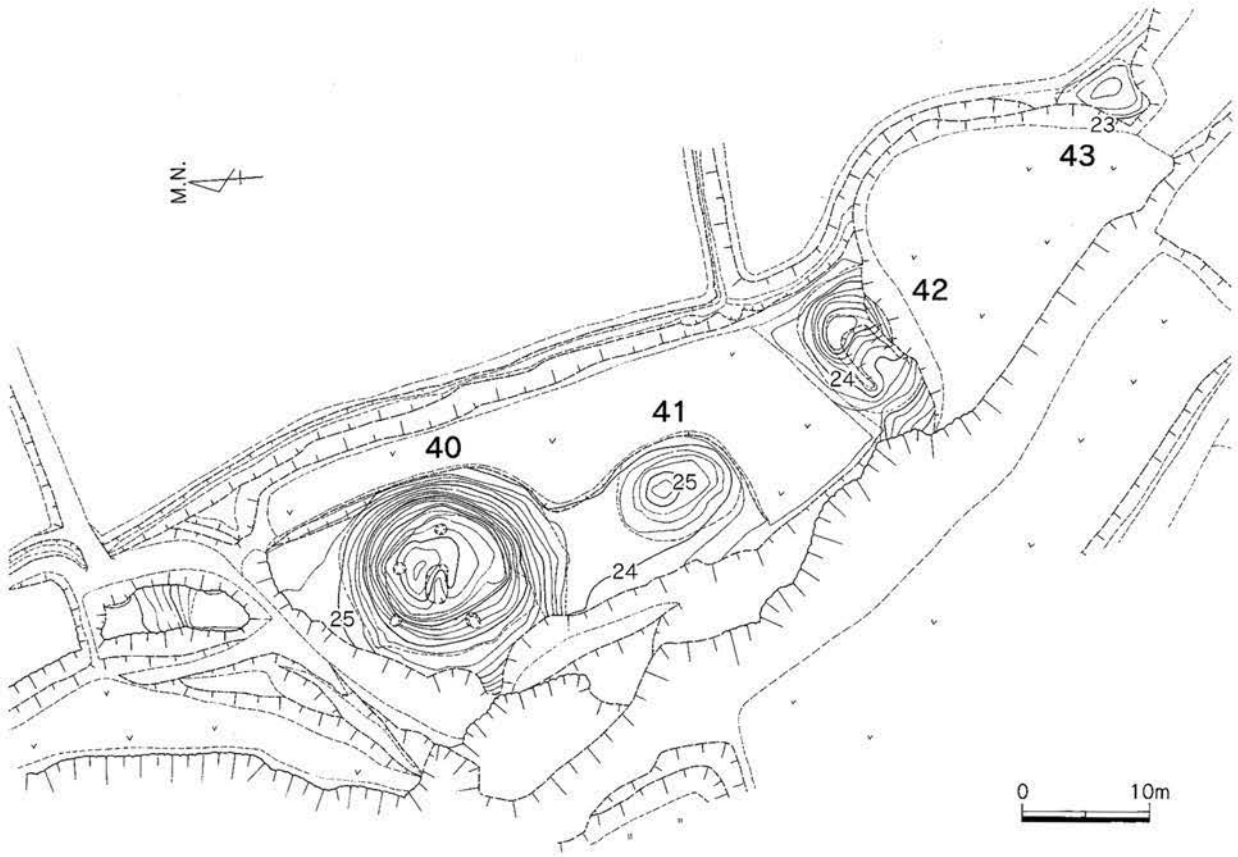



Fig. 42 40·41·42·43号墳墳丘測量図（1/600）

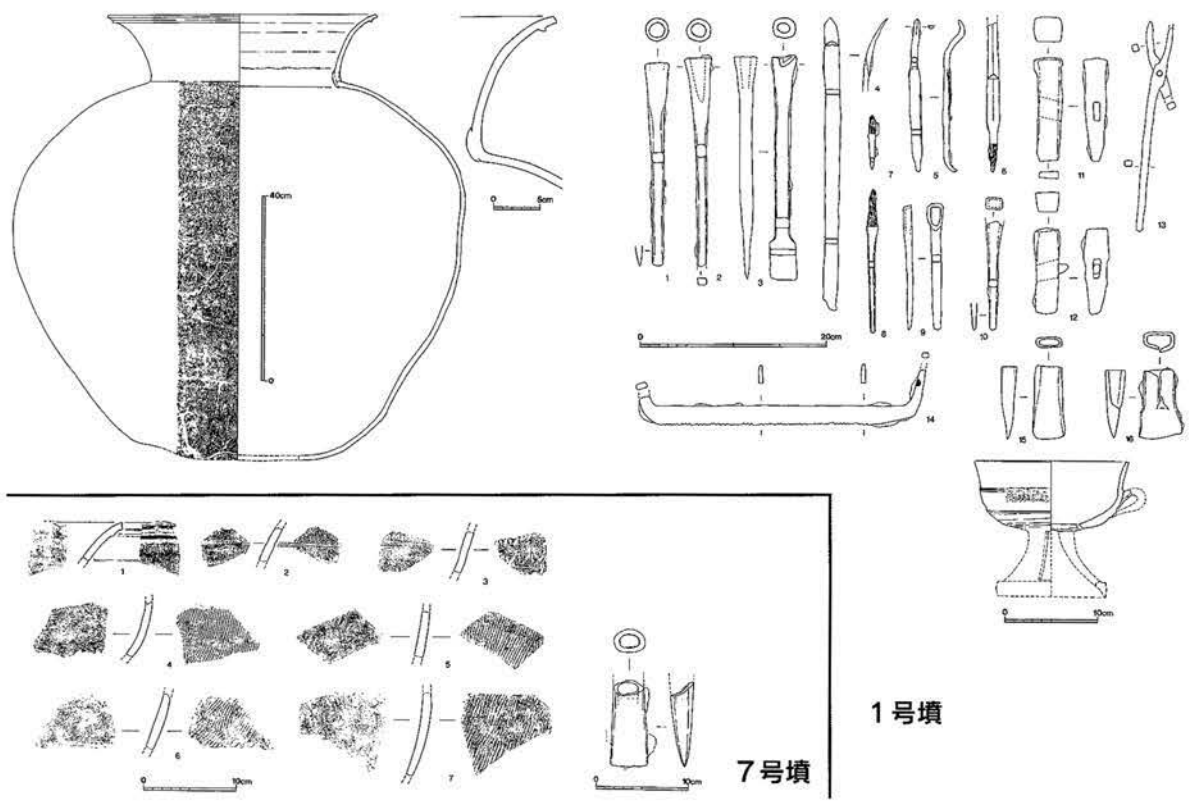



Fig. 43 1·7号墳出土遺物実測図（1/8・須恵器大甕のみ1/16）

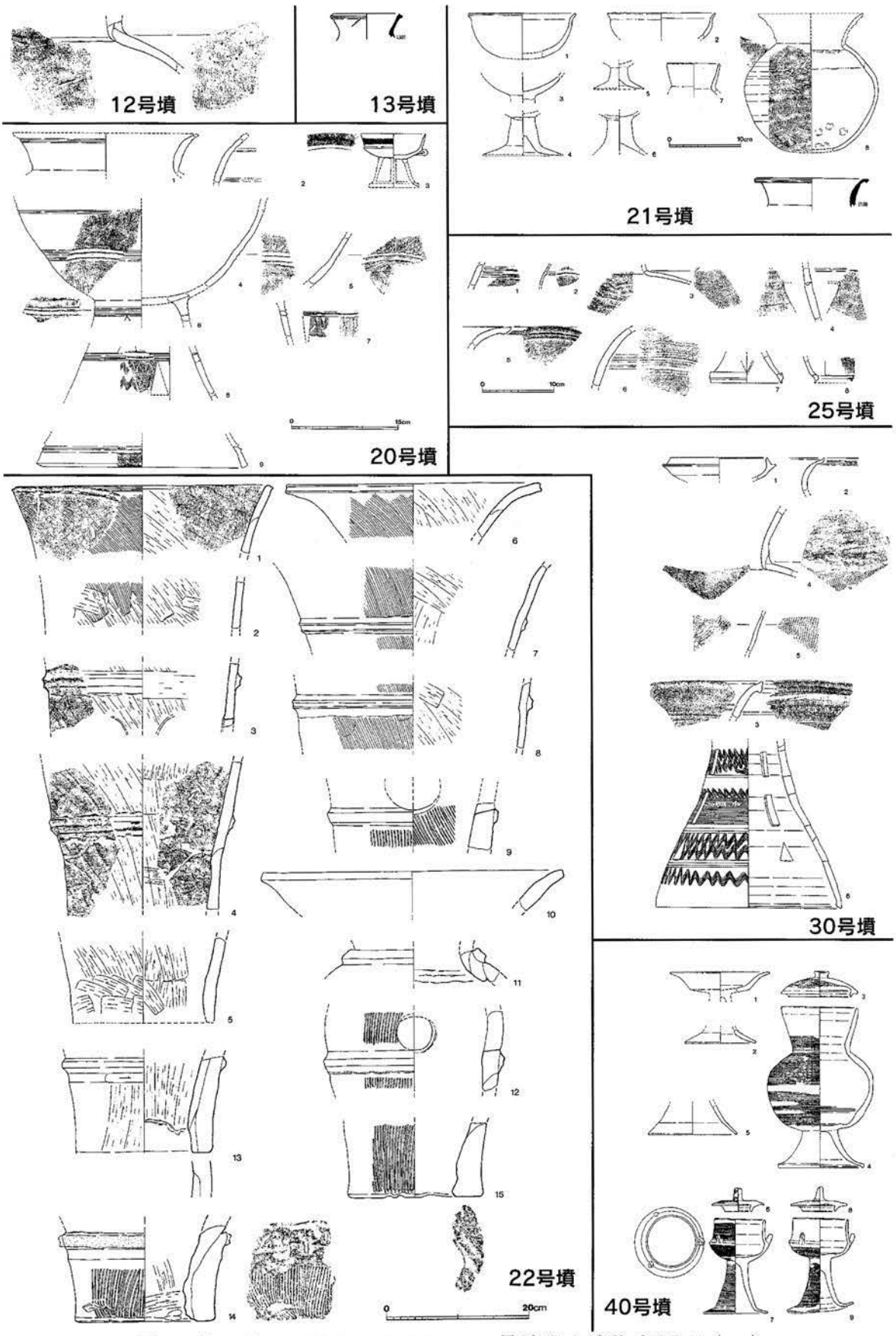



Fig. 44　12・13・20・21・22・25・30・40号墳出土遺物実測図（1/8）

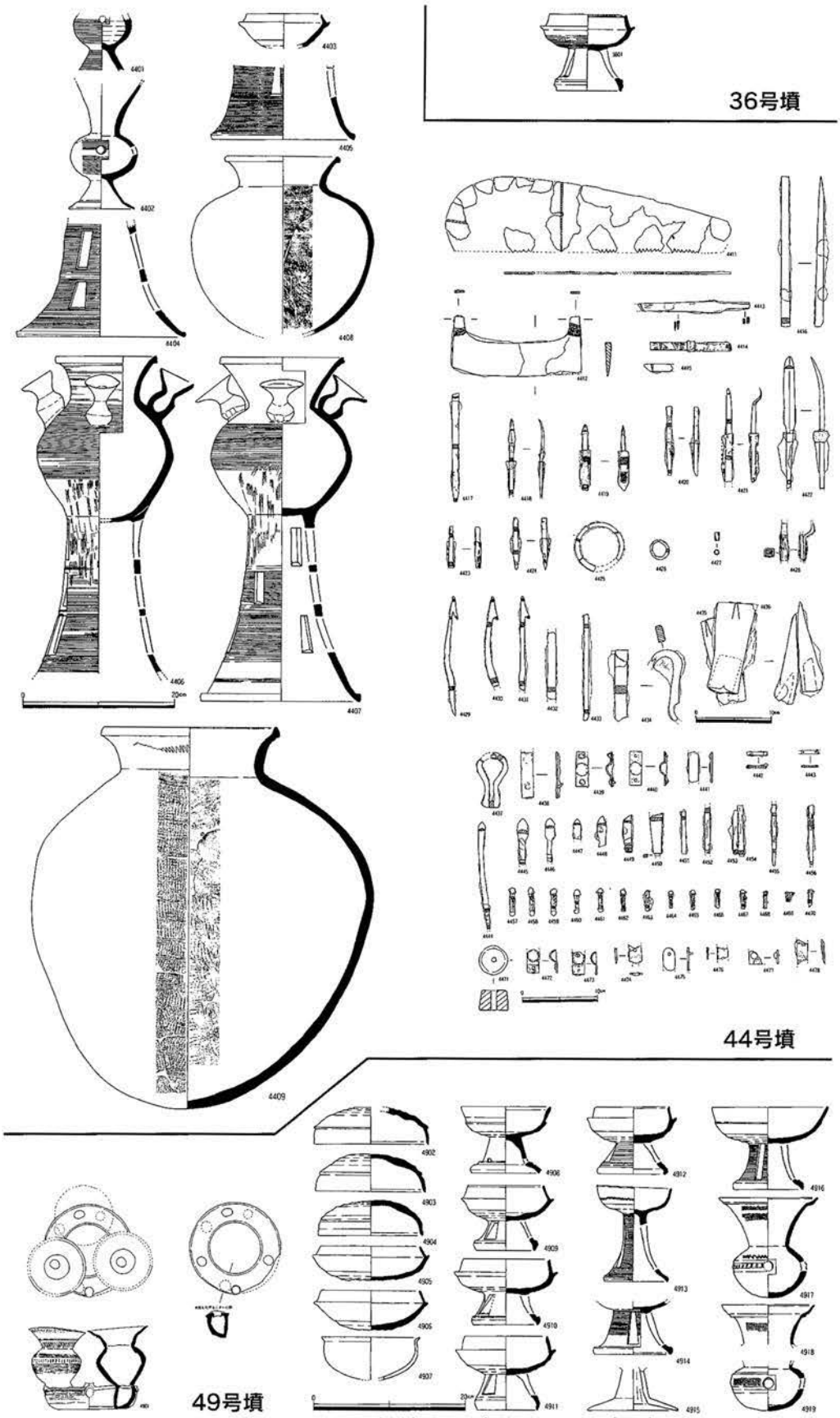



Fig. 45　36·44·49号墳出土遺物実測図（1/8）

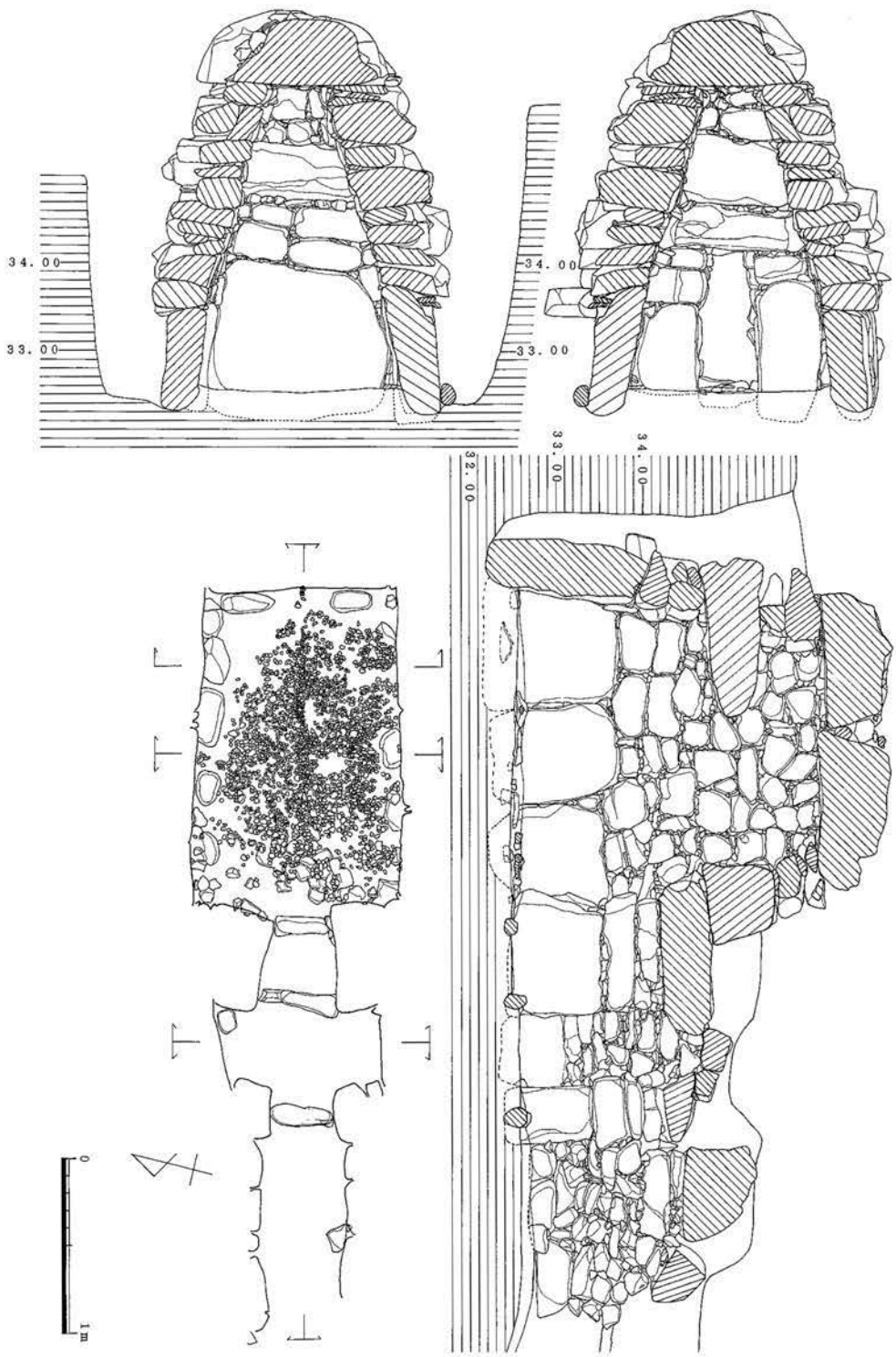



Fig. 46　新原・奴山44号墳石室実測図（1/80）

## 5．須多田古墳群

所在地：須多田字上ノ口、下ノ口、ニタ塚
立　地：西側に緩く傾斜する洪積台地上の標高5～30mに立地する。台地の北側に入り込む谷との比高差20mを測る。
築造時期：前方後円墳集成編年６～10期
総　数：７基（削平された前方後円墳が１基あったという話あり）
現存数：５基
調査歴：①1989年　圃場整備に伴い事前確認調査（須多田ニタ塚古墳・須多田ミソ塚古墳）
②1990年　圃場整備に伴い事前確認調査（須多田ニタ塚古墳・須多田ミソ塚古墳）
③1990年　圃場整備に伴う事前確認調査と水路部分と圃場部分の本調査（須多田ミソ塚古墳・須多田ニタ塚古墳・須多田宮ノ下古墳・須多田下ノ口古墳）
④1992年　圃場整備に伴い圃場部分の本調査（須多田下ノ口古墳）
⑤1993年　風倒木による墳丘崩れの測量調査（須多田天降天神社古墳）
⑥1995年　資料作成の墳丘測量調査（須多田上ノ口古墳）
文　献：①近藤義郎編『前方後円墳集成　九州編』山川出版　1992年
②池ノ上宏・安武千里編『須多田古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第12集　津屋崎町教育委員会　1996年
③埋蔵文化財研究会福岡世話人会『第43回　埋蔵文化財研究集会　前方後円墳の終焉　福岡県版』1998年
④近藤義郎編『前方後円墳集成　補遺編』山川出版　2000年

### １）古墳群の概要

西側に緩く傾斜する洪積台地上の標高5～30mで東西850m、南北300mの範囲に立地する古墳群である。

**須多田上ノ口古墳**（旧　津屋崎52号墳、須多田10号墳）

須多田古墳群中で最も高所の台地縁辺部の標高30mに位置する古墳。北側は谷部であり、比高差20mを測る。

墳丘は主軸をN－90°－Wにとり、前方部を西に向けている。古墳の南側は畑によって、東側は果樹園により墳形は削平を受けている。後円部南側には盗掘壙と思われる窪みがある。古墳の北側には幅5m程の周溝と幅7m程の周堤が存在する。墳長は復原すると43m、後円径22m・高さ7m、前方部幅30m・長20m・高さ5.7m、くびれ幅22m、後前高差－1.3mを測る。

墳丘外表施設として葺石がある。

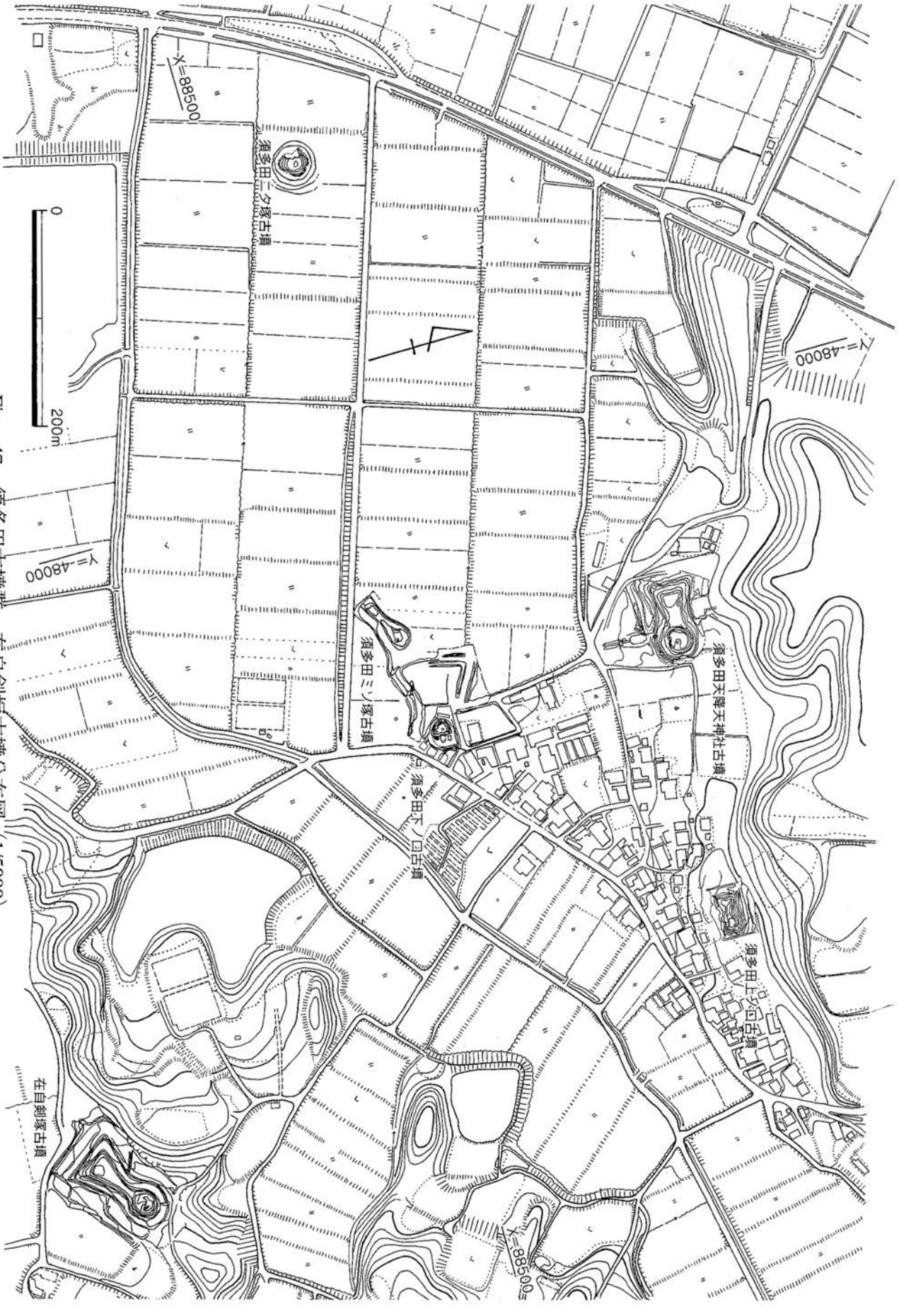



Fig. 47　須多田古墳群・在自剣塚古墳分布図（1/5000）

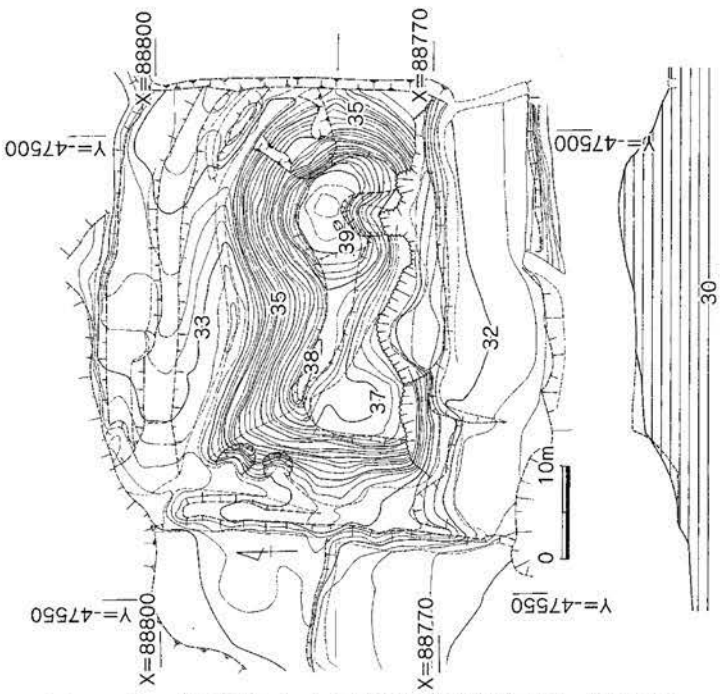



Fig. 48　須多田上ノ口古墳墳丘測量図（1/800）

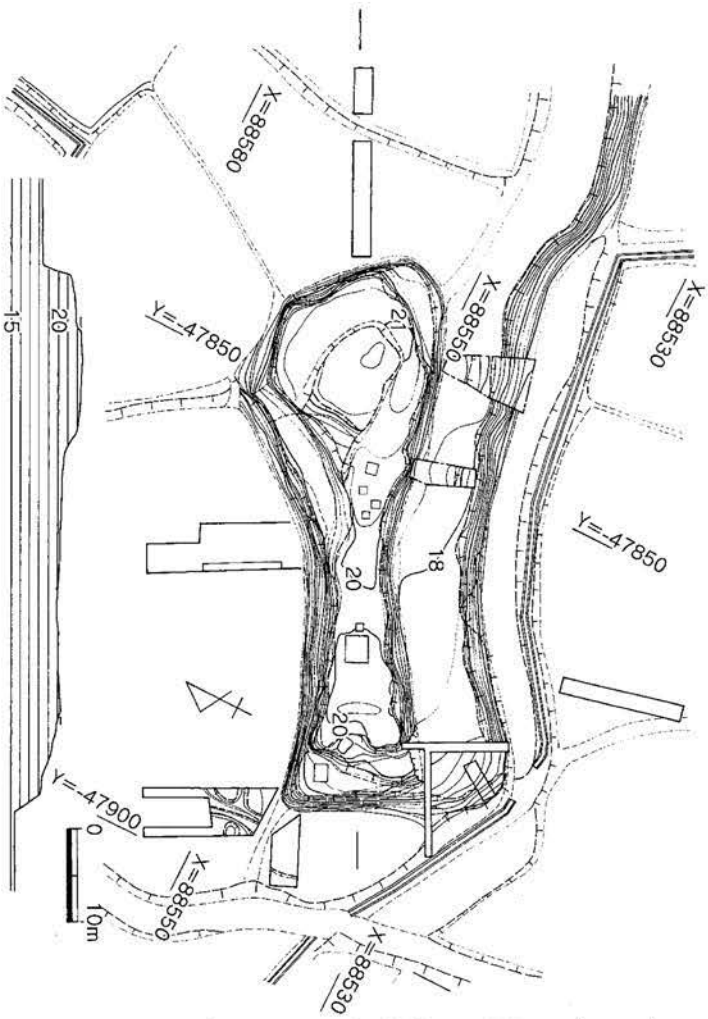



Fig. 49　須多田ミソ塚古墳墳丘測量図（1/800）

**須多田ミソ塚古墳**（旧　津屋崎55号墳、須多田14号墳）

台地上の標高16mに位置する前方後円墳である。須多田下ノ口古墳とは後円部東側で接している。古墳の周辺の水田部にトレンチを設定して調査をしたが、削平されており墳丘端を確認できなかった。前方部上も近世墓が作られており削平されている。

墳丘は2段築成で主軸をN－116°－Wにとり、前方部を西に向けている。墳長は現状で60m、後円径24m・高さ4m、前方部幅14m・長28m・高さ4m、くびれ幅10m、後前高差－2.3mを測る。墳長は復原すると67m、後円径22m、前方部幅23.5m・長35m、くびれ幅18mと復原している。

**須多田下ノ口古墳**（旧　津屋崎54号墳、須多田15号墳）

台地上の標高18mに位置する前方後円墳である。

墳丘は主軸をN－85°－Wにとり、前方部を西に向けている。後円部には観音堂がつくられて、一部削平を受け、前方部は須多田川沿いの道をつくる際の土取りに使われ墳丘盛土は全く残っていない。古墳の北側には幅4.5m程の第1周溝と幅5m程の第2周溝が存在する。墳長は復原すると82.8m、後円径30m・高さ8m、前方部幅60m・長43m、くびれ幅25mを測る。

前方部南端で横穴式石室を検出している。この石室の東側に円弧

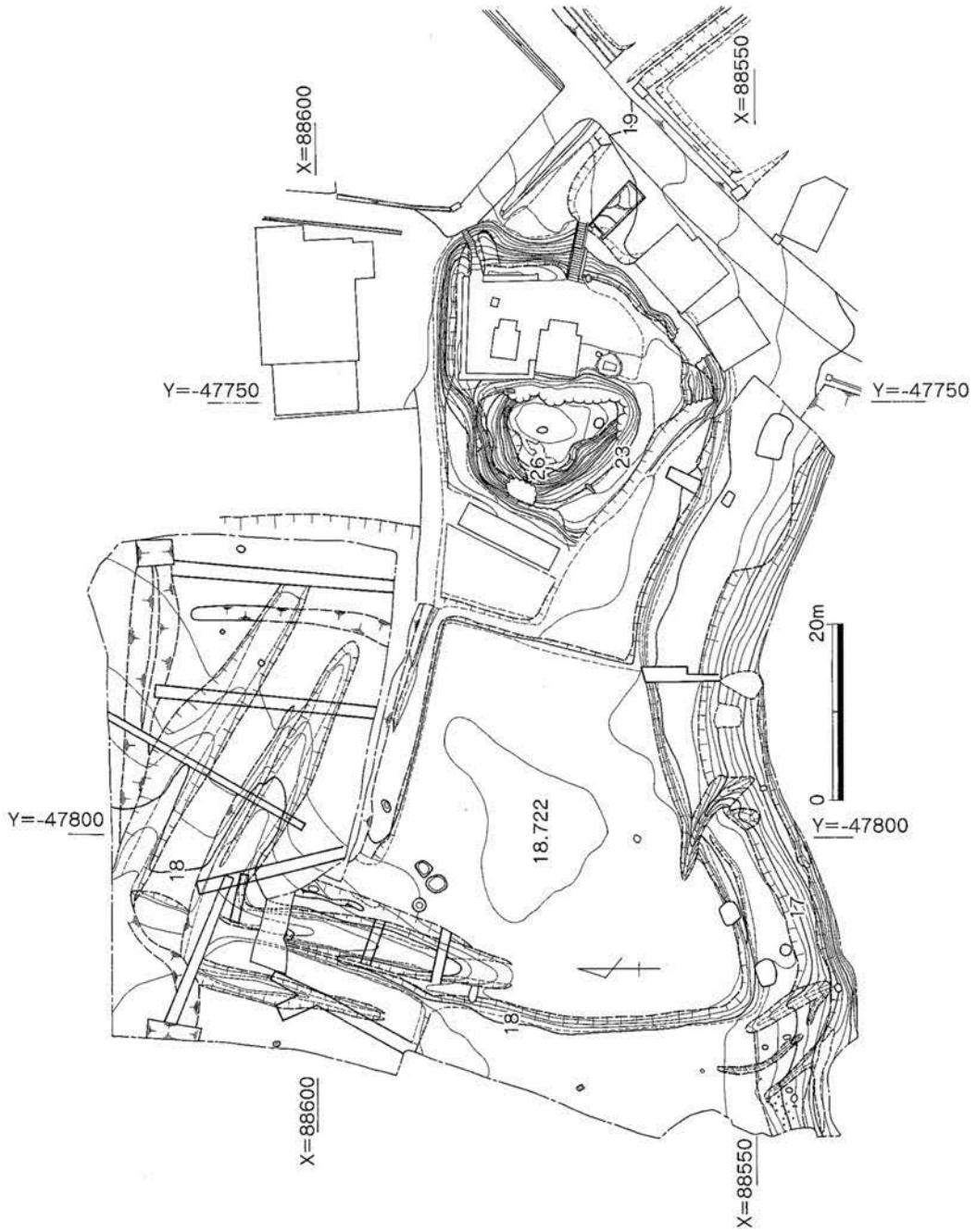



Fig. 50　須多田下ノ口古墳墳丘測量図（1/800）

を描く溝が存在しており、この石室に伴う周溝であると判断している。よって、この石室は須多田下ノ口古墳とは別の円墳の内部主体部であると考える。

Fig. 51　須多田天降天神社古墳墳丘測量図（1/800）

**須多田天降天神社古墳**（旧　津屋崎53号墳、須多田11号墳）

台地縁辺部の標高25mに位置する前方後円墳である。

後円部南側の周堤上に地元の産神である天降天神社がある。後円部南側斜面のなかほどに岩塊による磐境が設けられている。後円部東側は明治22年4月に宮司村立小学校が造られて削平を受けている。前方部の西側は水路と道路と工場によって削平を受けている。このように後世の破壊を受けているが古墳の残存状況は良好である。墳丘は２段築成で主軸をN－82°－Wにとり、前方部を西に向けている。幅10m程の周溝と幅10m程の周堤が存在する。墳長は現状で80m、後円径48m・高さ11m、前方部幅54m・長44m・高さ8m、くびれ幅37m、後前高差－3.1mを測る。

墳丘外表施設として、円筒埴輪や形象埴輪が墳丘上と２段目平坦面とくびれ部付近の周溝で出土している。他に葺石がある。

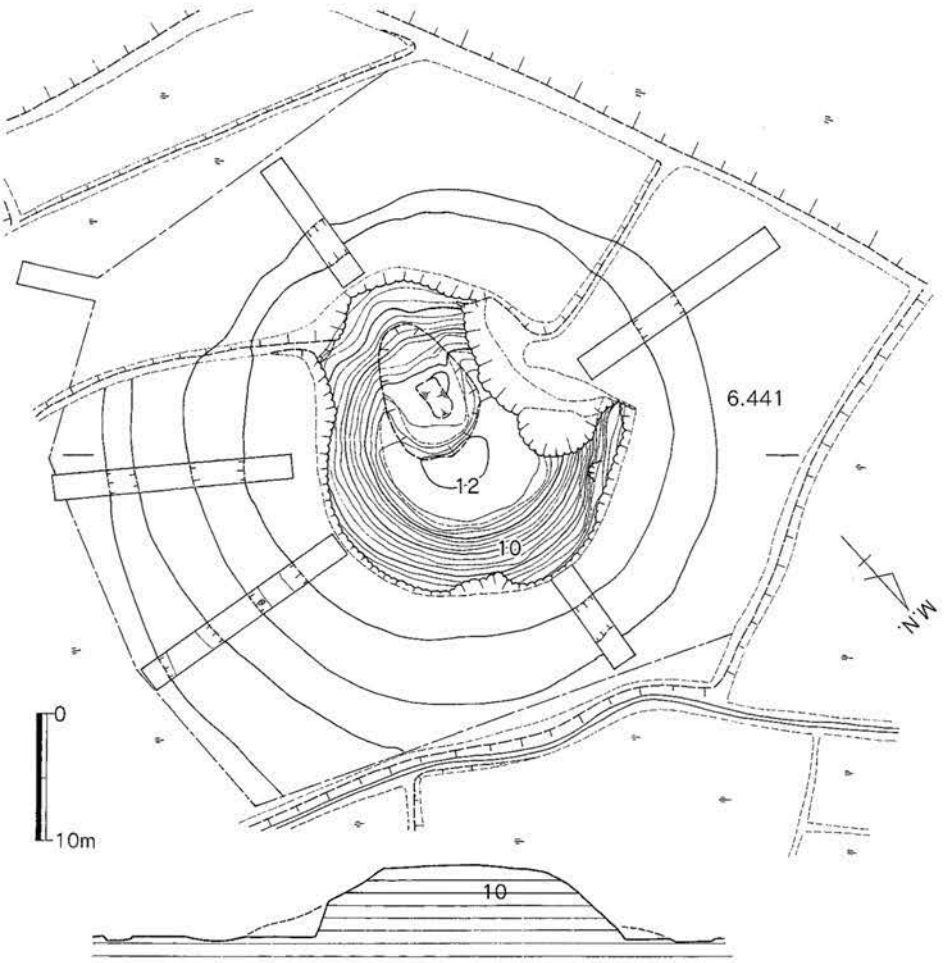



Fig. 52　須多田ニタ塚古墳墳丘測量図（1/600）

**須多田ニタ塚古墳**（旧　津屋崎56号墳、須多田22号墳、フタ塚古墳）

須多田古墳群中で最も西側の台地先端部の標高6mに位置する古墳。古墳築造当時は西方100m先に入り海が広がっていたようである。

墳丘裾部近くは急斜面をなしており、若干削平を受けている。トレンチを設定して周溝を確認した。直径33.5mの円墳で墳丘の高さは6.6mを測る。周溝は水田によって削平を受けているが、現状で幅4.4m、深さ0.4mを測る。東側トレンチの周溝の外側の斜面に径0.45m、深さ0.22mのピットが穿ってあり、その中からブロック状鉄塊が出土している。まだら鋳鉄の塊であり、通常の鍛冶炉では処理できず鉄素材とは考えにくいものであるという分析結果が出されている。[文献②] 墳丘の東側の地形的に高い部分で馬蹄状に巡る周溝を確認している。古墳をより大きくみせるための工夫ではないかと思われる。周溝と馬蹄状溝の間で土器だまりを検出している。土器は４世紀頃のもので、古墳築造前の遺跡に伴うものであると考える。

古墳は盗掘壙があり石室が確認されている。石室内には土砂が流入しており床面が確認されていないが、現状で石室長3m、幅1.6mを測る長方形プランを呈する。石室高さは1.7mで、奥壁の腰石に大ぶりの石を配している。玄門の両袖石は柱状の石を立てて使用し、板状の１枚石を扉状に立てて閉塞石としている。石室の石材には赤色顔料を塗布していた。

### 須多田宮ノ下古墳

台地先端部の標高10mに位置する古墳。圃場整備に伴う工事によって発見された円墳である。径は10mの円墳で墳丘盛土はなく、ほとんど地山整形後によって墳丘が造られていた。主体部は箱式石棺で6枚の板石を使用して棺をつくり、蓋石は本来4枚あったものと考えられるが、盗掘によって1枚失われている。棺の内法は長さ2.1m、幅0.5m、深さ0.45mを測る。棺は盗掘により攪乱されていたが、床面には玉砂利が敷き詰められていたと考える。

棺外副葬品として、棺の北側に剣、大刀、鉄鏃10本出土している。古墳は発掘調査後に破壊された。

## 2）古墳の築造時期と古墳群の消長

須多田宮ノ下古墳以外は内部主体部の調査を行っていない。よって範囲確認調査や測量時に出土した土器と墳丘測量図から古墳の築造時期を考える。

須多田宮ノ下古墳（前方後円墳集成編年6期）→須多田ニタ塚古墳（前方後円墳集成編年7期）→須多田天降天神社古墳（前方後円墳集成編年9期）→須多田ミソ塚古墳（前方後円墳集成編年9期）→須多田下ノ口古墳（前方後円墳集成編年10期）

## 3）古墳群の特質

須多田古墳群は津屋崎古墳群の中でも後半に造られた古墳で占められる古墳群である。規模も時期が下がるにつれて大きくなってきており、7世紀の宮地嶽古墳へと続く胸形君の隆盛を示すものと考えられる。須多田宮ノ下古墳はその次の段階の須多田ニタ塚古墳とは墳丘規模、主体部ともに大きく異なることから、被葬者の階層も古墳の性格も異なるものと考えられる。つまり、須多田宮ノ下古墳の被葬者は須多田ニタ塚古墳墳丘下にあった土器に伴う集落の在地小豪族の墳墓であり、胸形君一族の古墳である他の古墳とは異なると考える。

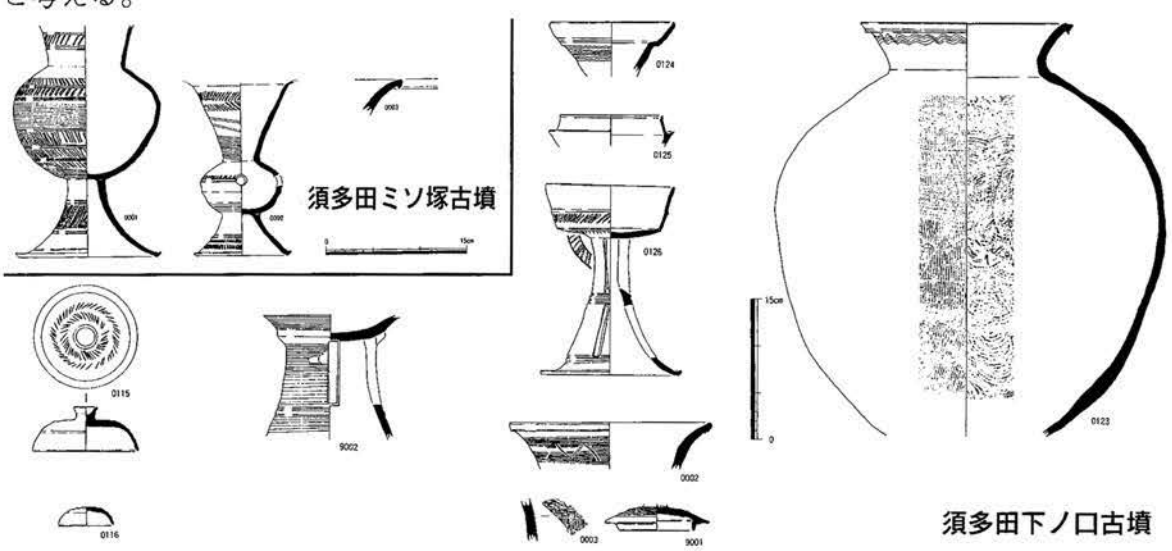



Fig. 53　須多田ミソ塚古墳・須多田下ノ口古墳出土遺物実測図（1/8）

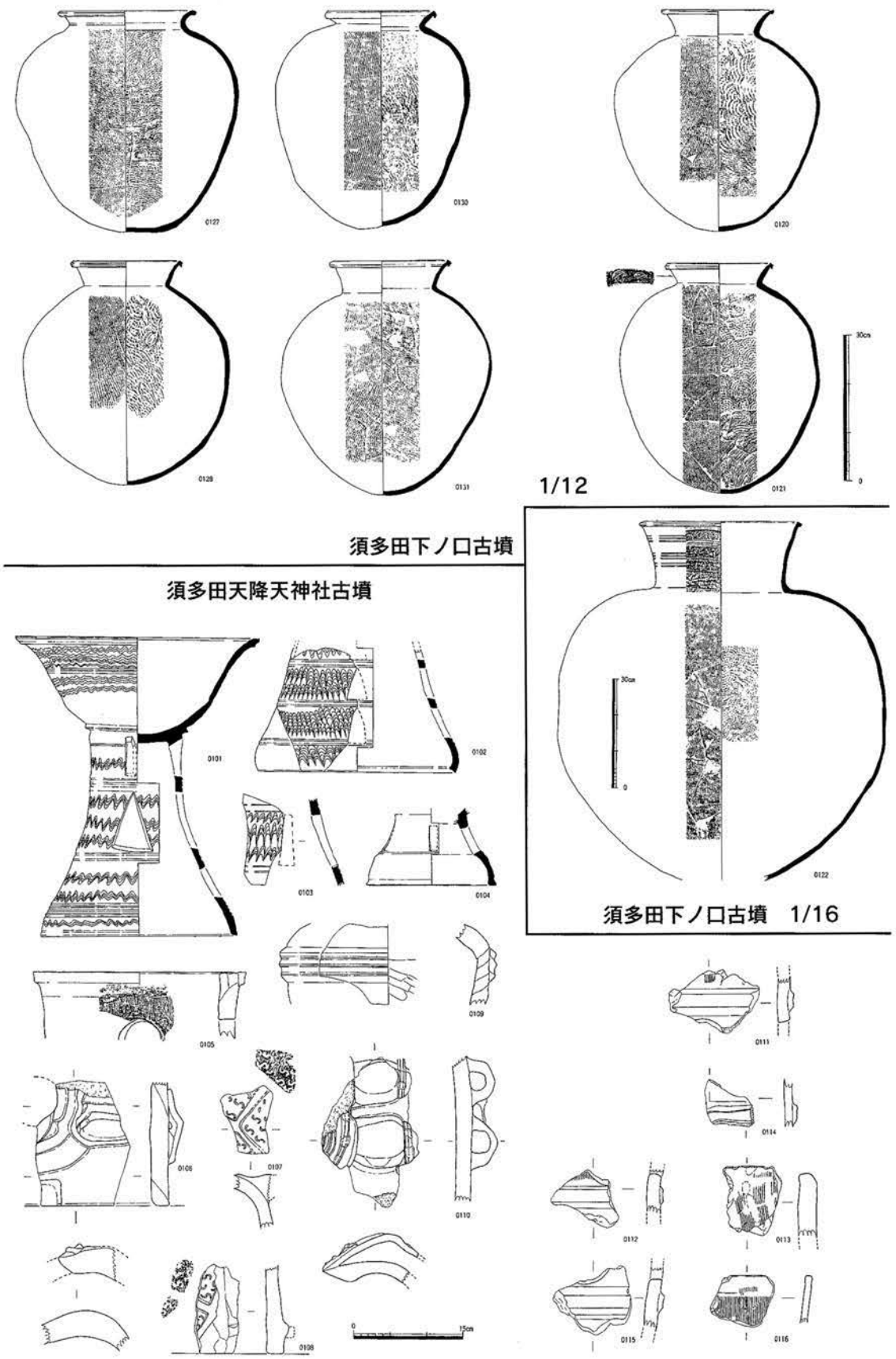



Fig. 54　須多田下ノ口古墳・須多田天降天神社古墳出土遺物実測図（1/8下ノ口の須恵器甕1/12・1/16）

## 6．宮司井手ノ上古墳

所在地：宮司字井手ノ上
立　地：宮地岳（標高182.4m）から南に延びる小尾根の標高50mの位置に立地する。
築造時期：前方後円墳集成編年６期
調査歴：1989年土取りに伴い発掘調査を行う。調査後、墓壙を砂で埋め戻して現状保存される。
文　献：①橋口達也編『宮司井手ノ上古墳』津屋崎町文化財調査報告書第７集　津屋崎町教育委員会　1991年

### １）古墳の概要

古墳は宮地岳から南に延びる小尾根の標高50mの位置に立地する。同じ丘陵の東北部では土取りで既に消滅はしているが、４基の古墳が存在していた。１基は横穴式石室を内部主体部とする後期古墳で１基は竪穴系横口式石室を内部主体部にする古墳であった。[文献①]

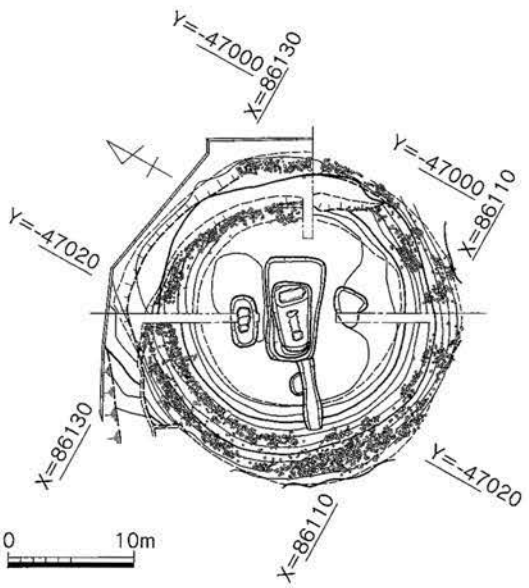


Fig. 55　宮司井手ノ上古墳墳丘測量図（1/600）

**墳丘**　径26mの円墳で高さは2.5mを測る。周溝が古墳の東側で確認され、葺石もある。

**内部主体部**　墳丘の中央に東西方向の方形プランの大きな墓壙があり、竪穴式石室と箱式石棺がある。この墓壙の北側に接して石蓋土壙墓がある。

**竪穴式石室**は内法で長さ1.9m、幅が中央部で0.55m、深さ0.55mを測る。石室は盗掘を受けていたが、竪穴式石室の副葬品と思われる金銅装鈴、鉄刀、鉄斧が盗掘壙から出土している。

**箱式石棺**は、砂岩質の一枚板を蓋石、側板、木口板に用いている。石棺の長さは上端で1.8m、幅0.48m、深さは礫床まで0.4mを測る。箱式石棺は盗掘から免れており、中から頭を北に向けた熟年男性の人骨が出土した。被葬者の左肩部から膝付近にかけて大刀、剣、矛、刀子２、鹿角製刀子柄、鉄鏃９、左側足元に刀、右肩から膝にかけて長剣、鉄鏃16、南側木口に接して鉄柄手斧３、鉄斧２、鑿、鎌、U字型鋤先、下腿部の上には短甲が副葬されていた。胸の左側に柄巻の刀、剣類の装具片および布片が散在していた。

**石蓋土壙墓**は南側の大きな墓壙に平行してつくられている。３枚の板石で蓋をしており、その上に刀、矛、鎌、鉄鏃、鉄鋌、碧玉製管玉が副葬されていた。蓋石の下は長さ1.82m、幅が中央部で0.42m、深さ0.2mの土壙墓があり、成年の男性人骨が出土している。

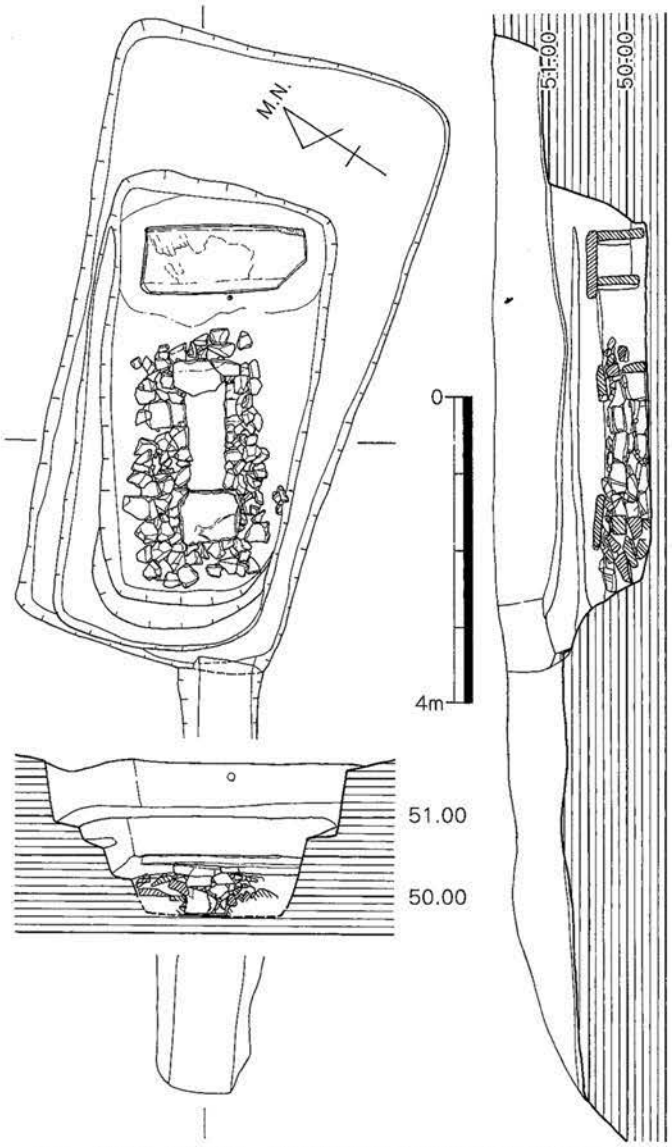



Fig. 56　竪穴式石室・箱式石棺及び墓壙実測図（1/100）

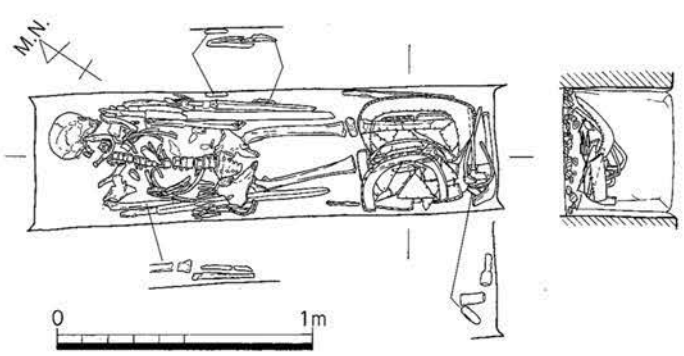



Fig. 57　箱式石棺人骨・副葬品出土状況実測図（1/30）

他の遺物として、中央の墓壙埋土から滑石製の模造鏡が出土し、墳丘裾部からは肩部にこぶ状の突起をもつ伽耶系の初期須恵器甕が出土している。

### 2）古墳の築造時期

墳丘裾部から出土した伽耶系の初期須恵器甕から前方後円墳集成編年６期と考える。この初期須恵器甕は宗像地域で生産された可能性がある。

### 3）古墳群の特質

この古墳には３つの内部主体がある。竪穴式石室は金銅製鈴等豊富な副葬品を想定され、箱式石棺には鏡、玉類等の副葬品がなく、石蓋土壙墓には棺内には副葬品がなくて棺外に５点の鉄器があるだけというように、それぞれの主体部の被葬者は格差があることが、副葬品から推量される。

箱式石棺に副葬された短甲は、副葬用に別々の部品をつぎ合わせたものと思われる。このことから短甲の製作専門集団が畿内ではなく地元にあることを伺わせる資料である。

この古墳は他の津屋崎古墳群の前方後円墳や大型円墳とは異なり、津屋崎南部を流れる手光今川周辺の宮司・福間の在地小豪族の墳墓と考えられる。

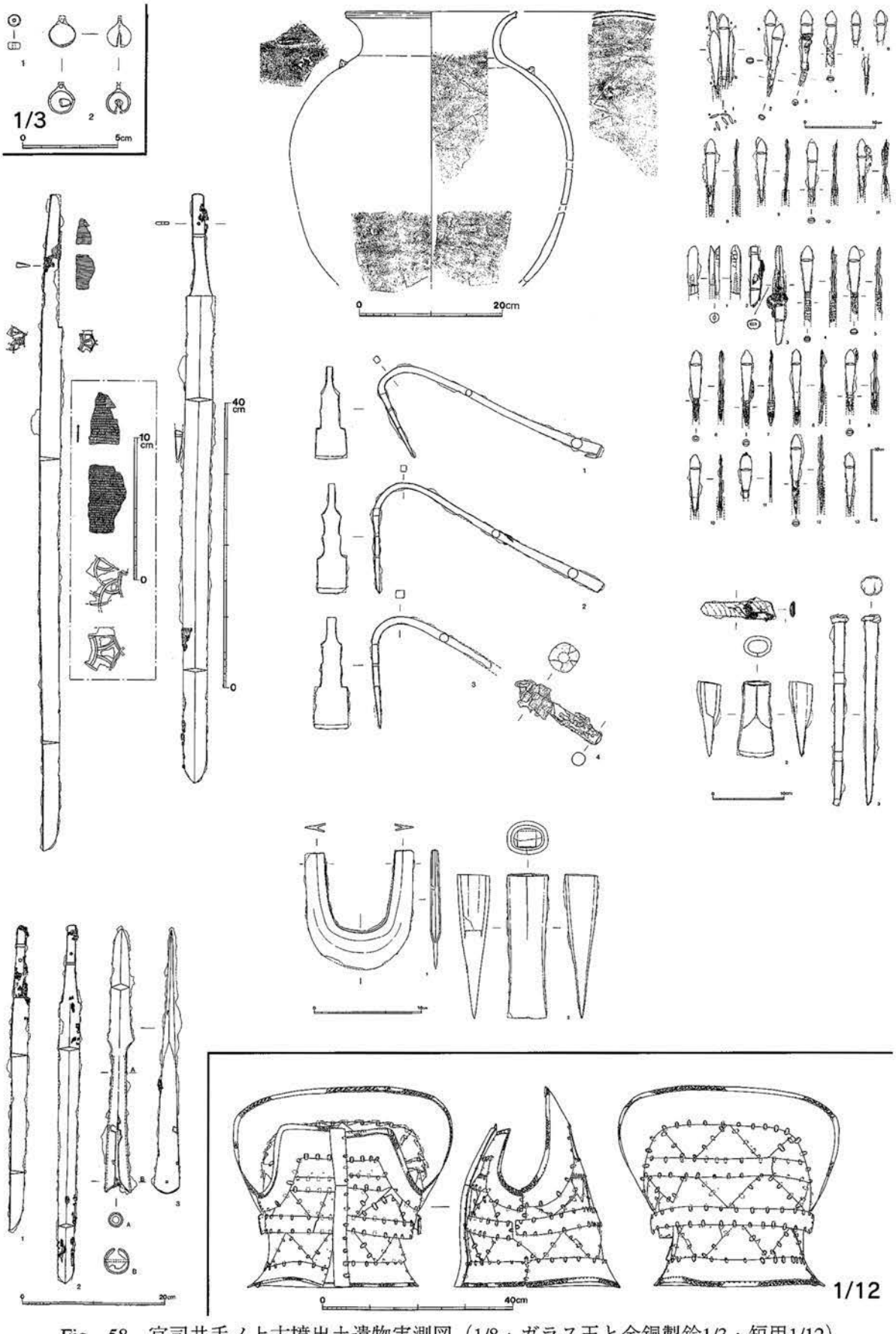



Fig. 58　宮司井手ノ上古墳出土遺物実測図（1/8・ガラス玉と金銅製鈴1/3・短甲1/12）

## 7．宮地嶽古墳（旧　津屋崎70号墳、宮地岳大塚古墳）

所在地：宮司字大塚
立　地：宮地岳（標高182.4m）南斜面の標高55mの位置に立地する。
築造時期：7世紀第二四半期
調査歴：①古墳は江戸時代には開口していたことが『筑前國續風土記拾遺』の宮司村の項、寛保元（1741）年の大雨の後に開口し、延享4（1747）年に奥壁部に不動尊を祭ったことからわかる。
②1934年　不動神社の社務所建設に伴う工事で、馬具・刀剣類が出土する。
③1937年　鏡山猛氏によって石室実測が行われ、図面を梅原末治氏に送付する。この図は『大和島庄石舞台の巨大古墳』の石室集成に収録されている。[文献②]
④1938年　宮地嶽古墳より東方向の尾根斜面からガラス骨蔵器が発見される。
⑤1951年　森貞次郎氏と岡崎敬氏によって、金銅製冠が取り上げられる。
⑥1996年　花田勝広氏により鏡山猛原図を補正する石室の再実測が行われた。
文　献：①青柳種信『筑前國續風土記拾遺』1883年
②梅原末治「日本古墳巨大石室集成」『大和島庄石舞台の巨大古墳』京都帝国大学考古学研究室報告14　1936年
③島田寅次郎「宮地嶽古墳不動窟につきて」『福岡県史蹟名勝報告書』13　1939年
④宮地嶽神社『国宝宮地嶽古墳出土品修理報告書』1968年
⑤小田富士雄「宮地嶽古墳」『探訪　日本の古墳　西日本編』有斐閣　1981年
⑥埋蔵文化財研究会福岡世話人会『第43回　埋蔵文化財研究集会　前方後円墳の終焉　福岡県版』1998年
⑦池ノ上宏・花田勝広「筑紫・宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』第85巻第1号　日本考古学会　1999年

### 1）古墳の概要

古墳は宮地岳（標高182.4m）南斜面の標高55mの位置に立地する。石室内には江戸時代の延享4（1747）年から不動尊が祭られており、現在も信仰の対象になっていて、灯明が絶えることはない。

**墳丘**　緩斜面の尾根を切断して地山整形を行い築造されていると思われる。規模は現状で南北27m、東西34mの楕円形を呈している。昭和9年以前に古墳の周囲には列石が巡らされている。本来は35m前後の円墳と考えられる。

**主体部**　横口式石槨は、石槨と玄室と羨道からなる。尾根に直交して東側に開口する。石室は無袖の横穴式石室の奥に広義の横口式石槨を設ける。玄室は天井石と右側壁の形状よ

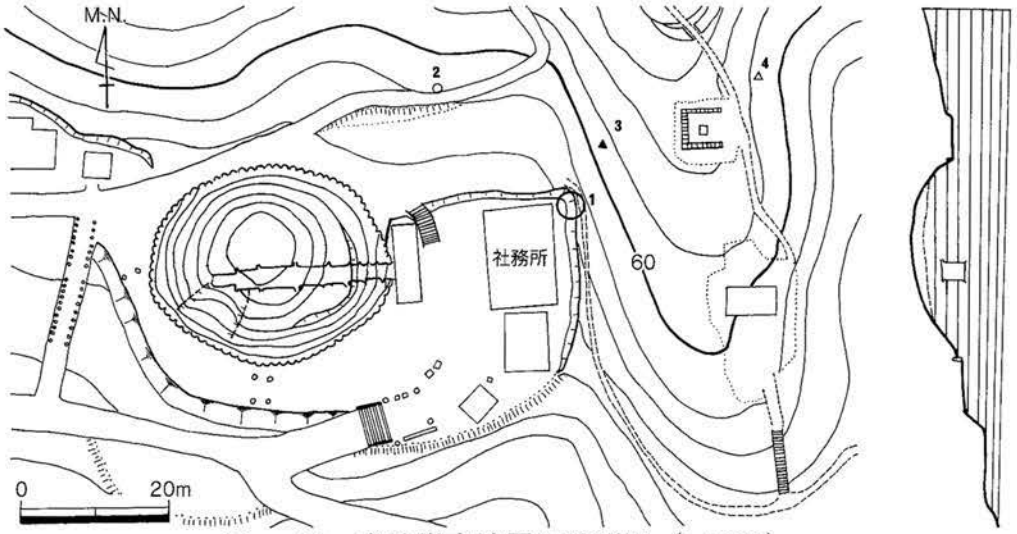



Fig. 59　宮地嶽古墳周辺地形図（1/1000）
遺物出土地：1．馬具類　2．冠　3．火葬墓　4．土器

り長さ11.7m前後で、幅が中央部で2.8mを測る。玄室の高さは龕部分で3.1mを測る。奥から手前2.6mの左右両側壁には龕のように側石を切り込んである。左の龕は長さ1.9m、高さ1.5m、奥行0.7mが抉ってある。右の龕も同様に長さ1.9m、高さ1.3m、奥行0.7mが抉ってあり、ほぼ左右対象で同規模である。羨門入口は、明らかに0.3～0.4mの塊石を不規則に積み上げてあり、墳丘周囲の列石に連続して他の石材とも異なることから、２次的なものと判断されている。床面は、扁平な3.6×2.7mの巨大な床石の一部が確認されている。石室は巨石を使って造り上げてあり、高さ３m以上、幅４m以上の巨石が並んでいる。石材は礫岩で、５ｋｍ程離れた恋の浦海岸から船で運ばれてきたものと推定される。

副葬品　1934年にこの古墳の前面で社務所をつくっている際に、古墳から出土して再埋納されたと思われる豪華な遺物が発見されている。

**出土遺物**には、頭椎大刀２、金銅製鏡板２、金銅製杏葉２、金銅製鞍金具、金銅製壺鐙１対、金銅製鋲具、ガラス板（完形品は長さ17.7ｃｍ、幅10.7ｃｍ、厚さ1.5ｃｍ）、ガラス丸玉、蓋付銅鋺、銅盤、土器がある。頭椎大刀は復原すると2.4mもあるもので儀仗用のものと考えられる。1950年にはこの近くで金銅製透彫龍文冠が出土している。これも宮地嶽古墳の副葬品のひとつと考えられる。

### ２）古墳の築造時期

花田勝広氏によると［文献⑦］

・横穴式石室に石槨を設ける思想が畿内から導入されていること。

・副葬品に舶載品が多く製作から副葬まで時間があり、馬具編年だけで年代が特定できず、頭椎大刀の大型化する型式により新しい様相とみる。

・須恵器の年代を重視すると、ＴＫ－209型式のものが含まれない。

以上の古墳全体の観点から、7世紀前半の新しい段階とみることが最も穏当と考えられる。

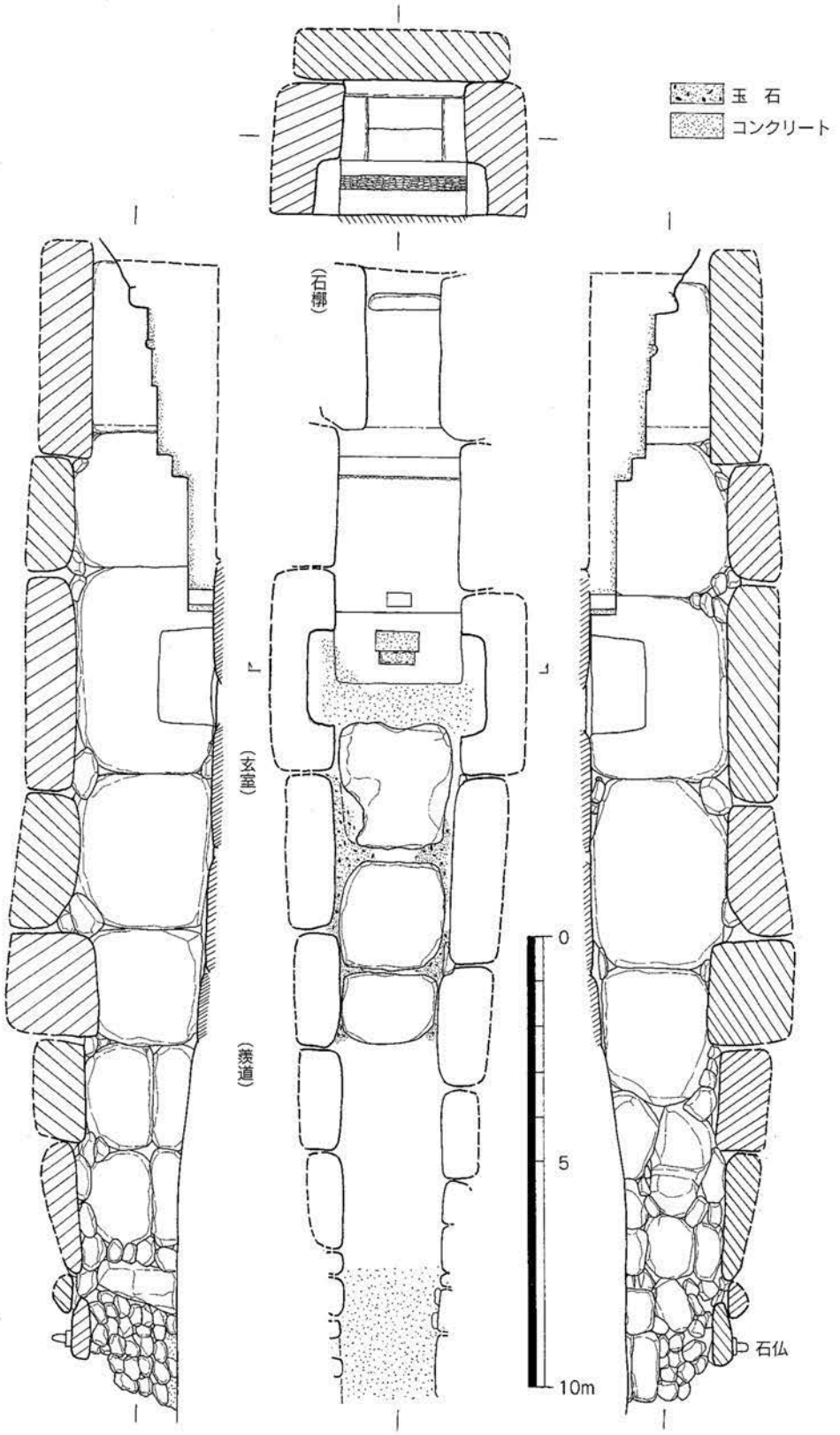



Fig. 60　宮地嶽古墳石室実測図（1/150）

### 3）古墳の特質

1938年に宮地嶽古墳の東の丘陵西斜面の標高65m付近で火葬墓が発見されている。ガラス製骨蔵器を入れた青銅製蓋付骨蔵器が甕に入った状況で出土している。外側の陶製の甕は中世以降の土器である。したがって、この火葬骨蔵器は再埋納品と考えられている。一番内側の緑色のガラス製骨蔵器は高さ11ｃｍ、胴部の幅13.5ｃｍを測る。外側の青銅製骨蔵器の蓋は鈕はなく、口径20.4ｃｍ、高さ4ｃｍである。身は、口径19ｃｍで器高16.7ｃｍを測り、体部最大径を上半部にもつ。内部にはガラス骨蔵器の痕跡とこれを包んだと思われる布片が付着している。８世紀初頭のものと考えられる。

『日本書紀』天武天皇２（674）年にみえる胸形君徳善と天武天皇に召されて高市皇子を生んだ尼子娘がこの古墳と火葬骨蔵器に関係があると考えられる。宮地嶽古墳の被葬者を胸形君徳善とし、畿内の進んだ文化の骨蔵器の中に入れられていたのが尼子娘とする説が有力である。

| | 名称 | 所在地 | 津屋崎町分布調査1972 | 福岡県遺跡等墳布地図(宗像郡)1977 | | | 新原・奴山古墳群 県報第54集 1977 | | 奴山古墳群 町報第3集 1981 | | 墳形 | 規模 長×円径×高 | 埋葬施設 | 出土遺物・その他 | 調査歴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 勝浦高原11号墳 | 勝浦186 | 2号墳 | 350002 | 勝浦2号墳 | 津2 | | | | | 前円 | 49×26×3 | — | — | 1998範囲確認調査 |
| 2 | 勝浦高原12号墳 | 勝浦184 | | | | | | | | | — | — | 横穴式石室 | — | 1998測量調査 |
| 3 | 勝浦高原13号墳 | 勝浦205 | 1号墳 | 350001 | 勝浦1号墳 | 津1 | | | | | 円 | 31×4.2 | — | — | 1998測量調査 |
| 4 | 勝浦峯ノ畑古墳 | 勝浦801 | 41号墳 | 350014 | 勝浦14号墳 | 津41 | | | | | 前円 | 97×58×6.8 | 単室横穴式石室 | 画文帯神獣獣・短甲片 | 1975後円部調査 |
| 5 | 勝浦井ノ浦古墳 | 勝浦774-1 | 10号墳 | 350012 | 勝浦12号墳 | 津10 | | | | | 前円 | 70×37×7 | 竪穴系横口式石室(前方部) | 鉄矛・短甲・挂甲・鉄板被壺鐙他 | 1975前方部調査 |
| 6 | 新原・奴山1号墳 | 勝浦3736-1 | 17号墳 | 350029 | 奴山8号墳 | 津17 | 津屋崎17号墳 | | 津17号墳 | 奴山8号墳 | 前円 | 50×29×4.6 | 単室横穴式石室 | 衝角付冑・鉄鉗・短甲等 | 1976調査前方部消滅 |
| 7 | 新原・奴山7号墳 | 勝浦3862-1 | 37号墳 | 350031 | 奴山10号墳 | 津32 | 津屋崎37号墳 | | 津37号墳 | 奴山10号墳 | 方 | 一辺約24× | — | 鉄斧・琥珀原石採集 | 1988範囲確認調査 |
| 8 | 新原・奴山8号墳 | 勝浦3860 | 38号墳 | | | | | | | | 円 | 約10×1～2 | — | 須恵器片採集 | 1988測量調査 |
| 9 | 新原・奴山9号墳 | 勝浦3848 | 39号墳 | | | | | | | | 円 | — | — | 須恵器片採集 | 1988測量調査 |
| 10 | 新原・奴山10号墳 | 勝浦3847 | 40号墳 | | | | | | | | 円 | 12×3 | — | 須恵器片採集 | 1988測量調査 |
| 11 | 新原・奴山11号墳 | 勝浦3841 | 23号墳 | 350032 | 奴山11号墳 | 津23 | 津屋崎23号墳 | 350032 | 津23号墳 | 奴山11号墳 | 円 | 12×2.5 | — | 須恵器片採集 | 1988測量調査 |
| 12 | 新原・奴山12号墳 | 勝浦3720 | 22号墳 | 350030 | 奴山9号墳 | 生家2号 | 津屋崎22号墳 | 350039 | 津22号墳 | 奴山9号墳 | 前円 | 43×25×6 | — | 須恵器片採集 | 1988測量調査 |
| 13 | 新原・奴山13号墳 | 勝浦3718 | | | | | | | | | 円 | 14×3 | — | 須恵器片採集 | 1988測量調査 |
| 14 | 新原・奴山14号墳 | 勝浦3718 | | | | | | | | | 円 | 14×2.2～3 | — | — | 1988測量調査 |
| 15 | 新原・奴山15号墳 | 勝浦3790-2 | 36号墳 | 350036 | 奴山15号墳 | 津36 | 津屋崎36号墳 | | | | 円 | 19×5 | — | — | 1987測量調査 |
| 16 | 新原・奴山16号墳 | 勝浦3790-1 | | | | | | | | | 円 | — | — | — | 1987測量調査 |
| 17 | 新原・奴山17号墳 | 奴山1456-1 | | | | | | | | | 円 | 11×1～1.7 | — | — | 1987測量調査 |
| 18 | 新原・奴山18号墳 | 勝浦3790-1 | | | | | | | | | 円 | 10×1.5 | — | — | 1987測量調査 |
| 19 | 新原・奴山19号墳 | 勝浦3790-2 | | | | | | | | | 円 | 9.5～11.5×2 | — | — | 1987測量調査 |
| 20 | 新原・奴山20号墳 | 勝浦3773 | 19号墳 | 350034 | 奴山13号墳 | 津19 | 津屋崎19号墳 | 350034 | | 奴山13号墳 | 円 | 29×5 | — | 須恵器片採集 | 1987範囲確認調査 |
| 21 | 新原・奴山21号墳 | 勝浦3783 | 21号墳 | 350037 | 奴山16号墳 | 津21 | 津屋崎21号墳 | 350037 | | | 円 | 17×2.3 | — | 土師器・須恵器 | 1985範囲確認調査 |
| 22 | 新原・奴山22号墳 | 勝浦3780 | 20号墳 | 350038 | 奴山17号墳 | 津20 | 津屋崎20号墳 | 350038 | | | 前円 | 75～80×54×7.8 | — | 須恵器・埴輪 | 1985～1986範囲確認調査 |
| 23 | 新原・奴山23号墳 | 勝浦3777 | | | | | | | | | 円 | 12×1.5 | — | — | 1986測量調査 |
| 24 | 新原・奴山24号墳 | 勝浦3751 | 35号墳 | 350035 | 奴山14号墳 | | 津屋崎125号墳 | 350035 | | 奴山14号墳 | 前円 | 53.5×31×7 | — | 須恵器片採集 | 1987範囲確認調査 |
| 25 | 新原・奴山25号墳 | 奴山1321 | 24号墳 | 350040 | 奴山19号墳 | 津24 | 津屋崎24号墳 | 350040 | | | 円 | 35～36×5.7～6.3 | — | 須恵器 | 1986範囲確認調査 |
| 26 | 新原・奴山26号墳 | 奴山1436-1 | | | | | | | | | 円 | 14.5～17×3.5 | — | — | 1986測量調査 |
| 27 | 新原・奴山27号墳 | 奴山1436-1 | | | | | | | | | 円 | 11.5～15.5×2～2.5 | — | — | 1986測量調査 |
| 28 | 新原・奴山28号墳 | 奴山1436-1 | | | | | | | | | 円 | 12.5～15×2～2.5 | — | — | 1986測量調査 |
| 29 | 新原・奴山29号墳 | 奴山1436-1 | | | | | | | | | 円 | 10.5～12×1.5 | — | — | 1986測量調査 |
| 30 | 新原・奴山30号墳 | 奴山1330 | 25号墳 | 350039 | 奴山18号墳 | 津22 | 津屋崎25号墳 | 350046 | | 奴山18号墳 | 前円 | 54×27.5×8 | — | 須恵器片採集 | 1986測量調査 |

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 31 | 新原・奴山31号墳 | 奴山1343-1 | | | | | | | | | 円 | 18×3 | — | — | 1986測量調査 |
| 32 | 新原・奴山32号墳 | 奴山1337-3 | | | | | | | | | 円 | — | — | — | 1987測量調査 |
| 33 | 新原・奴山33号墳 | 奴山1347 | | | | | | | | | 円 | 8×1～1.5 | — | — | 1986測量調査 |
| 34 | 新原・奴山34号墳 | 奴山1351 | 26号墳 | 350042 | 奴山21号墳 | 津26 | 津屋崎26号墳 | 350042 | | | 円 | 24×5～5.8 | 横穴式石室(石棚有り) | 須恵器片採集 | 1986測量調査 |
| 35 | 新原・奴山35号墳 | 奴山1349 | 27号墳 | 350043 | 奴山22号墳 | 津27 | 津屋崎27号墳 | 350043 | | 奴山25号墳 | 円 | 13×1.4 | — | 須恵器片採集 | 1986測量調査 |
| 36 | 新原・奴山36号墳 | 奴山1349 | 27号墳 | 350043 | 奴山22号墳 | 津27 | 津屋崎27号墳 | 350043 | | 奴山25号墳 | 円 | 16～17×4 | — | 須恵器・土師器採集 | 1986測量調査 |
| 37 | 新原・奴山37号墳 | 奴山1373 | 28号墳 | | | | 津屋崎28号墳 | 350044 | | | 円 | 13～14×3 | — | 須恵器・土師器採集 | 1986測量調査 |
| 38 | 新原・奴山38号墳 | 奴山1373 | | | | | | | | | 円 | 9×1.5 | — | 須恵器・土師器採集 | 1986測量調査 |
| 39 | 新原・奴山39号墳 | 奴山1373 | | | | | | | | | 円 | — | 横穴式石室 | — | 墳丘消滅・石室残存 |
| 40 | 新原・奴山40号墳 | 奴山1374-1 | 29号墳 | 350045 | 奴山24号墳 | 津29 | 津屋崎29号墳 | 350045 | | | 円 | 17～18×3.5～4.67 | — | 須恵器・土師器採集 | 1986測量調査 |
| 41 | 新原・奴山41号墳 | 奴山1374-1 | | | | | | | | | 円 | 10×1.2～2 | — | 須恵器片採集 | 1986測量調査 |
| 42 | 新原・奴山42号墳 | 奴山1360-1 | | | | | | | | | 円 | 11.5×2.1 | — | 須恵器片採集 | 1986測量調査 |
| 43 | 新原・奴山43号墳 | 奴山1360-1 | | | | | | | | | 円 | — | — | — | 1986測量調査 |
| 44 | 新原・奴山46号墳 | 奴山1454 | | | | | | | | | 円 | — | — | 刀剣類・馬具？ | 1987測量調査 |
| 45 | 新原・奴山47号墳 | 勝浦3736-1 | | | | | | | | | 円 | 17～19×1.5 | — | — | 1987測量調査 |
| 46 | 新原・奴山48号墳 | 勝浦3736-1 | | | | | | | | | 円 | 9.5×1 | — | — | 1987測量調査 |
| 47 | 生家大塚古墳 | 生家1919 | 33号墳 | 350051 | 奴山29号墳 | 津33 | | | | | 前円 | 73×28.5×8 | — | 須恵器・円筒埴輪 | 前方部大破・2004測量調査 |
| 48 | 大石岡ノ谷1号墳 | 大石71-1 | | 350089 | 岡の谷古墳<br>須多田5号 | | | | | | 前円 | 55×31.5×7.4 | 横穴式石室 | — | 後円部大破・2004測量調査 |
| 49 | 大石岡ノ谷2号墳 | 大石71-2 | 43号墳 | 350088 | 須多田4号墳 | 津43 | | | | | 前円 | 43×26.5×3.6 | — | — | 2004測量調査 |
| 50 | 須多田上ノ口古墳 | 須多田445 | 52号墳 | 350095 | 須多田10号墳 | 津52 | | | | | 前円 | 43×22×7 | — | — | 1995測量調査 |
| 51 | 須多田下ノ口古墳 | 須多田682 | 54号墳 | 350102 | 須多田15号墳 | 津54 | | | | | 前円 | 82.8×30×8 | — | 須恵器 | 前方部大破・1990、1992発掘調査 |
| 52 | 須多田ミソ塚古墳 | 須多田675 | 55号墳 | 350101 | 須多田14号墳 | 津55 | | | | | 前円 | 67×22×4 | — | 須恵器 | 1989～1991発掘調査 |
| 53 | 須多田天降天神社古墳 | 須多田512-3 | 53号墳 | 350097 | 天降天神社<br>裏大塚古墳<br>須多田11号 | 津53 | | | | | 前円 | 80×48×11 | — | 須恵器・円筒埴輪・形象埴輪 | 1994測量調査 |
| 54 | 須多田二タ塚古墳 | 須多田645 | 56号墳 | 350099 | 二タ塚古墳<br>須多田12号 | 津56 | | | | | 円 | 33.5×6.6 | 単室横穴式石室 | — | 1989～1991範囲確認調査 |
| 55 | 在自剣塚古墳 | 在自860 | 64号墳 | 350109 | 須多田22号墳 | 津64 | | | | | 前円 | 101.7×49×7.3 | — | 須恵器 | 2003範囲確認調査 |
| 56 | 宮司井手ノ上古墳 | 宮司 | | | | | | | | | 円 | 26×2.5 | 竪穴式石室・箱式石棺・石蓋土壙墓 | 初期須恵器・金銅製鈴・短甲・鉄柄手斧・U字型鋤先・剣 | 1989発掘調査 |
| 57 | 宮地嶽古墳 | 宮司241 | 70号墳 | 350179 | 宮地岳大塚 | 津70 | | | | | 円 | 径35 | 横口式石槨 | 頭椎大刀、金銅製馬具 | |

Table.1　津屋崎古墳群一覧表

## 8．宗像における首長墓系譜について

津屋崎古墳群を考える上で、津屋崎へ古墳群が移動する前段階について検討する。

これまで、宗像市郡内では4世紀後半の沖ノ島祭祀の開始とほぼ同時期に前方後円墳が出現すると考えられていた。しかし、近年の宗像市での発掘調査によって4世紀後半以前の前方後円墳が確認されるようになっている。ここでは、宗像地域の首長墓系譜を再検討してみたい。(13)(19)

ここで扱う宗像とは、後の律令期の宗像郡より広い遠賀郡、鞍手郡の一部を含めた地域を指し、5つの大グループに区分して検討する。大グループは、宗像の東側の現在の遠賀郡と鞍手郡鞍手町を中心とする遠賀地域と、旧宗像市を中心とする釣川中流域地域、旧玄海町を中心とする釣川下流域地域、津屋崎町を中心とする津屋崎地域、鞍手郡若宮町を中心とする犬鳴川上流域地域である。釣川中流域地域は釣川の右岸と左岸に小区分され、津屋崎地域は、勝浦と新原･奴山、生家・大石、須多田、宮司・手光の5つに小区分される。時期区分には『前方後円墳集成』の編年を用いている。(15) 前方後円墳はその規模によって首長墓（70m程度)、有力小首長（40～50m)、小規模な前方後円墳に分けている。また首長墓に準じる墓やその下のクラスとして大円墳・方墳（25～35m）も扱う。

**遠賀地域**は、縄文時代に古遠賀潟が広く入り込んでいて、古墳時代には湿地が広がっていたと思われる。この遠賀潟の河口部で3期に島津丸山古墳（56.5m）が造られる。4期には宗像に近い岡垣町波津で磯辺1号墳（60m)、遠賀で豊前坊1号墳（73.5m）が造られ、5期には塩屋古墳（72m）が造られる。その後は遠賀地域では首長墓は造られていない。4期には豊前坊3号墳（30m)、磯辺2号墳（20m）があるが首長墓ではない。

在地小豪族の墳墓と考えられるものが、8期に鞍手町の鎧塚1号墳（38m)、芦屋町の砂丘上で大城大塚古墳（34m)、10期に鞍手町の新延大塚古墳（30m)、銀冠塚古墳（18m）が造られる。いずれの古墳も円墳である。

**釣川中流域地域左岸**では、2期に宗像市郡内では一番古い前方後円墳の徳重本村2号墳（18.7m）が造られる。内部主体部に木蓋土壙墓をもつ。獣形鏡が出土している。3期には、田久瓜ヶ坂1号墳（30.8m）が造られる。粘土槨割竹形木棺2基と円筒棺1基と壺棺1基の4基の内部主体部をもつ。4期に東郷高塚古墳（64m）が造られる。内部主体部は粘土槨割竹形木棺である。5期には田久貴船前1号墳（50～60m）が造られる。6期の田久貴船前2号墳（30m)、9期のスベットウ古墳（40m)、久原澤田3号墳（45m)、10期の徳重高田16号墳（23m）は規模が小規模で在地小豪族の墳墓のようである。

**釣川中流域地域右岸**では、3期に河東山崎古墳（30m）が造られる。9期になり須恵クヒノ浦古墳（37m）が造られ、群集墳の中に城ヶ谷3号墳（22m）が造られる。いずれの古墳も在地小豪族の墳墓と考える。相原E－1号墳（70m）は規模からみれば首長墓級の古墳ではあるが、河東周辺の有力小首長の墓ではないかと考える。10期の平等寺瀬戸1号墳（20m）と7世紀の相原2号墳（21m）は円墳であり、在地小豪族の墳墓と考える。

**釣川下流域地域**では、５期に宗像大社裏で上高宮古墳が造られる。内部主体部は箱式石棺で有茎式銅鏃や鏡、短甲を副葬している。その後９期に装飾古墳である桜京古墳（41m）と牟田尻スイラA－04号墳（20m）が造られ、10期には牟田尻片峰E－07号墳（20m）が造られ、その後７世紀に円墳の池田桜B－03号墳（30m）が造られる。いずれの古墳も在地小豪族の墳墓である。

海岸部の**津屋崎地域勝浦**では、７期に勝浦峯ノ畑古墳（97m）、勝浦井ノ浦古墳（70m）が造られた後は、中断して10期に在地小豪族の墳墓である勝浦高原11号墳（49m）が造られる。

**津屋崎地域新原・奴山**では、６期に新原・奴山古墳群の立地する台地から東に500mの独立丘陵上に奴山正園古墳（32m・円墳）が造られる。新原・奴山古墳群では21号墳（17m・円墳）、７号墳（24m・方墳）が造られる。奴山正園古墳と21号墳は在地小豪族の墳墓と考えられている。７号墳は新原・奴山古墳群における祭壇を兼ねた古墳と考えられている。(1) 新原・奴山古墳群で最初に造られた首長墓は22号墳（75～80）と考えられる。後円部が巨大な前方後円墳である。その後は７期に24号墳（54m）、１号墳（50m）、８期に30号墳（54m）、12号墳（43m）が続いて造られる。また７期には円墳の20号墳（29m）、25号墳（36m）が造られる。

**津屋崎地域生家・大石**では、８期に生家大塚古墳（73m）が造られ、９期に大石岡ノ谷1号墳（55m）、大石岡ノ谷２号墳（43m）が造られる。

**津屋崎地域須多田**では、６期に在地小豪族の墳墓である円墳の須多田宮ノ下古墳（10m）が造られる。７期には円墳の須多田ニタ塚古墳（34m）が造られ、９期に須多田上ノ口古墳（43m）、須多田天降天神社古墳（80m）、須多田ミソ塚古墳（60m）、10期には在自剣塚古墳（101.7m）と須多田下ノ口古墳（83m）と相次いで造られる。

**津屋崎地域宮司・手光**では、６期に在地小豪族の墳墓である円墳の宮司井手ノ上古墳（26m）が造られた後は中断して、９期に手光大人４号墳（34m）が造られ、７世紀になって円墳の宮地嶽古墳（34m）と手光波切不動古墳（25m）が造られる。宮地嶽古墳と手光波切不動古墳は巨石を用いて横口式石槨を造る。

**犬鳴川上流域地域**では、６期に高野剣塚古墳（62.4m）が造られ、７期に高野１号墳（40m）が造られる。その後は円墳の竹原八幡塚古墳（35m）造られ、９期に石棚をもつ里古墳（20m）と装飾古墳の竹原古墳（18m）が造られる。

以上、グループごとに主要な古墳を概観した。次に津屋崎古墳群の宮地嶽古墳へと至る首長墓の系譜を考えたい。

まず３期に遠賀地域の島津丸山古墳が首長墓として最初に登場する。４期に磯辺１号墳、豊前坊１号墳と遠賀地域で首長墓が連続して造られる。この４期の時期に宗像盆地では首長墓の東郷高塚古墳が造られる。遠賀地域では５期の塩屋古墳が造られた後は首長墓と比定される古墳の築造は確認されていない。一方、釣川中流域地域では５期に田久貴船前１号墳が造られる。その後、６期には海岸部の津屋崎地域である新原・奴山古墳群へと首長

墓は移動して新原・奴山22号墳が造られる。７期に勝浦の勝浦峯ノ畑古墳、勝浦井ノ浦古墳と造られ、８期に生家大塚古墳、９期には須多田天降天神社古墳、９期から10期にかけての時期に在自剣塚古墳、須多田下ノ口古墳と首長墓が造られる。10期後の７世紀には宗像で最後の首長墓である宮地嶽古墳、手光波切不動古墳が造られる。

ここで重要なのは、首長墓系譜が遠賀地域から始まっていることである。このことについては、東郷高塚古墳より古い前方後円墳の存在が問題としてあげられている。(20) しかし、２期の徳重本村２号墳は全長18.7mで、内部主体部は石蓋土壙墓であり、田久瓜ヶ坂古墳は内部主体部に粘土槨割竹形木棺をもつが、墳丘規模が30.8mと小さく、同時期の全長56.5mの島津丸山古墳との間には格差があり、首長墓とは考えにくい。これら宗像市郡内の小規模な前方後円墳の被葬者は弥生時代中期に青銅武器を副葬した在地集団から発展した在地豪族の墳墓であり、首長墓系譜にはのらないと考える。

Fig. 61　宗像の前方後円墳と大型円墳（番号はTable.2に対応）

4世紀後半の沖ノ島祭祀の第一段階の岩上祭祀について胸形君の関与よりも大和政権による祭祀であるという和田萃の考察がある。(21) 第一段階では遠賀川河口の崗水門を管理した集団も沖ノ島祭祀に加わっていた可能性を指摘している。

4期に東郷高塚古墳が造られて、5期の田久貴船前1号墳と釣川中領域地域で首長墓を造っているが、6期になり津屋崎の入り海沿いに首長墓を造るようになる。津屋崎地域で最初の首長墓である新原・奴山22号墳は全長75～80m、高さ7.8mと新原・奴山古墳群でも中心の位置を占める古墳である。次の7期の勝浦峯ノ畑古墳は全長97mと古墳の規模は増

| 番号 | 古墳名 | 墳形 | 所在地 | 規模 | 内部主体部 | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 勝浦高原11号墳 | 前方後円墳 | 津屋崎町勝浦 | 48 | | | |
| 2 | 勝浦高堀古墳 | 前方後円墳 | 勝浦 | | 横穴式石室 | 挂甲小札・素環刀子柄頭・鉄鉾 | |
| 3 | 勝浦峯ノ畑古墳 | 前方後円墳 | 勝浦 | 97 | 横穴式石室 | 画文帯神獣鏡・短甲・琴柱 | 旧　勝浦14号墳　石室に石柱有 |
| 4 | 勝浦井ノ浦古墳 | 前方後円墳 | 勝浦 | 70 | 横穴式石室 | 三環鈴・挂甲小札・木心鉄板被盾鏡 | 旧　勝浦12号墳 |
| 5 | 奴山正園古墳 | 円　墳 | 奴山 | 32 | 箱式石棺 | 短剣・短刀・工具・短甲・陶質土器 | 旧　奴山５号墳・津屋崎13号墳 |
| 6 | 新原奴山1号墳 | 前方後円墳 | 勝浦 | 50 | 横穴式石室 | 衝角付冑・短甲・鉄鉗・鏃・鋸 | 旧　17号墳 |
| 7 | 新原奴山12号墳 | 前方後円墳 | 勝浦 | 54 | | | 旧　22号墳 |
| 8 | 新原奴山24号墳 | 前方後円墳 | 勝浦 | 53.5 | | | 旧　125号墳　周溝　周堤 |
| 9 | 新原奴山20号墳 | 円　墳 | 勝浦 | 30 | | | 旧　19号墳　葺石 |
| 10 | 新原奴山22号墳 | 前方後円墳 | 勝浦 | 75～80 | | | 旧　20号墳　3段築成　埴輪　葺石　周溝 |
| 11 | 新原奴山25号墳 | 円　墳 | 勝浦 | 35～36 | | | 旧　24号墳　2段築成　周溝 |
| 12 | 新原奴山30号墳 | 前方後円墳 | 奴山 | 54 | | | 旧　25号墳 |
| 13 | 生家大塚古墳 | 前方後円墳 | 生家 | 73 | | | 埴輪 |
| 14 | 大石岡ノ谷1号墳 | 前方後円墳 | 大石 | 55 | 横穴式石室 | 木製案・鋸 | |
| 15 | 大石岡ノ谷2号墳 | 前方後円墳 | 大石 | 43 | | | |
| 16 | 須多田上ノ口古墳 | 前方後円墳 | 須多田 | 43 | | | 周溝・周提 |
| 17 | 須多田下ノ口古墳 | 前方後円墳 | 須多田 | 83 | | | 2重周溝 |
| 18 | 須多田ミソ塚古墳 | 前方後円墳 | 須多田 | 60 | | | 2段築成 |
| 19 | 須多田天降天神社古墳 | 前方後円墳 | 須多田 | 80 | | | 2段築成・埴輪・葺石・周溝・周提 |
| 20 | 須多田ニタ塚古墳 | 円　墳 | 須多田 | 33.5 | 横穴式石室 | | 葺石・2重周溝 |
| 21 | 在自剣塚古墳 | 前方後円墳 | 在自 | 101.7 | | | |
| 22 | 宮地嶽古墳 | 円　墳 | 宮司 | 34 | 横穴式石室 | 金銅製頭椎太刀・金銅製盾鏡・ガラス板 | 横口式石槨・竈 |
| 23 | 手光波切不動古墳 | 円　墳 | 福間町手光 | 25？ | 横穴式石室 | | 横口式石槨 |
| 24 | 手光大人4号墳 | 前方後円墳 | 手光 | 40～45 | 複室　横穴式石室 | 鋸・金銅製馬具 | 群集墳 |
| 25 | 上八温留04号墳 | 前方後円墳 | 宗像市上八 | 23 | | | 旧　北谷4号墳 |
| 26 | 田野瀬戸01号墳 | 前方後円墳 | 田野 | 25 | | | 旧　瀬戸2号墳 |
| 27 | 田野瀬戸04号墳 | 前方後円墳 | 田野 | 25 | | | 旧　瀬戸4号墳 |
| 28 | 池田桜B-03号墳 | 円　墳 | 池田 | 30 | 複室　横穴式石室 | | 旧　池田15号墳　群集墳 |
| 29 | 神湊上野1号墳 | 前方後円墳 | 牟田尻 | 40 | 横穴式石室 | | 旧　上野3号墳 |
| 30 | 牟田尻スイラA-04号墳 | 前方後円墳 | 牟田尻 | 20 | 横穴式石室 | | 群集墳 |
| 31 | 桜京古墳 | 前方後円墳 | 牟田尻 | 41 | 複室　横穴式石室 | | 旧　桜京2号墳　石屋形　装飾 |
| 32 | 牟田尻母倉A-01号墳 | 前方後円墳 | 牟田尻 | 35 | | | 群集墳 |
| 33 | 牟田尻母倉B-09号墳 | 前方後円墳 | 牟田尻 | 30 | | | 群集墳 |
| 34 | 牟田尻片峰E-07号墳 | 前方後円墳 | 牟田尻 | 20 | 横穴式石室 | | 群集墳 |
| 35 | 相原E-1号墳 | 前方後円墳 | 河東 | 70 | 複室　横穴式石室 | 挂甲小札・馬具 | 群集墳 |
| 36 | 相原2号墳 | 円　墳 | 河東 | 20.8 | 複室　横穴式石室 | 圭頭太刀付属金具・新羅土器 | 群集墳 |
| 37 | 河東山崎古墳 | 前方後円墳 | 河東 | 30 | | | |
| 38 | 須恵クヒノ浦古墳 | 前方後円墳 | 須恵 | 37 | 横穴式石室 | 鋸・馬具 | |
| 39 | 平等寺瀬戸1号墳 | 円　墳 | 平等寺 | 20 | 複室　横穴式石室 | 金銅製円頭太刀・馬具・馬鈴 | 石棚 |
| 40 | 城ヶ谷3号墳 | 前方後円墳 | 三郎丸 | 22 | 横穴式石室２ | 鏃 | 群集墳 |
| 41 | スベットウ古墳 | 前方後円墳 | 田熊 | 35～40 | 横穴式石室 | 挂甲小札 | |
| 42 | 東郷高塚古墳 | 前方後円墳 | 東郷 | 64.4 | 割竹形木棺 | 剣・鉾 | 壺形埴輪 |
| 43 | 久原澤田Ⅱ-3号墳 | 前方後円墳 | 久原 | 45 | 横穴式石室 | 馬具 | 群集墳　埴輪　周溝 |
| 44 | 田久貴船前1号墳 | 前方後円墳 | 田久 | 50～60 | | | |
| 45 | 田久貴船前2号墳 | 前方後円墳 | 田久 | 30 | | | |
| 46 | 田久瓜ヶ坂1号墳 | 前方後円墳 | 田久 | 30.8 | 割竹形木棺２　円筒棺 | 鉄斧・鏃先・ヤリガンナ・剣 | |
| 47 | 徳重本村2号墳 | 前方後円墳 | 徳重 | 18.7 | 石蓋土壙墓 | 鉄斧・獣形鏡 | |
| 48 | 徳重高田16号墳 | 前方後円墳 | 徳重 | 22.5 | 横穴式石室 | 鍔 | 群集墳 |
| 49 | 名残高田25号墳 | 前方後円墳 | 名残 | 30 | 横穴式石室 | | 群集墳 |
| 50 | 里古墳 | 前方後円墳 | 若宮町山口 | 20 | 複室　横穴式石室 | | 石棚　周溝 |
| 51 | 竹原古墳 | 円　墳 | 竹原 | 18 | 複室　横穴式石室 | 馬具 | 石棚　壁画　周溝 |
| 52 | 竹原八幡塚古墳 | 円　墳 | 竹原 | 35 | 横穴式石室 | 馬具 | 埴輪　3段築成　周溝 |
| 53 | 高野剣塚古墳 | 前方後円墳 | 高野 | 62.4 | | | 埴輪　3段築成　周溝 |
| 54 | 高野1号墳 | 前方後円墳 | 高野 | 40 | | | 埴輪　帆立貝式 |
| 55 | 磯辺1号墳 | 前方後円墳 | 岡垣町波津 | 60 | | | 埴輪・葺石 |
| 56 | 磯辺2号墳 | 前方後円墳 | 波津 | 20 | | | 2段築成・埴輪・葺石 |
| 57 | 塩屋古墳 | 前方後円墳 | 原 | 72 | | | 埴輪 |
| 58 | 大城大塚古墳 | 円　墳 | 芦屋町大城 | 34 | 横穴式石室 | 鉄矛・鉄剣・短甲・耳環・ガラス玉 | |
| 59 | 島津丸山古墳 | 前方後円墳 | 遠賀町島津 | 56.5 | | | 2段築成　葺石　周溝 |
| 60 | 豊前坊1号墳 | 前方後円墳 | 上別府 | 73.5 | | 鉄刀 | 壺形埴輪　3段築成　周溝 |
| 61 | 豊前坊3号墳 | 前方後円墳 | 上別府 | 30+α | 箱式石棺 | 鉄剣 | |
| 62 | 鎧塚1号墳 | 円　墳 | 鞍手町新延 | 38 | | | 埴輪　2段築成　周溝 |
| 63 | 新延大塚古墳 | 円　墳 | 新延 | 30 | 複室　横穴式石室 | 馬具 | |
| 64 | 銀冠塚古墳 | 円　墳 | 八尋 | 18 | 複室　横穴式石室 | 銀製冠・八葉文杏葉 | 周溝 |
| 65 | 谷頭古墳 | 前方後円墳 | 宮田町大隈 | 22 | 横穴式石室 | | 埴輪 |

Table.2　宗像前方後円墳と大型円墳地名表

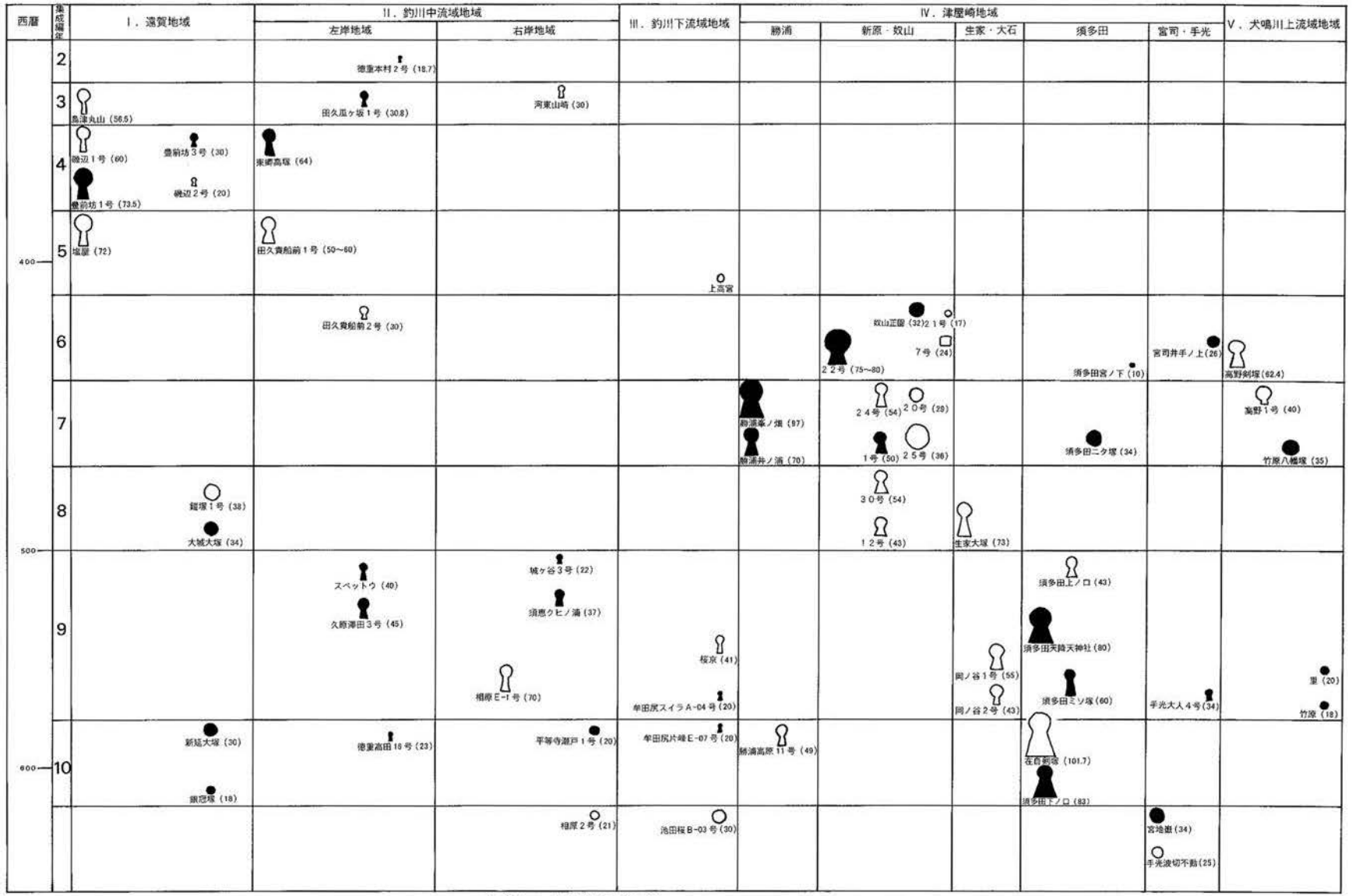



Table.3　宗像の古墳編年表　白抜きは年代推定根拠の弱いもの

大する、このことから胸形君の権力が次第に大きくなったことを伺わせる。その後８期は変化がなく、古墳時代後期の９期には須多田天降天神社古墳（80m）、10期の在自剣塚古墳（101.7m）、須多田下ノ口古墳（83m）とそれまでの古墳の中でも大きな前方後円墳が相次いで築造されている。この時期の北部九州では磐井の乱が起こっている。その後の７世紀前半には畿内の影響を伺わせる横口式石槨を採用する宮地嶽古墳や手光波切不動古墳が造られ、首長墓の築造は終焉をむかえる。

７世紀は胸形君が沖ノ島祭祀を独占的に関与するようになる、またその支配地である宗像郡が宗像神社の神郡になる。このことは胸形君徳善の娘である尼子娘が、天武天皇との間に高市皇子を生んだことが大きく作用したものと思われる。

弥生時代以来の宗像の在地勢力は古墳時代前葉には遠賀地域の豪族に比べて大きな力を有していなかったようである。しかし、古墳時代中葉以降徐々に力をもってきて、墳墓を海岸線の津屋崎に移動させた後の時期には、大きな力を有するようになる。ついには古墳時代終末に天皇家との姻戚関係をもつことによって、律令国家体制下においても、その特権的な力を持つことができたのである。

註

（１）橋口達也編『新原･奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第６集　津屋崎町教育委員会　1989年
（２）橋口達也編『宮司井手ノ上古墳』津屋崎町文化財調査報告書第７集　津屋崎町教育委員会　1991年
（３）池ノ上宏・安武千里編『須多田古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第12集　津屋崎町教育委員会　1996年
（４）安武千里編『勝浦北部丘陵遺跡群』津屋崎町文化財調査報告書第13集　津屋崎町教育委員会　1998年
（５）池ノ上宏編『新原･奴山古墳群Ⅱ』津屋崎町文化財調査報告書第17集　津屋崎町教育委員会　2001年
（６）池ノ上宏編『津屋崎町内遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第19集　津屋崎町教育委員会　2002年
（７）貝原益軒『筑前國續風土記』1701年
（８）佐田茂「勝浦峯ノ畑古墳」『津屋崎町史　通史編』津屋崎町　1999年
（９）石山勲編『新原･奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書第54集　1977年
（10）児玉真一編『奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第３集　福岡県教育委員会　津屋崎町教育委員会　1981年
（11）橋口達也編『新原･奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第５集　津屋崎町教育委員会　1987年
（12）宮地嶽神社『国宝宮地嶽古墳出土品修理報告書』1968年

(13) 池ノ上宏・花田勝広「筑紫・宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』第85巻第1号　日本考古学会　1999年
(14) 加藤一純・鷹取周成編『筑前國續風土記附録』1798年
(15) 広瀬和雄「畿内における前方後円墳の編年」『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版　1991年
(16) 池ノ上宏編『生家釘ヶ裏遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第14集　津屋崎町教育委員会　1998年
(17) 高橋徹「九州の埴輪について-研究の現状と課題-」『九州の埴輪その変遷と地域性－壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾－』九州前方後円墳研究会　2000年
(18) 錦織亮介「椎ヶ元観音像」『津屋崎町史　通史編』津屋崎町　1999年
(19) 池ノ上宏「宗像地域における前方後円墳の終焉」『前方後円墳の終焉　発表要旨』埋蔵文化財研究会　1998年
(20) 熊代昌之「第３章まとめ　３．釣川中流域における前方後円墳の系譜について」『徳重本村』宗像市文化財調査報告書第52集　宗像市教育委員会　2002年
(21) 和田萃「沖ノ島と大和王権」『古代を考える　沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館　1998年


| | |
|---|---|
| ふりがな | つやざきこふんぐん |
| 書　　名 | 津屋崎古墳群Ⅰ |
| 副 書 名 | 福岡県宗像郡津屋崎町所在古墳群の調査報告 |
| 巻　　次 | |
| シリーズ名 | 津屋崎町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第２０集 |
| 編著者名 | 池ノ上　宏・田上　浩司 |
| 編集機関 | 津屋崎町教育委員会 |
| 所在地 | 〒811－3304　福岡県宗像郡津屋崎町大字津屋崎４５８－１　Tel 0940－52－1234 |
| 発行年月日 | 西暦　2004年　3月　31日 |


| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | <br>遺跡番号 | 北緯<br>° ′ ″ | 東経<br>° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アラジ ツルギヅカコフン<br>在自剣塚古墳 | 大字在自８６０番地他 | 40363 | 350109 | 33° 47′ 39″ | 130° 29′ 17″ | 02.11.13～03.3.31 | 8,575 | 範囲確認 |
| ユクエ オオツカコフン<br>生家大塚古墳 | 大字生家1919番地他 | 40363 | 350051 | 33° 48′ 46″ | 130° 29′ 02″ | 03.8.6～04.1.30 | 3,335 | 〃 |
| オオ イシ オカノタニ コフングン<br>大石岡ノ谷古墳群 | 大字大石71-1番地他 | 40363 | 350088<br>350089 | 33° 48′ 20″ | 130° 29′ 23″ | 03.10.2～03.12.3 | 4,188 | 〃 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 在自剣塚古墳 | 古墳 | 古墳 | 前方後円墳（101.7m） | 須恵器・土師器・青磁碗 | 宗像地区最大規模 |
| 生家大塚古墳 | 〃 | 古墳 | 前方後円墳（73m） | 埴輪・須恵器 | |
| 大石岡ノ谷古墳群 | 〃 | 古墳 | 前方後円墳（１号墳55m、２号墳43m）<br>円墳（３号墳10m） | | |

# 図　版

航空写真（昭和57年〈1982〉５月撮影）

ＰＬ－２　在自剣塚古墳

１．くびれ～後円部（南西から）

２．後円部頂部（南西から）

３．くびれ部（北東から）

１．後円部
（北東から）

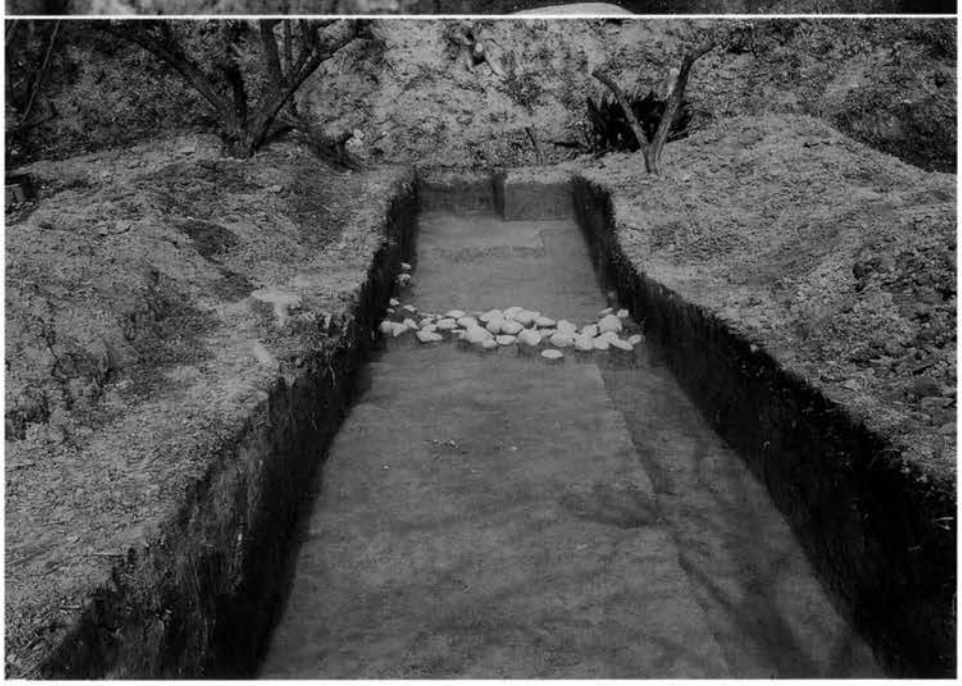
２．前方部と西側面
（西から）

３．前方部から
玄界灘を望む
（北東から）

ＰＬ－４　在自剣塚古墳

1．第1トレンチ
（北西から）

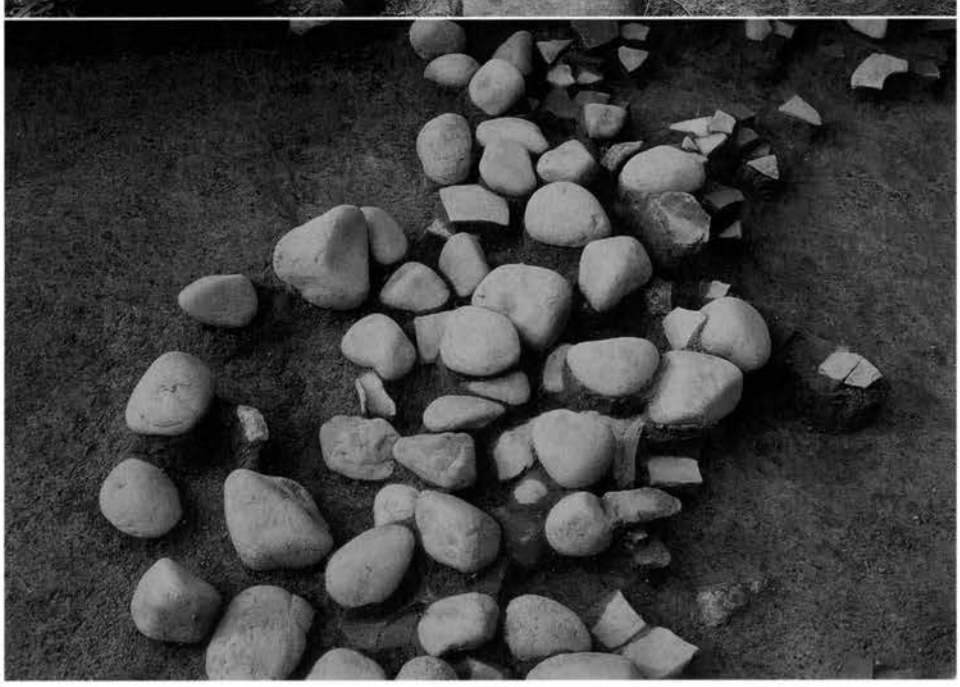
2．第1トレンチ
北壁
（南西から）



3．第2トレンチ
（南西から）

１．第２トレンチ
（北東から）

２．第２トレンチ
完掘後
（北東から）



３．第２トレンチ
集石状況
（南東から）

ＰＬ－６　在自剣塚古墳

１．第２トレンチ
東壁北側
（北西から）

２．第２トレンチ
東壁中央部
（北西から）

３．第２トレンチ
東壁南側
（北西から）

１．第３トレンチ
（南東から）

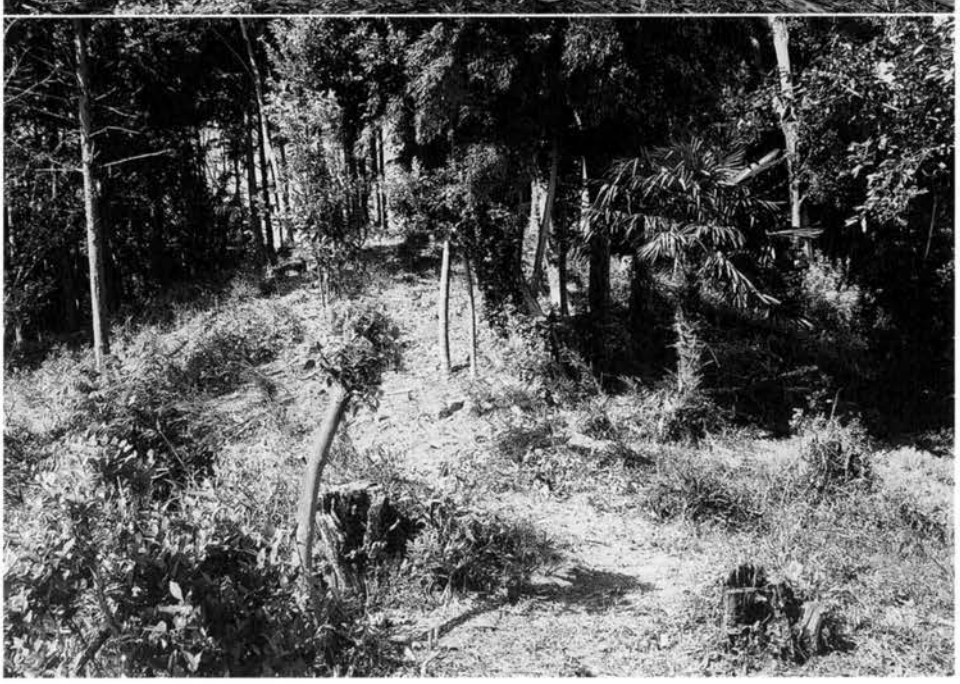
２．第３トレンチ
北壁
（南西から）

３．第２トレンチ
調査風景
（北東から）

ＰＬ－８　生家大塚古墳

１．古墳遠景
（南西から）

２．後円部
（北から）



３．くびれ～後
円部（南から）

１．くびれ部～
前方部(北から)

２．前方部
（南から）

３．後円部周溝
埴輪出土状況
（北から）

1．１号墳遠景
（東から）

2．１号墳後円
部崩壊部分
（東から）

3．１号墳後円
部北側面
（東から）

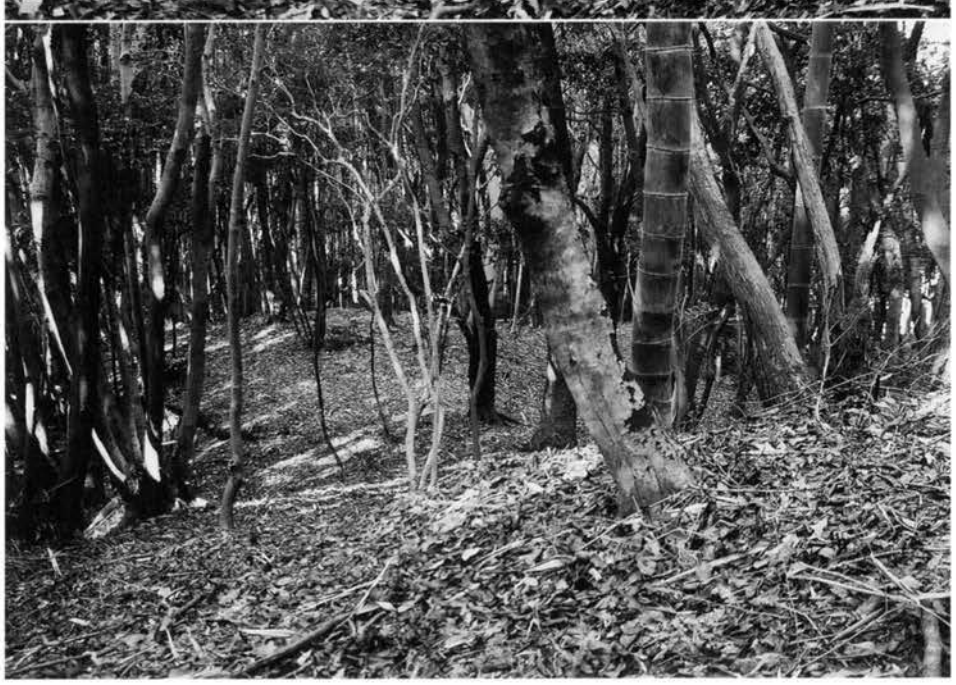
１．１号墳後円部～前方部（東から）

２．１号墳前方部～後円部（西から）

３．１号墳前方部～後円部（西から）

１．１号墳前方部北側面（北西から）

２．１号墳前方部～２号墳切り通し（西から）



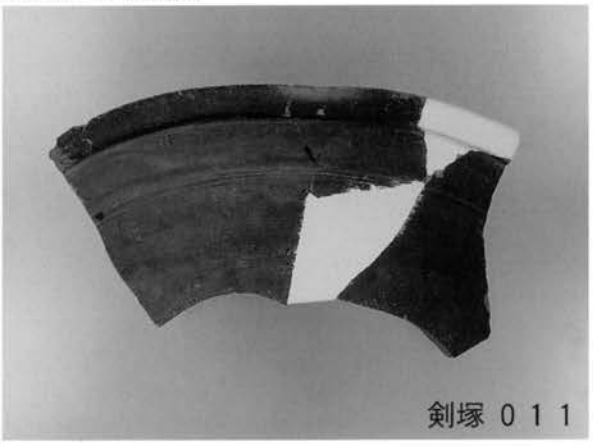
３．２号墳後円部～前方部（東から）

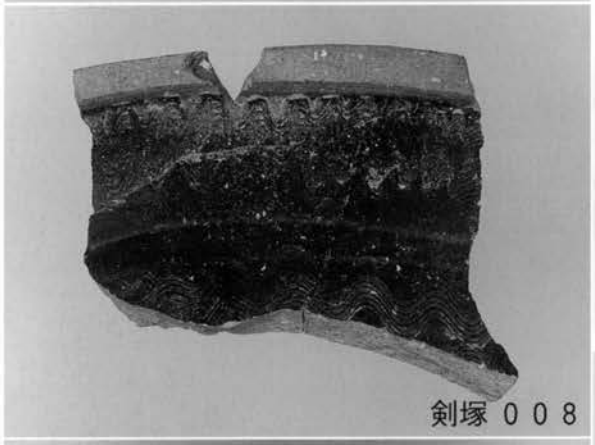
1．２号墳前方部
～後円部
（西から）

２．２号墳前方
部北側面
（北西から）

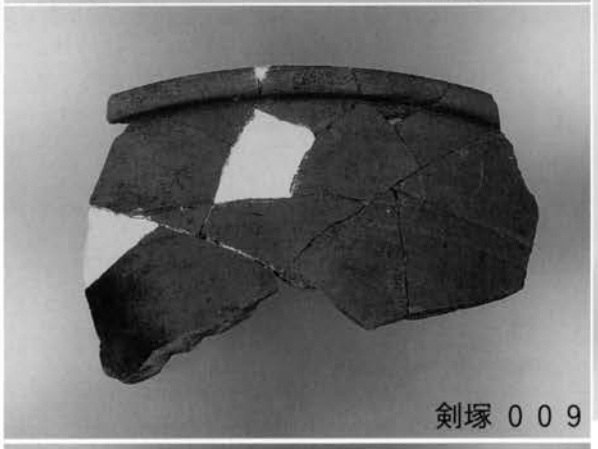
３．３号墳
（東から）

剣塚 004

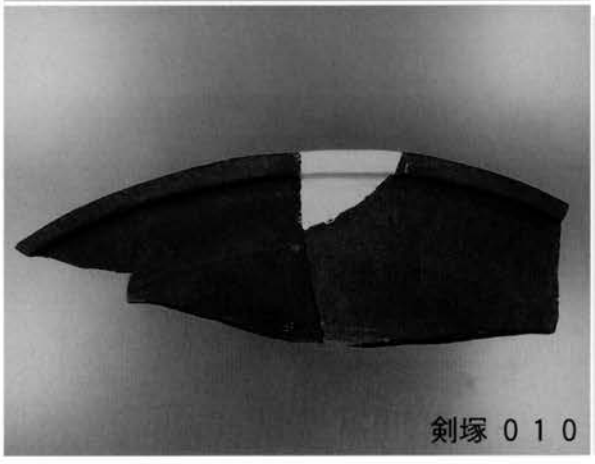

剣塚 011

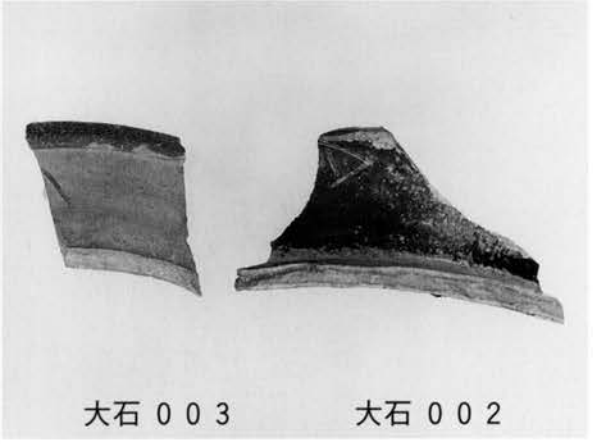

剣塚 008

剣塚 013　剣塚 014


剣塚 009

生家 001


剣塚 010


大石 003　大石 002

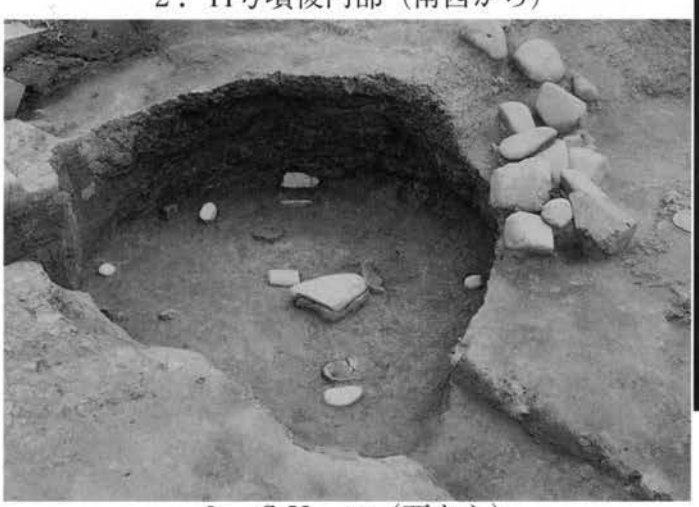
航空写真（昭和57年〈1982〉５月撮影）
数字は勝浦高原古墳群の古墳番号

1．11号墳空撮（北西から）

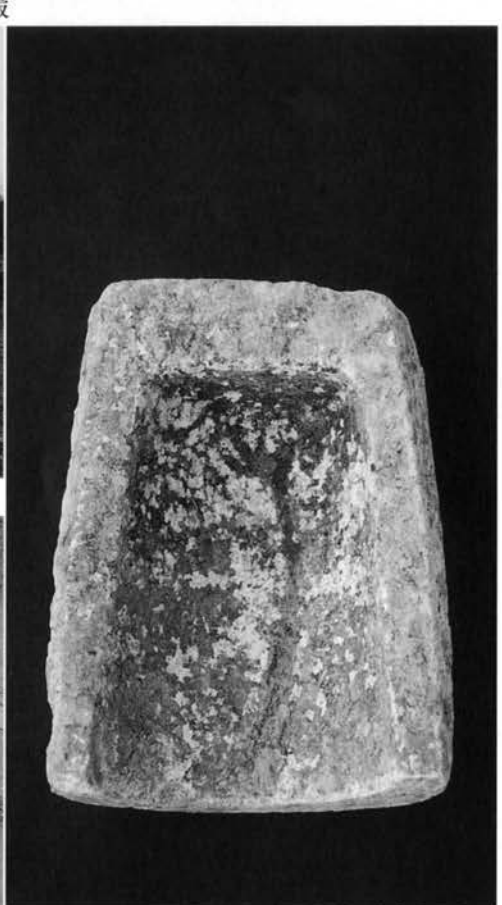
2．11号墳空撮（北東から）

１．11号墳空撮

２．11号墳後円部（南西から）

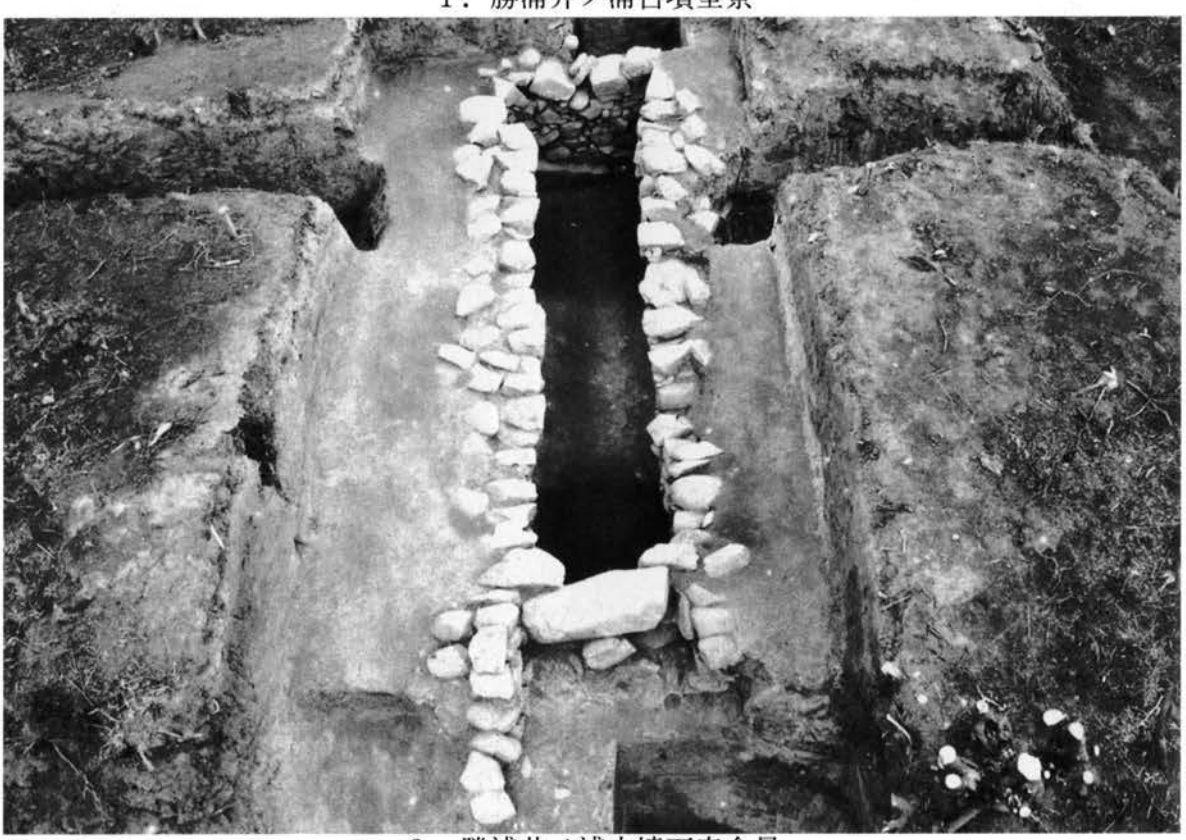


３．ＳＵ　52（西から）



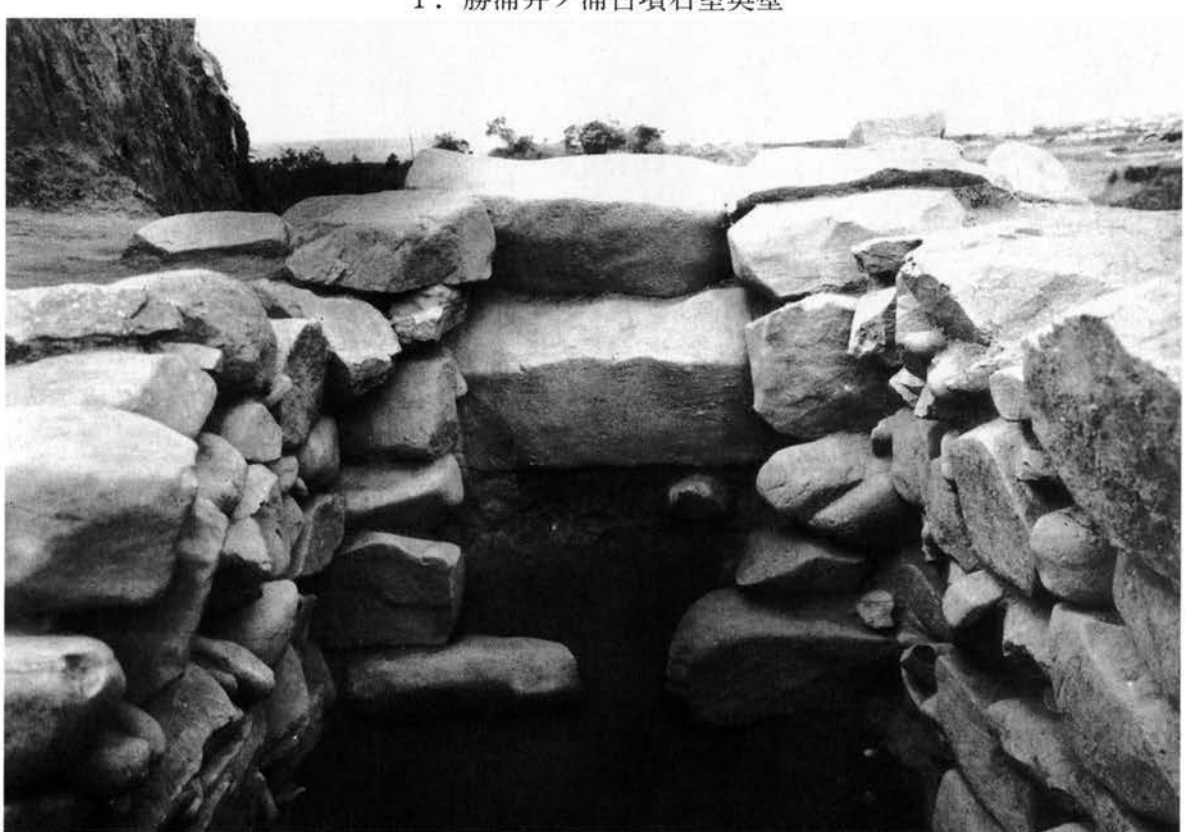
４．ＳＵ　52出土銅鐸鋳型未製品

1．勝浦井ノ浦古墳全景

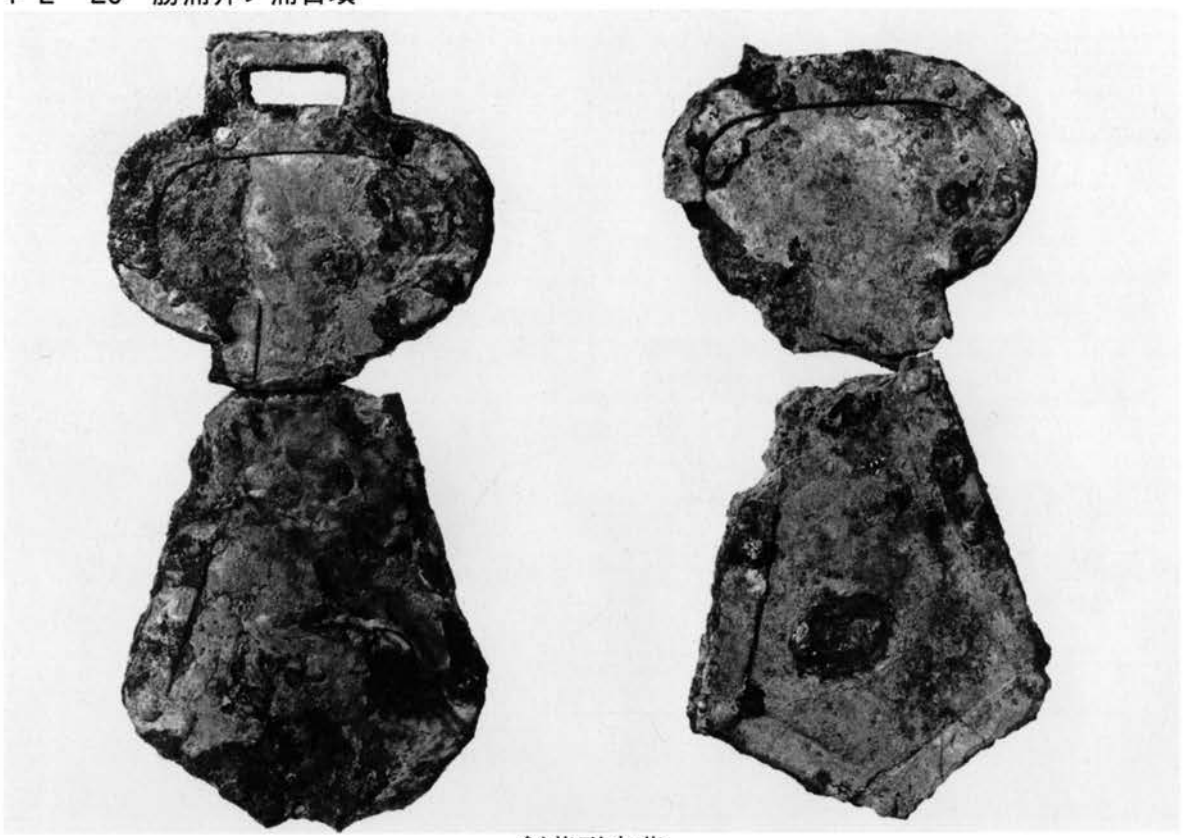


2．勝浦井ノ浦古墳石室全景

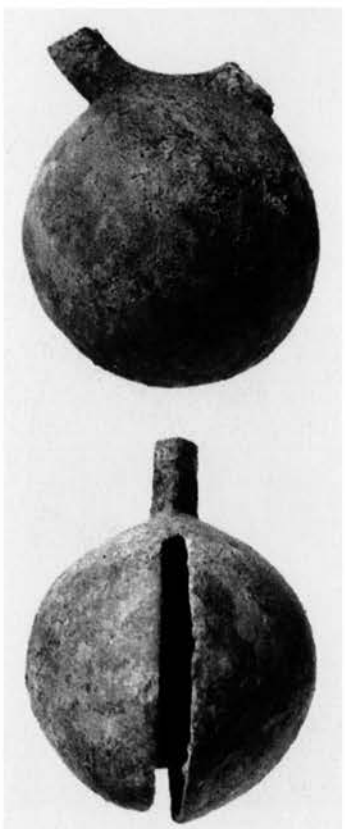
1．勝浦井ノ浦古墳石室奥壁



2．勝浦井ノ浦古墳石室横口部

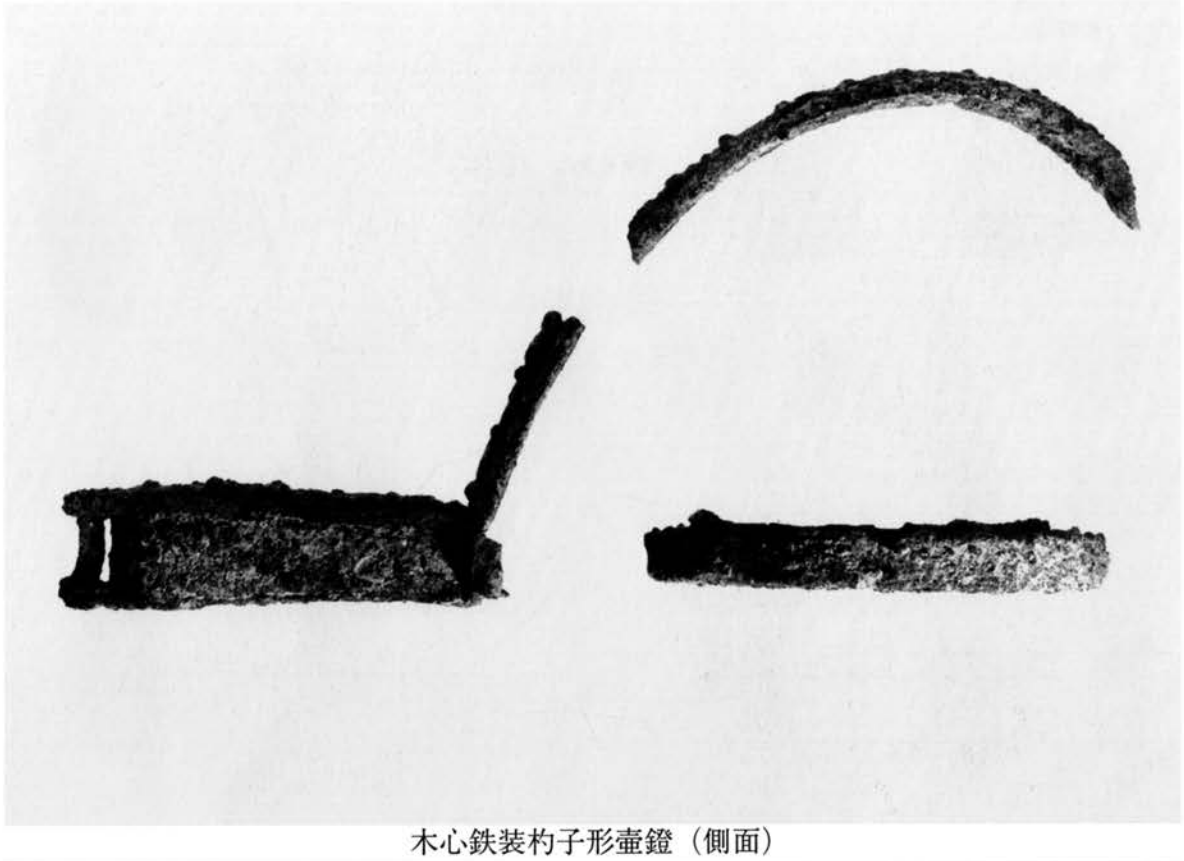


剣菱形杏葉



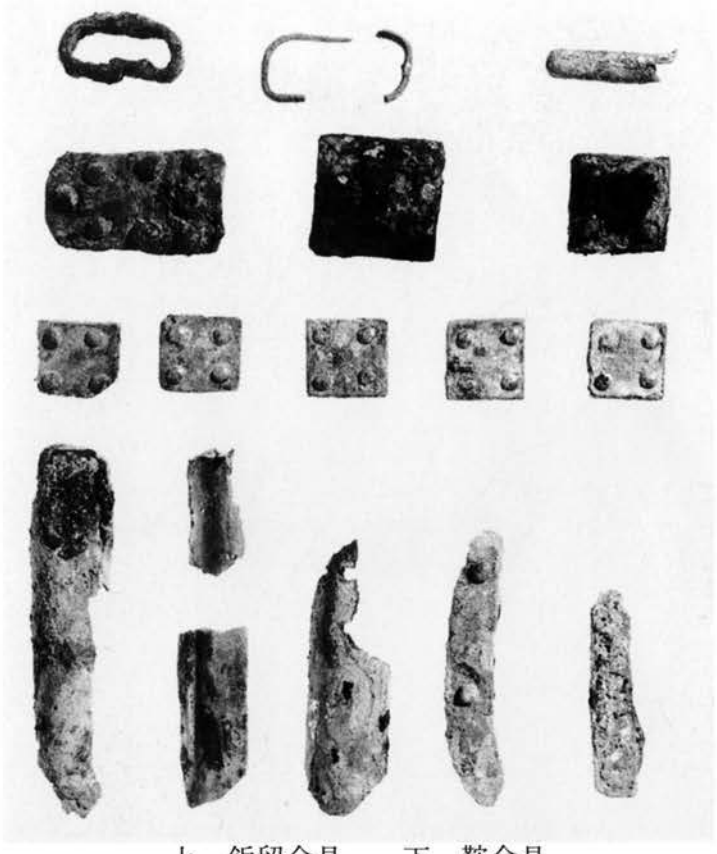
環鈴

木心鉄装輪鐙



木心鉄装杓子形壷鐙（側面）

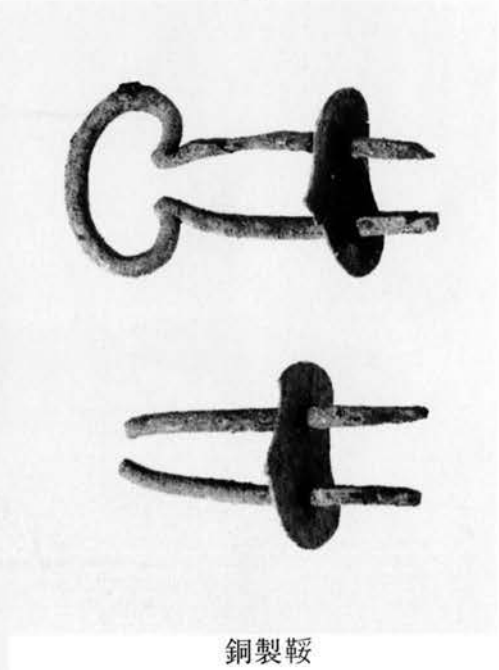
木心鉄装杓子形壷鐙



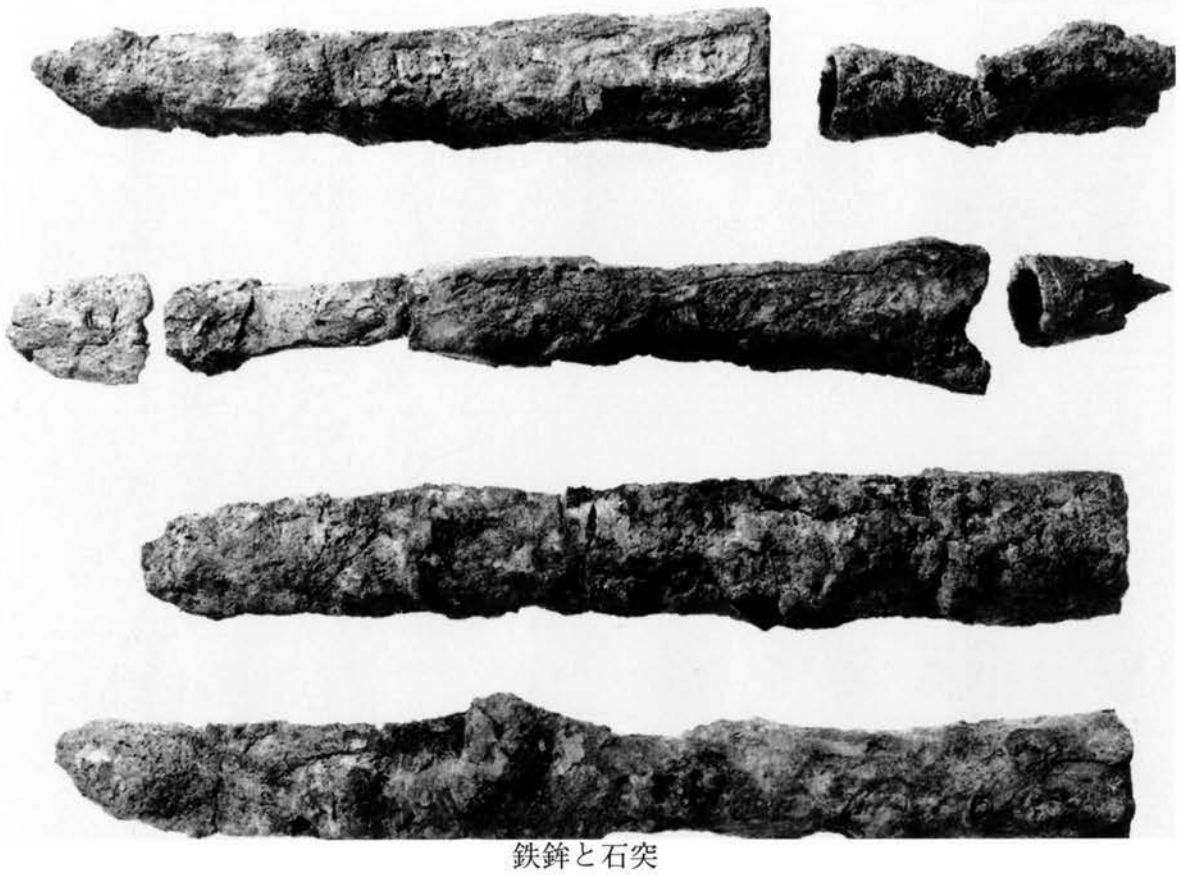
上．鋲留金具　　下．鞍金具

鞍金具

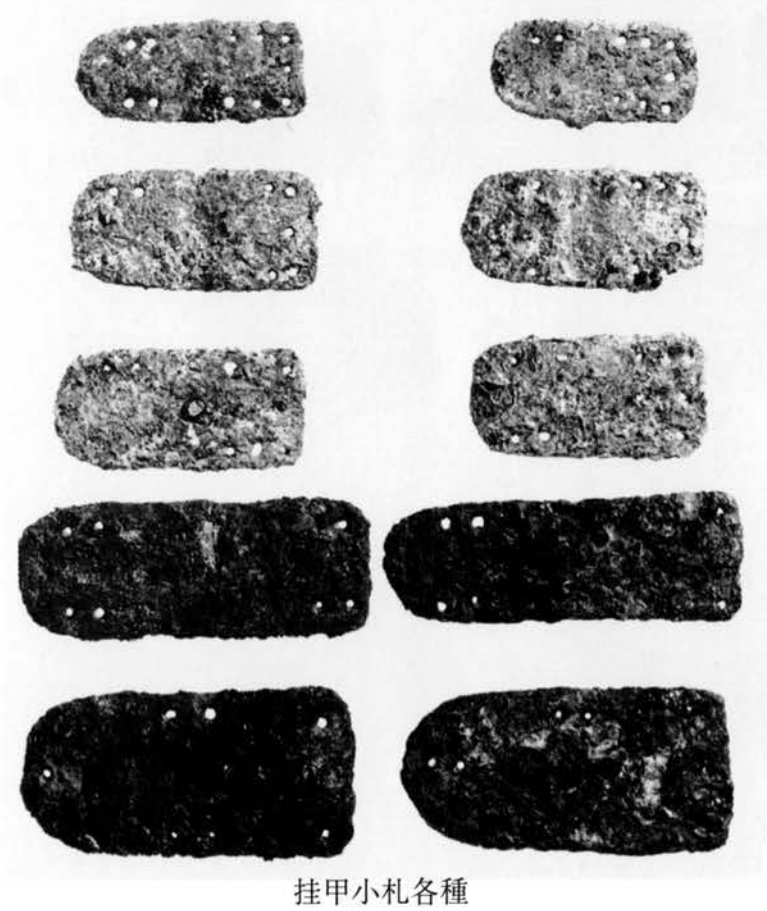
鉸具・轡



銅製鞍

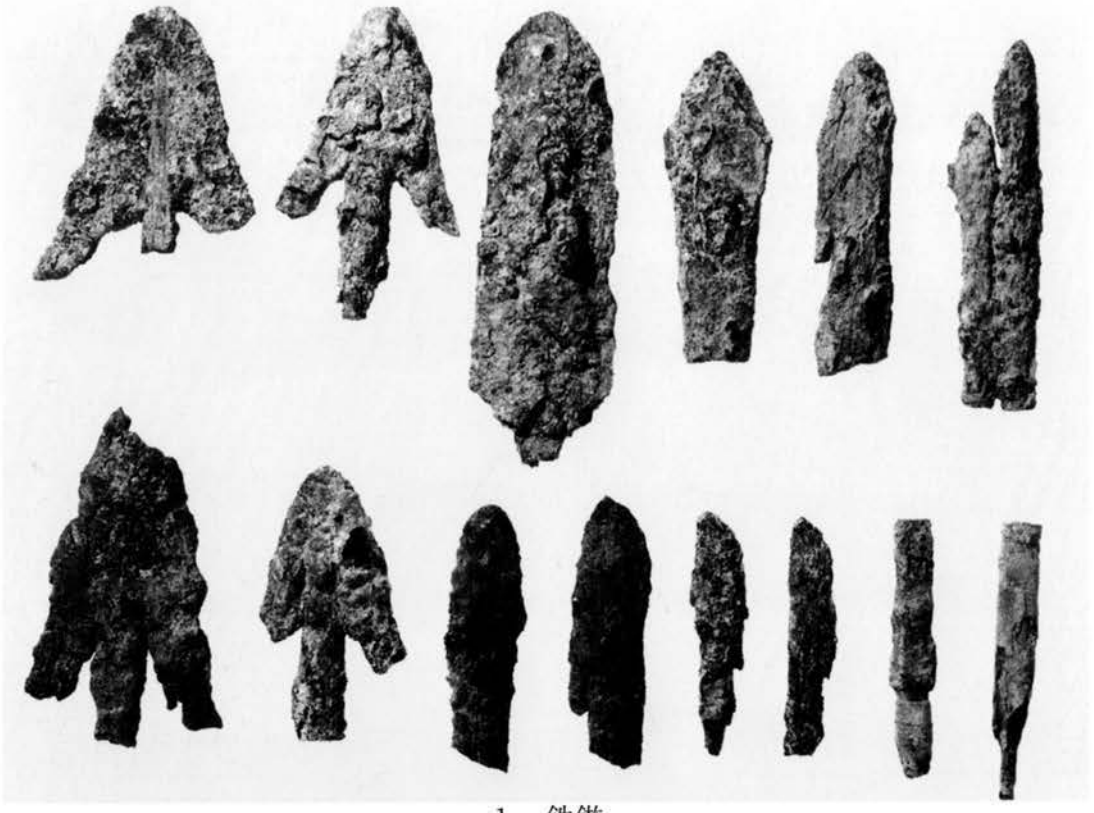


鉄鉾と石突

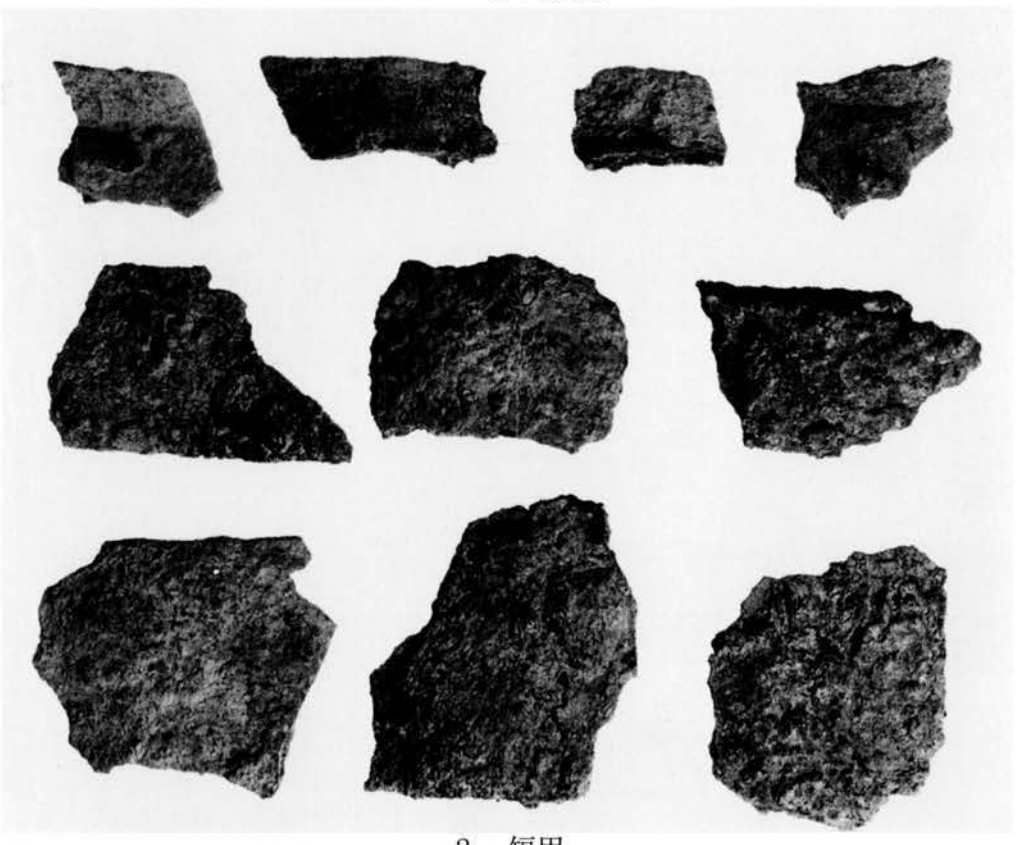


挂甲小札各種

挂甲小札



1．鉄鏃



2．短甲

1．勝浦井ノ浦古墳盛土下出土住居跡全景

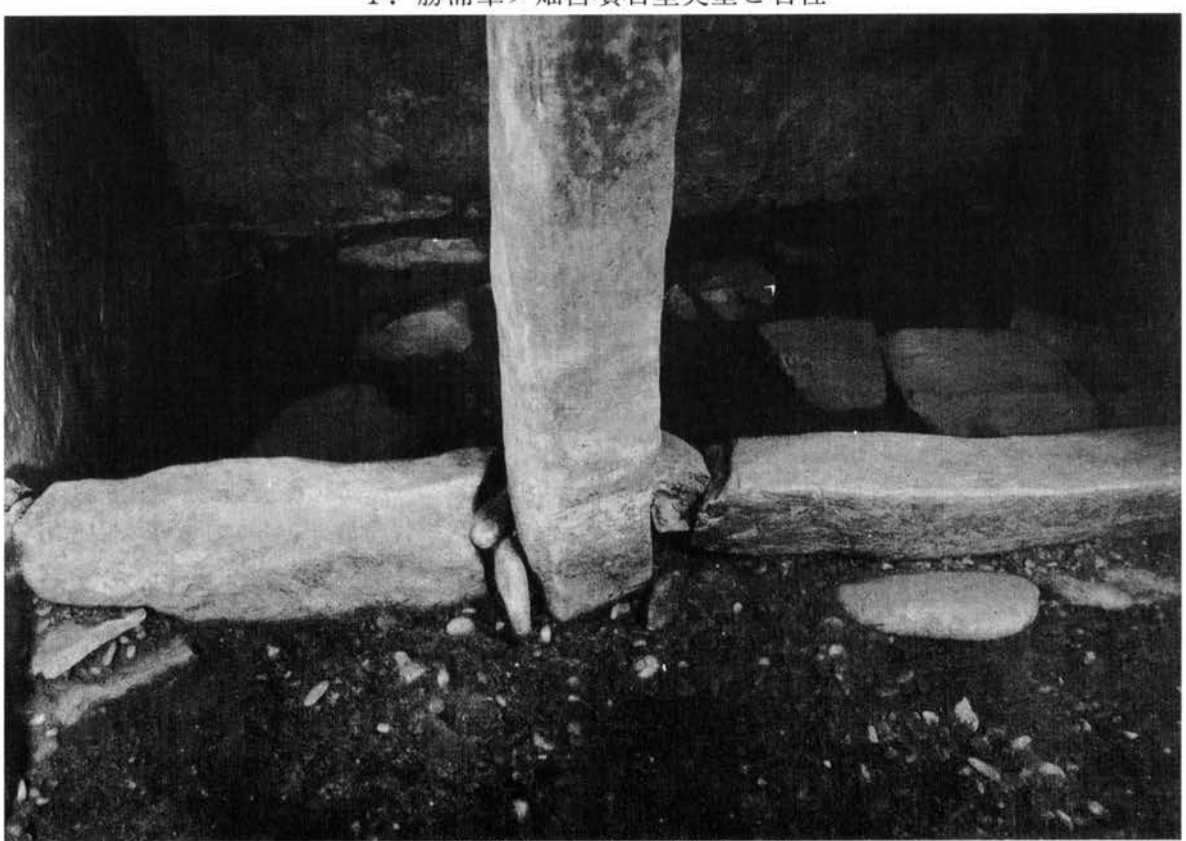
2．勝浦井ノ浦古墳盛土下１号住居跡

１号住居跡内出土土師器

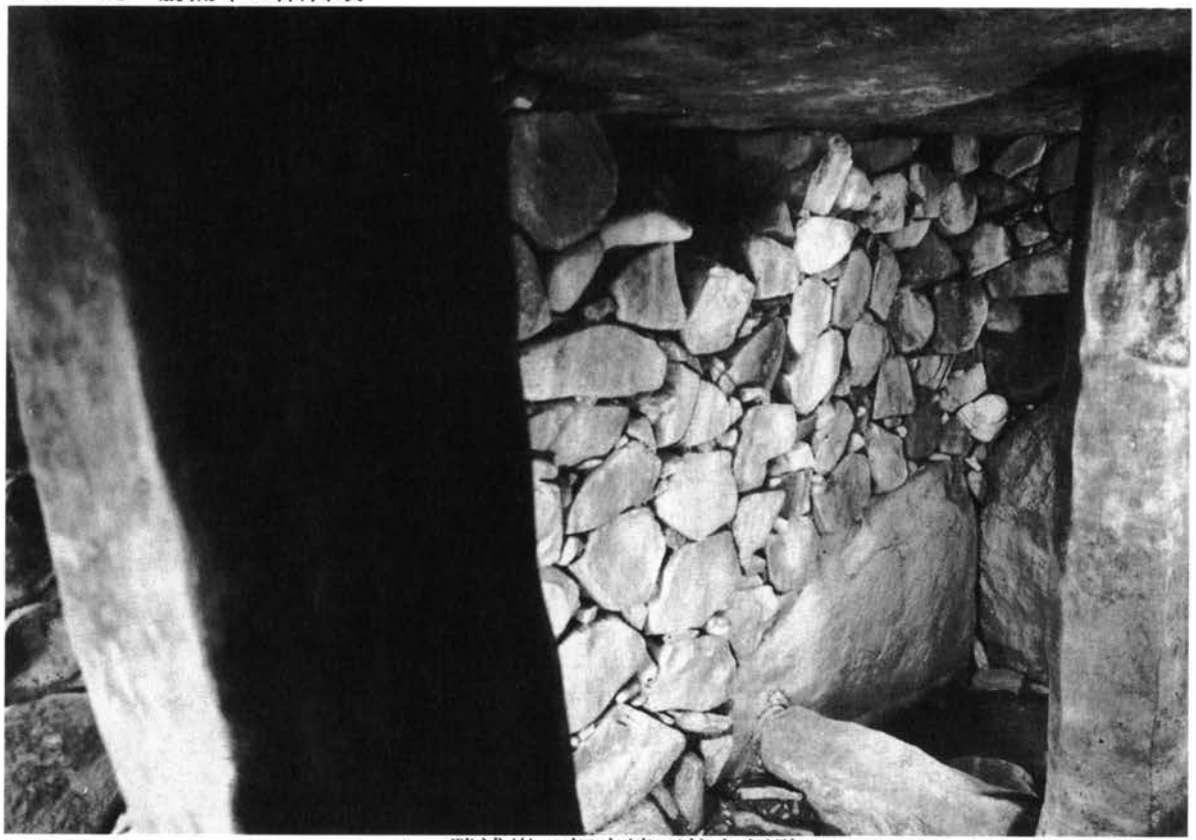
1．勝浦峯ノ畑古墳遠景（東から）

2．勝浦峯ノ畑古墳全景（南西から）

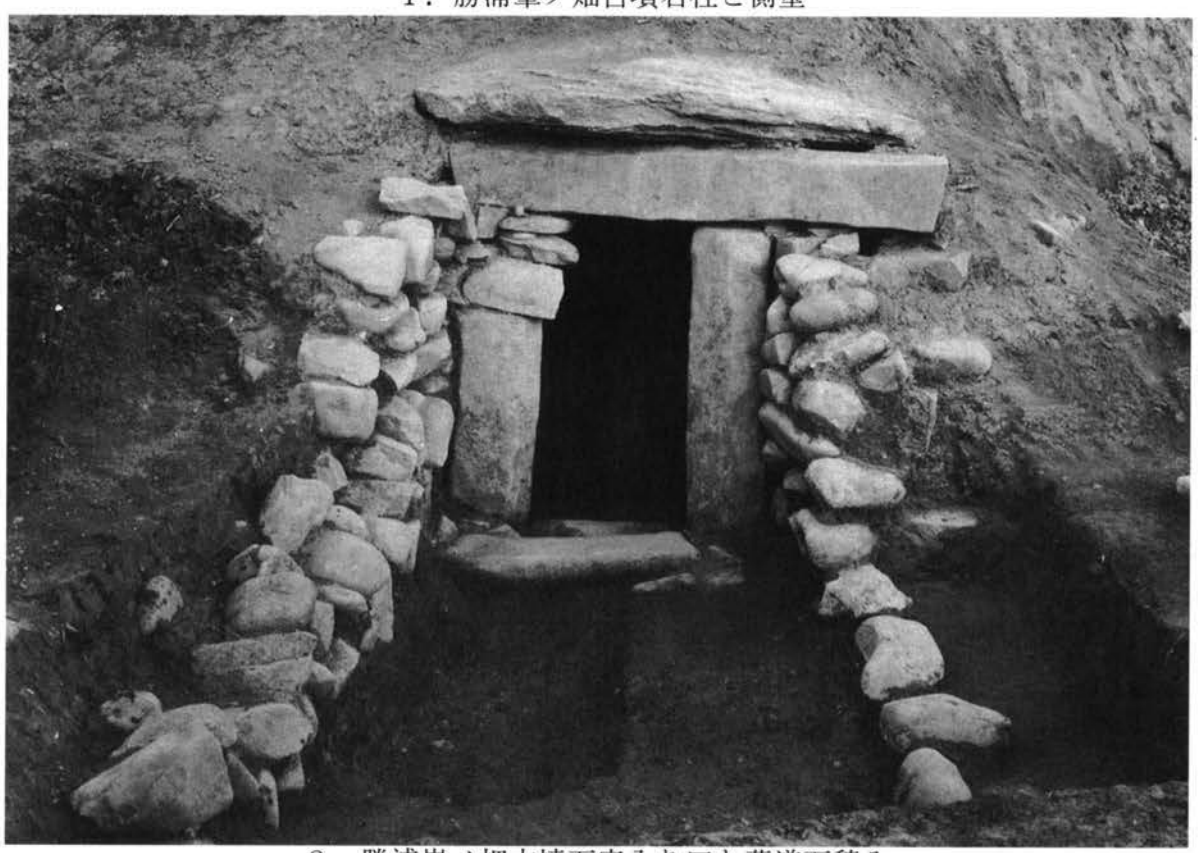
1．勝浦峯ノ畑古墳石室奥壁と石柱



2．勝浦峯ノ畑古墳屍床と石柱



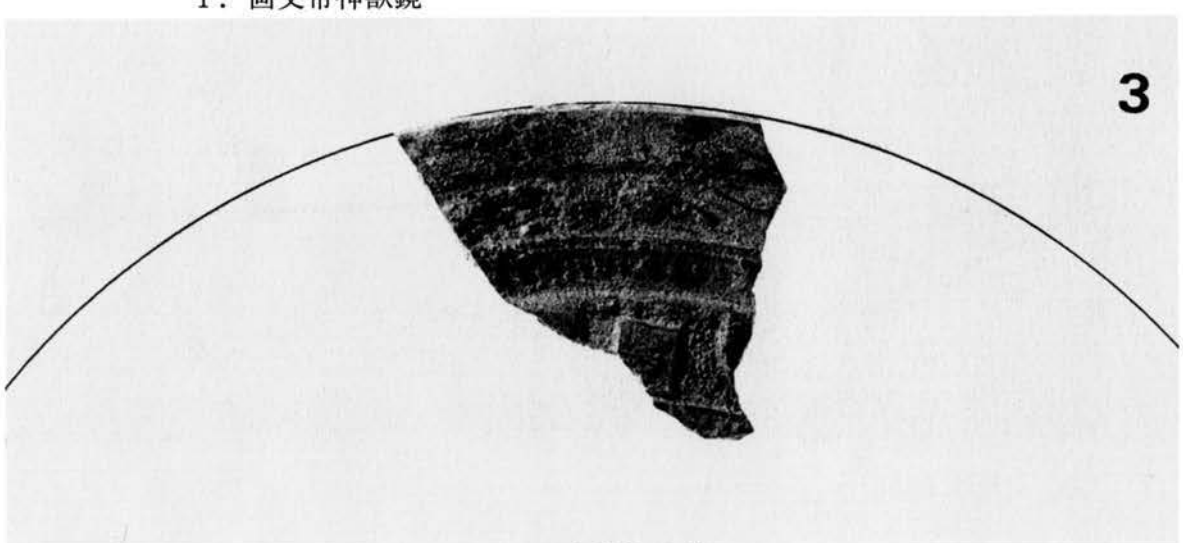
1．勝浦峯ノ畑古墳石柱と側壁



2．勝浦峯ノ畑古墳石室入り口と墓道石積み

1．画文帯神獣鏡

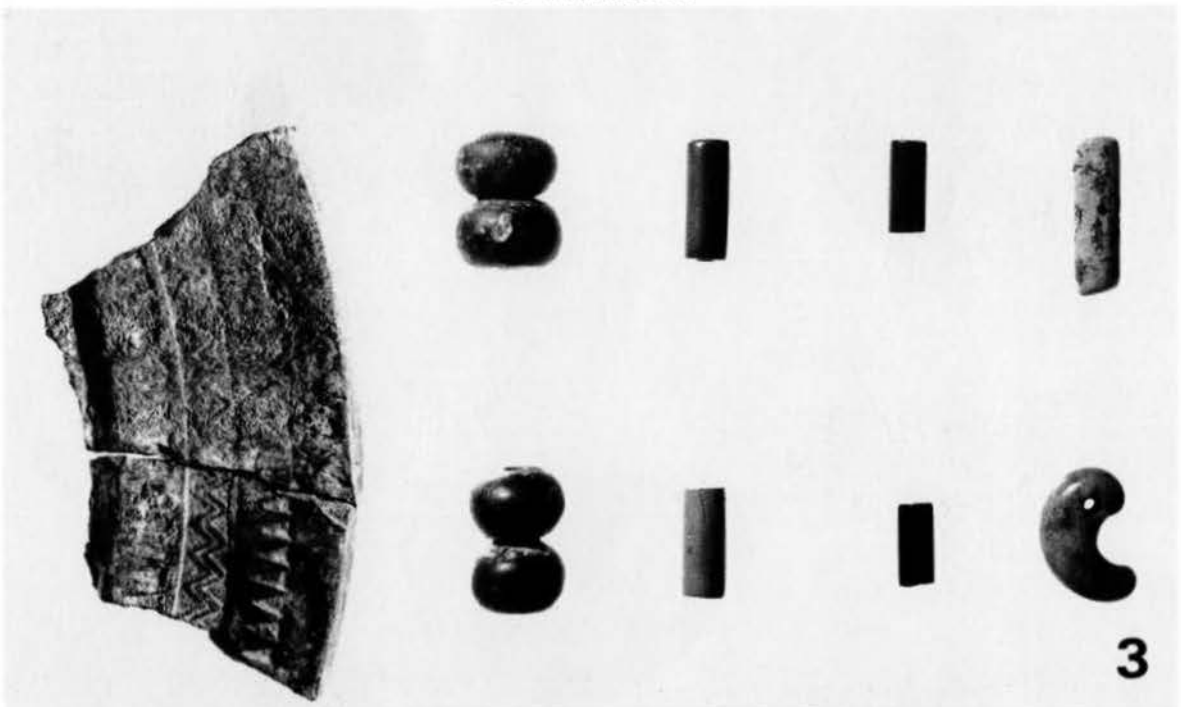
2．神獣鏡



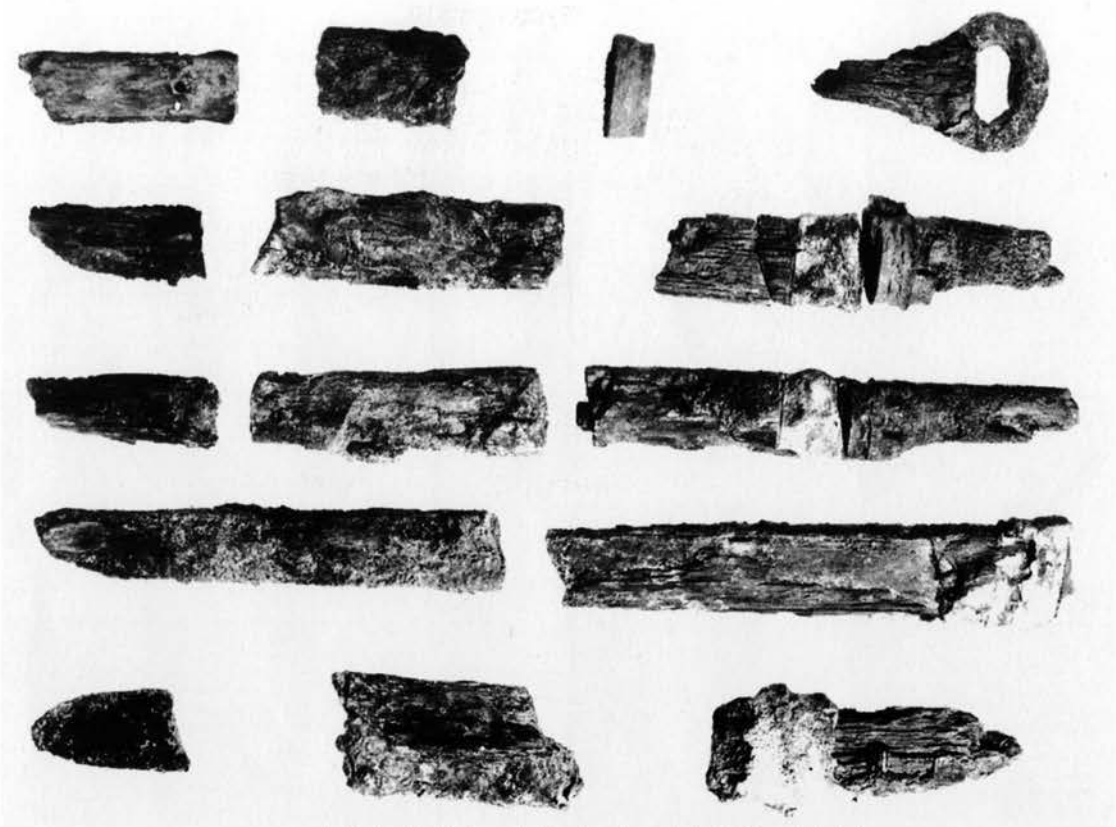

3．画文帯神獣鏡

1．内行花文鏡

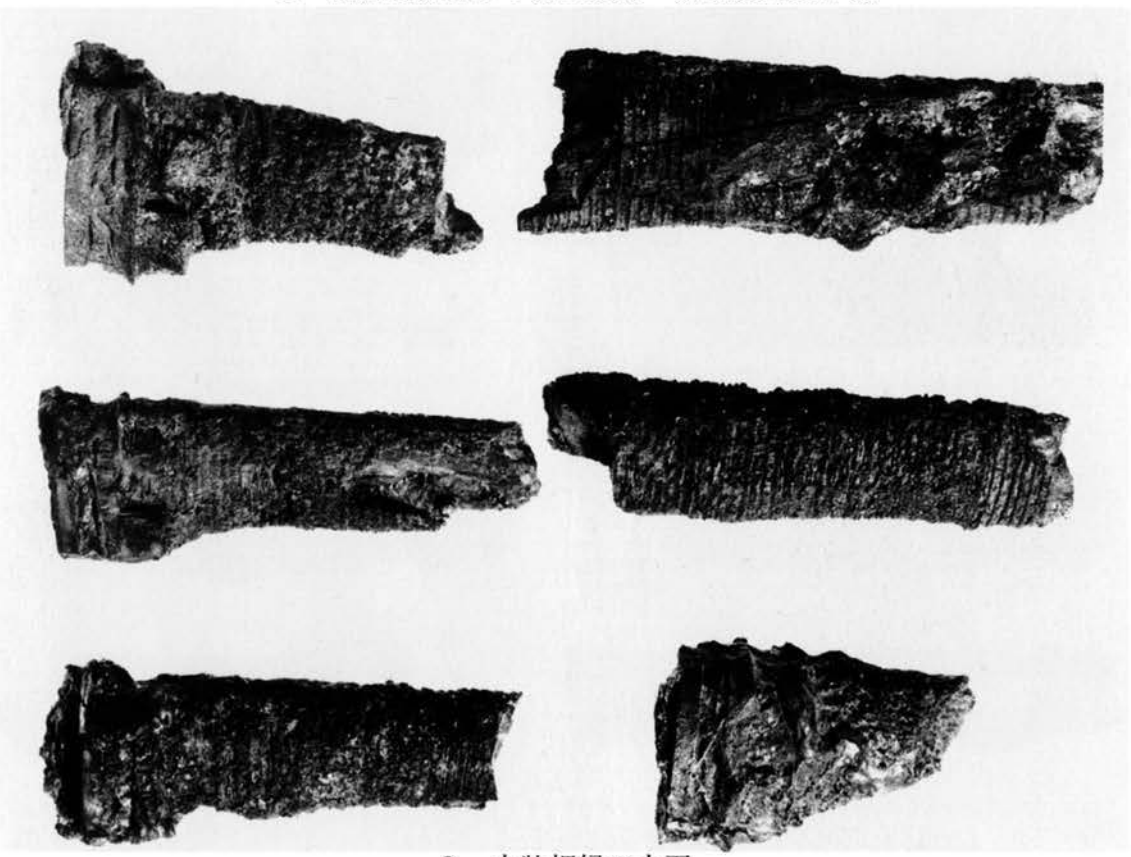
2．方格規矩鏡か



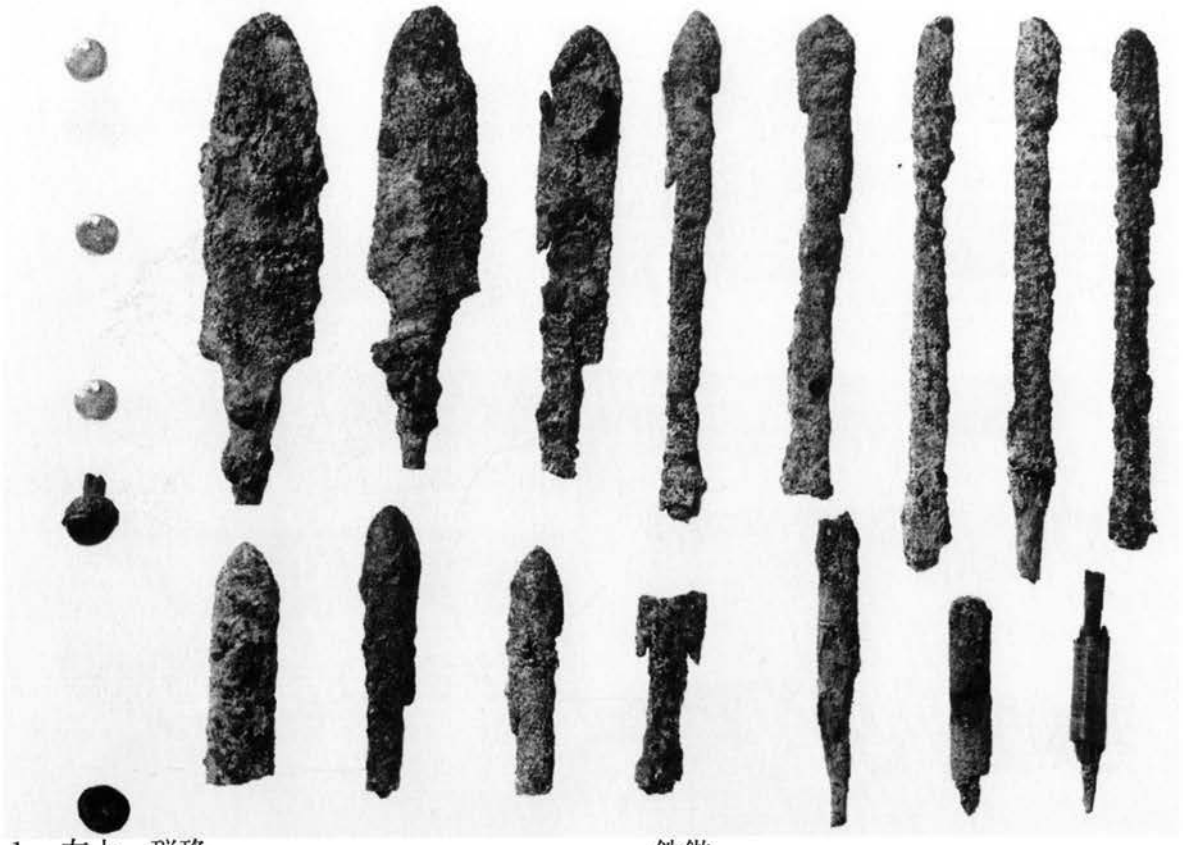

3．連玉、管玉、勾玉



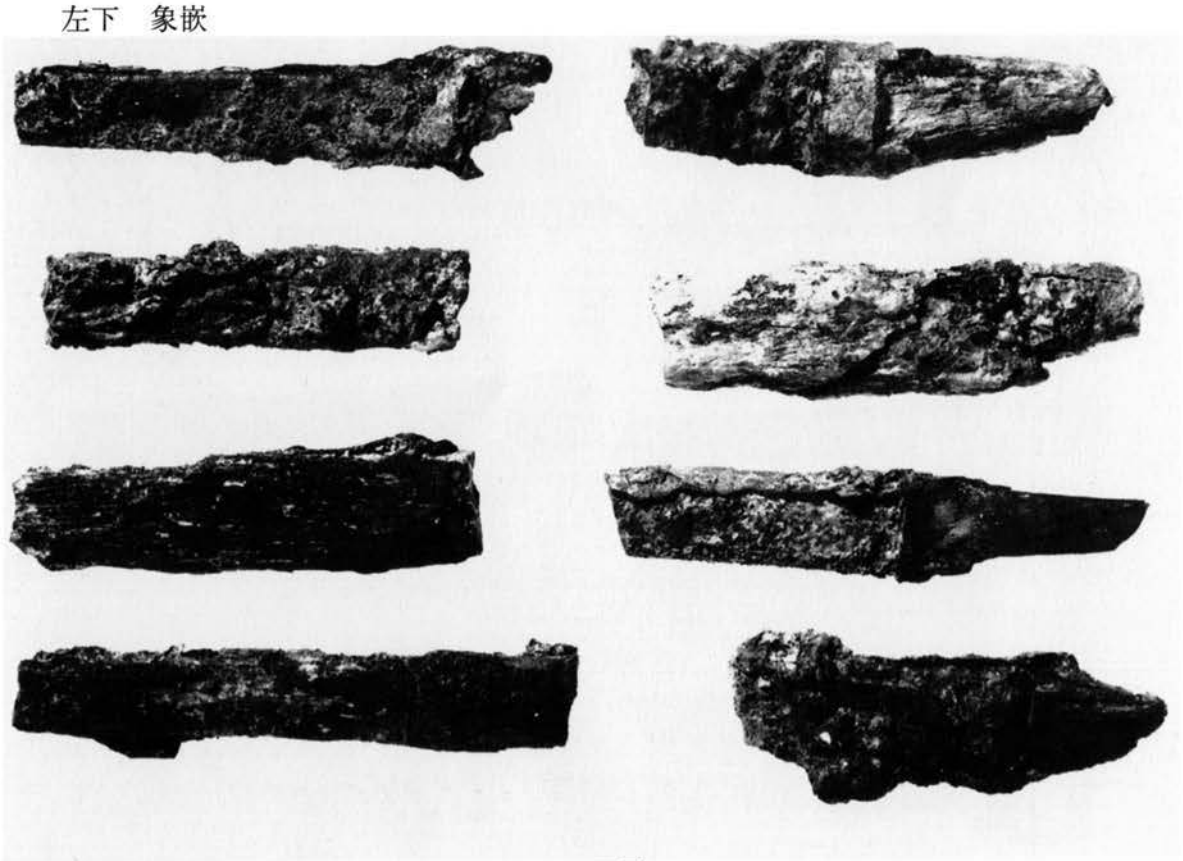
1．鹿角装具付きの剣と大刀・素環頭大刀か剣



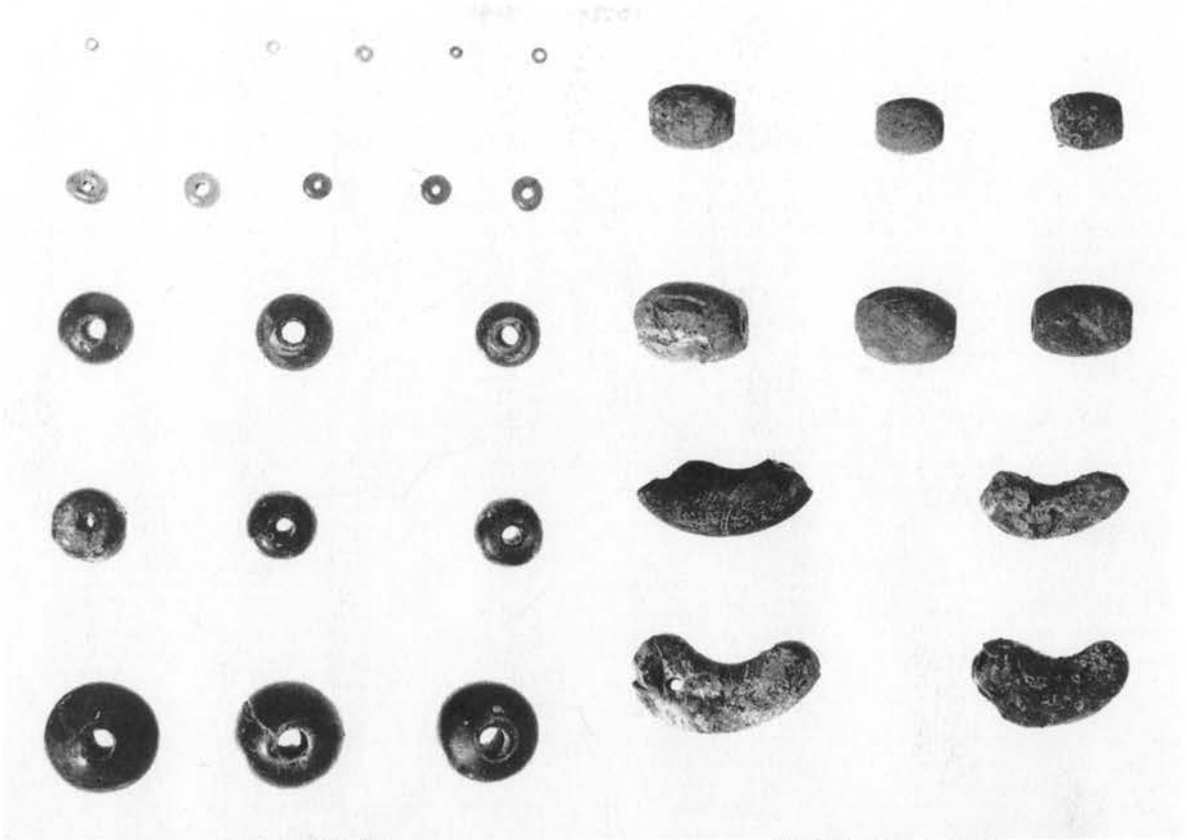
2．木装把縁の大刀



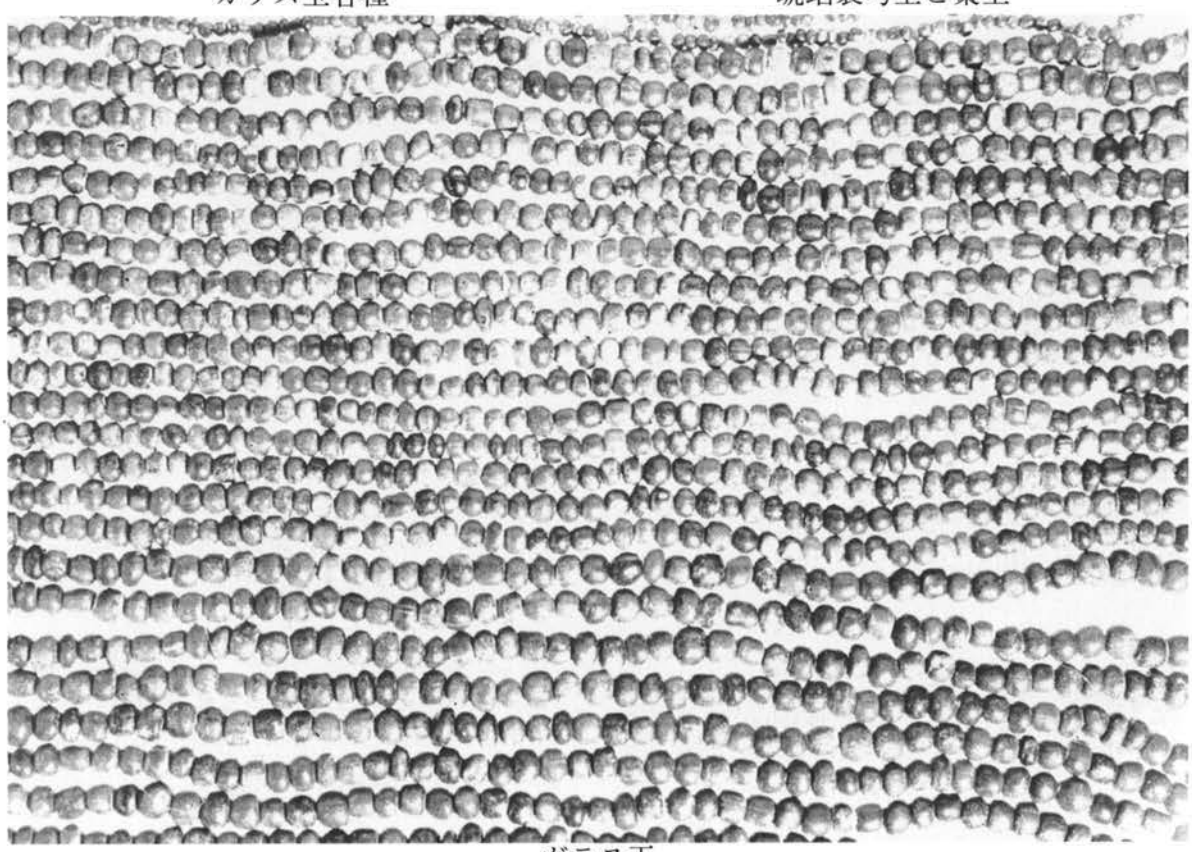
1．左上　琀珞　　鉄鏃
　　左下　象嵌



2．刀子



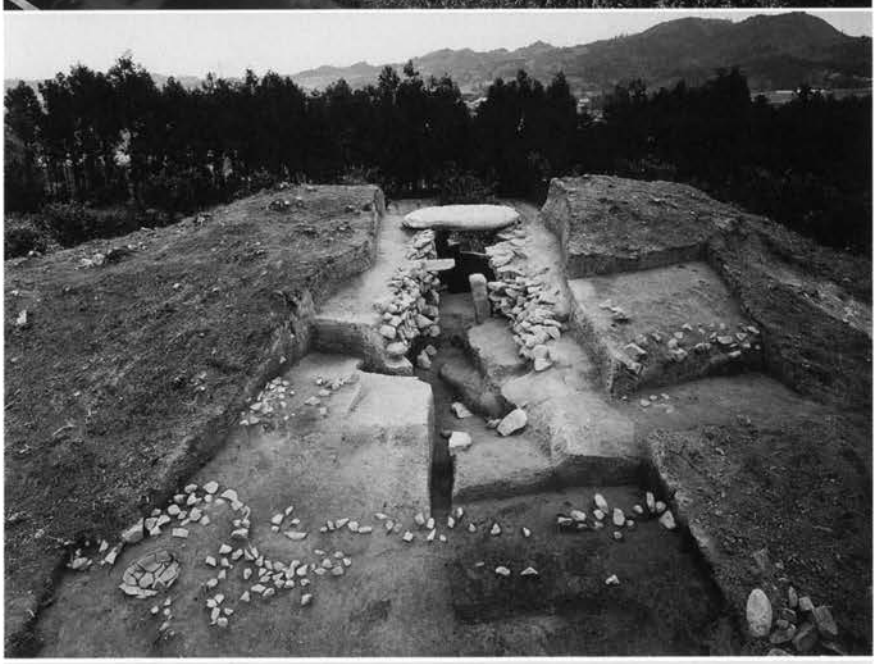
ガラス玉各種　　琥珀製勾玉と棗玉



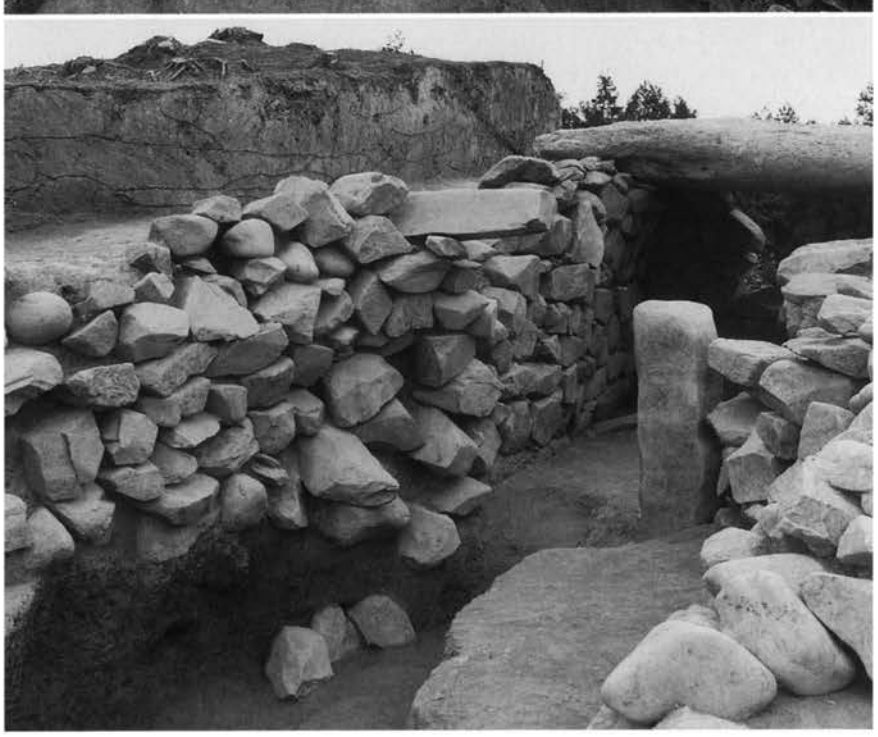
ガラス玉

航空写真（昭和57年〈1982〉5月撮影）
数字は新原・奴山古墳群の古墳番号

1．１号２号墳全景
（西から）



２．１号墳石室
（南西から）



３．１号墳石室前庭部
左側壁（南から）

1．１号墳墳丘断面全景

2．7号墳空中写真　1988

1．7･8･9･10号墳
空中写真　1988

2．9･10･11号墳
空中写真　1988

1．12号墳空中写真
1988

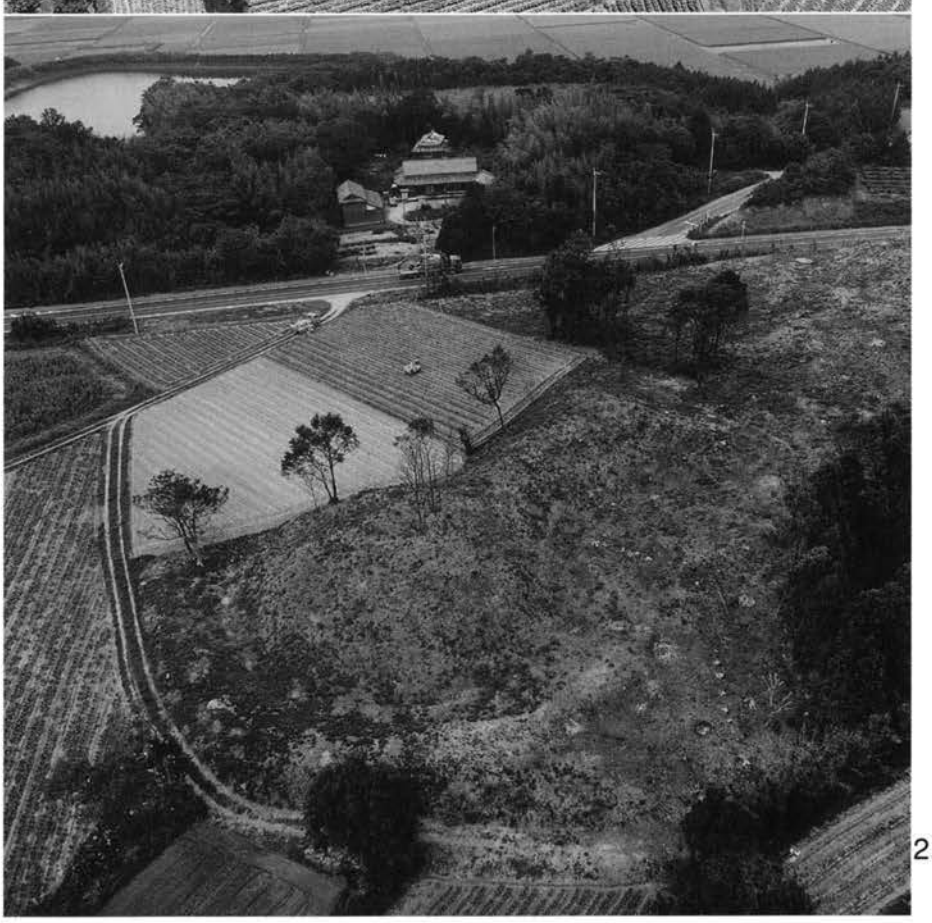
2．12･13･14号墳
空中写真　1988

1．15･16･17･18･19･46号墳空中写真　1987

2．20号墳空中写真　1987

ＰＬ－40　新原・奴山古墳群

1．21･22号墳空中写真　1985



2．24号墳空中写真　1987

1．新原・奴山古墳群（西北から）1987

2．25･30号墳周辺空中写真　1986

1．25･30号墳空中写真　1986

2．30号墳空中写真　1986

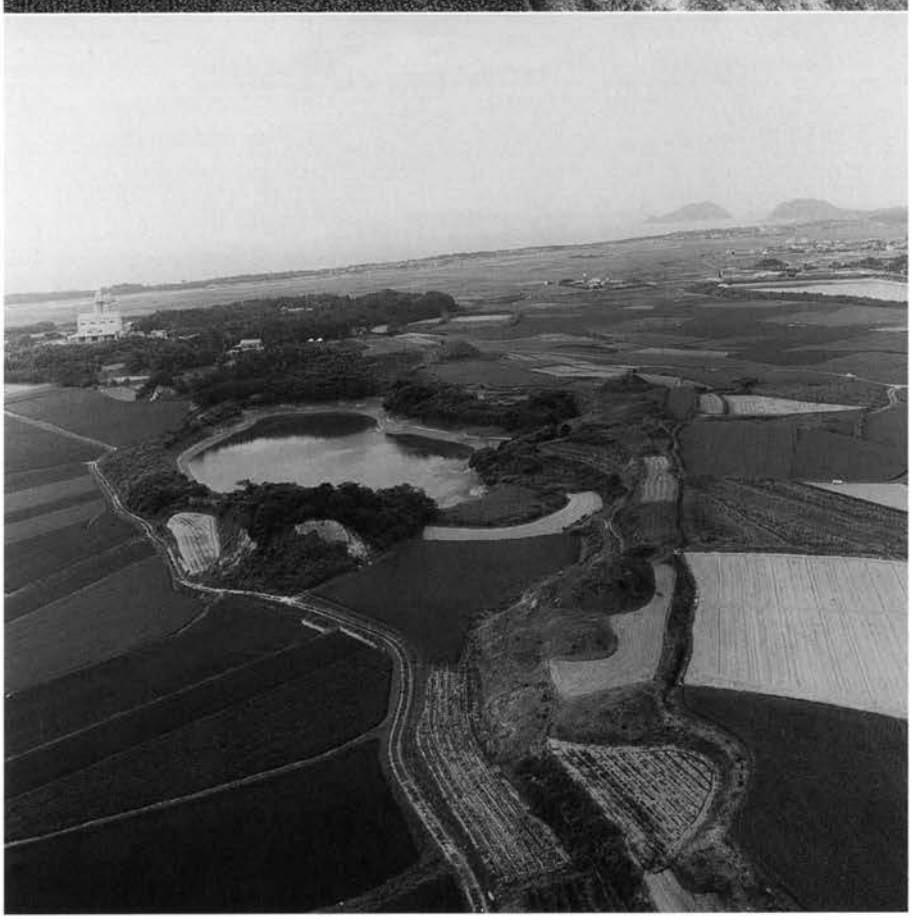
1．26･27･28･29号
墳空中写真　1986

2．30･34号墳周辺
空中写真　1986

1．34号墳空中写真
1986

2．35･36号墳空中
写真　1986

1．37･38号墳空中
写真　1986



2．40号墳周辺空中
写真　1986

1．21号墳（西から）
1986

2．25･30号墳
（北から）1986

3．新原・奴山古墳群
（東南から）1986

1．須多田ニタ塚古墳（西から）1989

2．須多田ニタ塚古墳空中写真（発掘前）1989

ＰＬ－48　須多田古墳群

1．須多田ニタ塚古墳
（東から）1991

2．須多田ニタ塚古
墳空中写真
（発掘後）1991

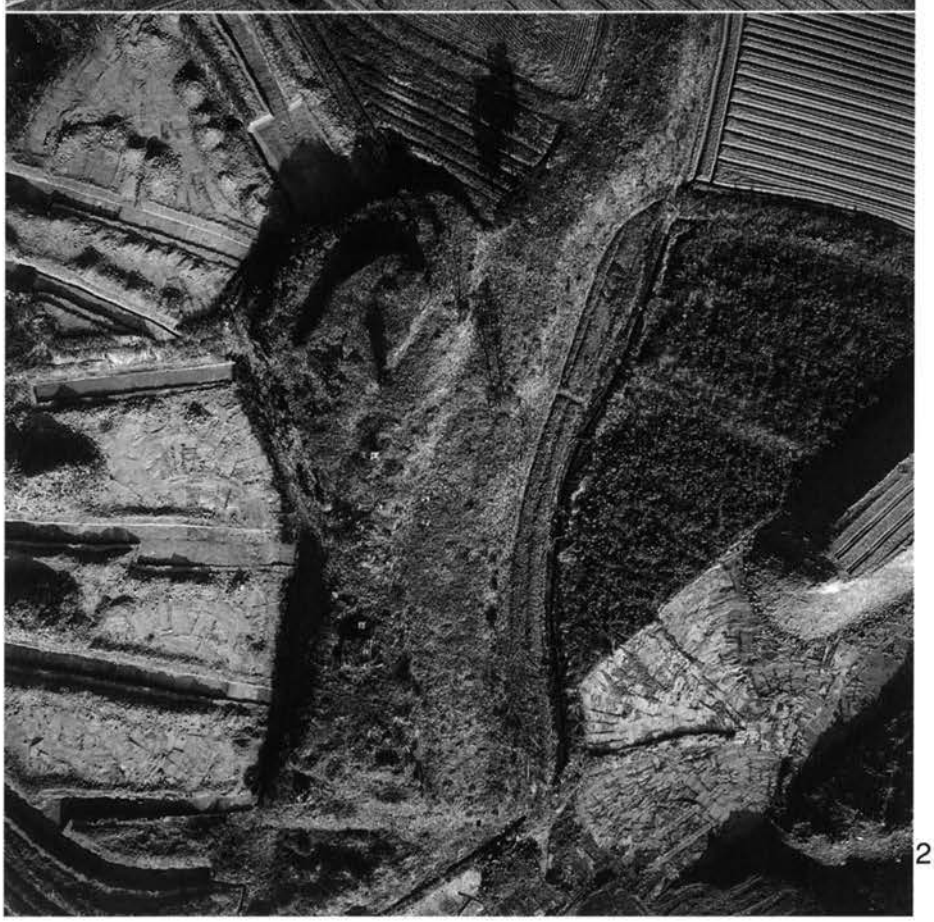
1．須多田ニタ塚古墳石室　奥壁から横口部を望む

2．須多田ニタ塚古墳周溝墳丘側から

3．須多田ニタ塚古墳内側周溝内穴銭鉄塊出土状況

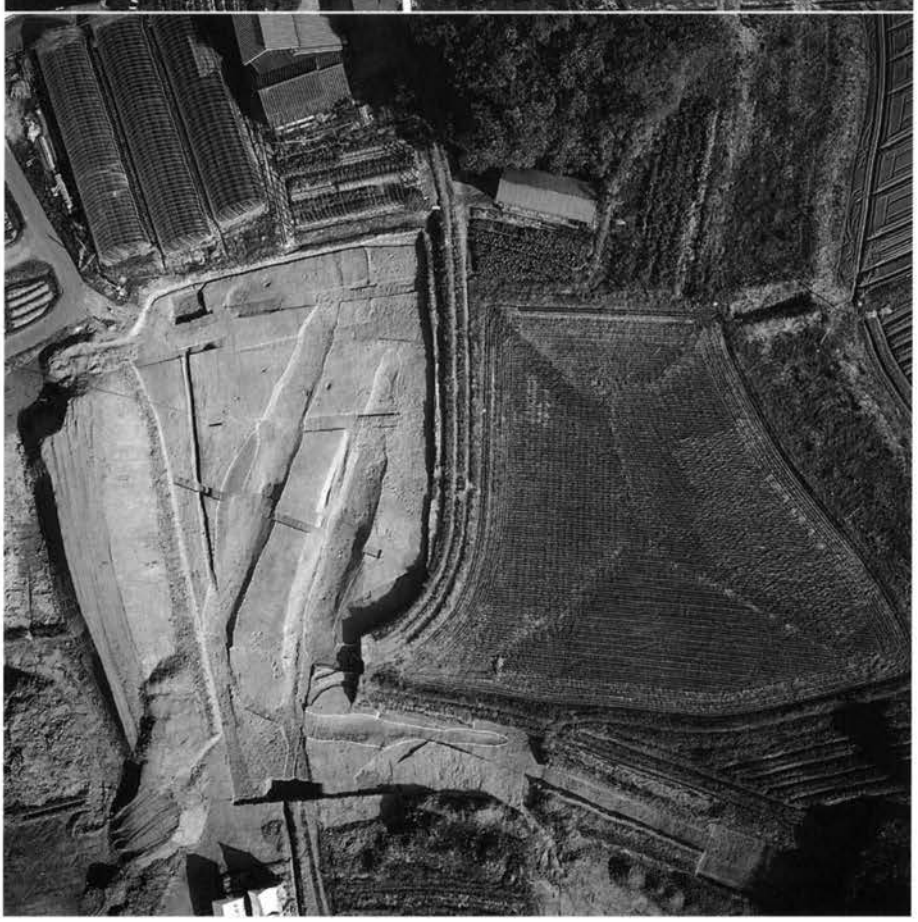
ＰＬ－50　須多田古墳群

1．須多田ミソ塚古墳周辺空中写真（南から）1989



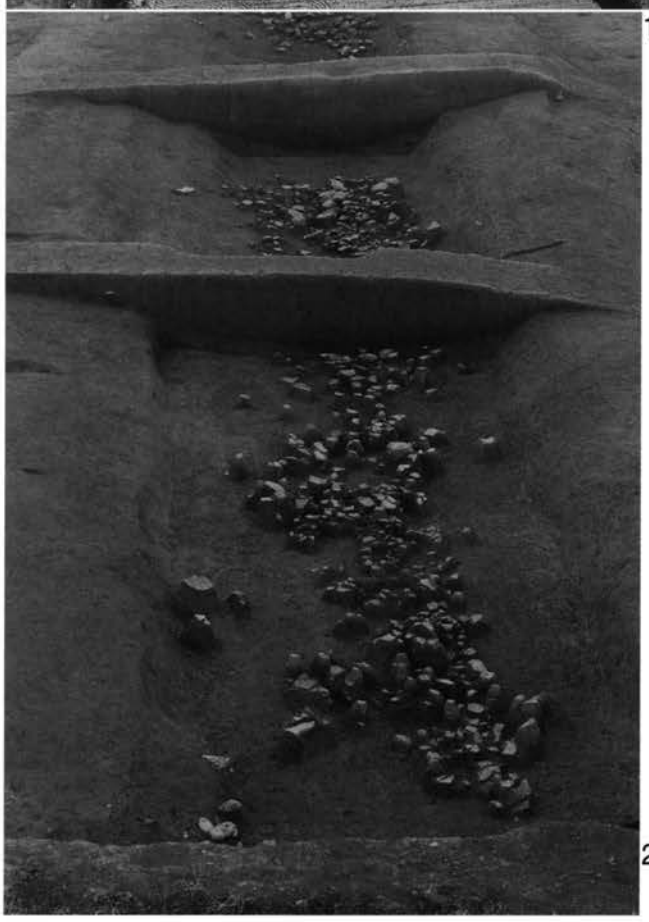
2．須多田ミソ塚古墳空中写真 1991

1. 須多田下ノ口古墳周辺（北から）
1991



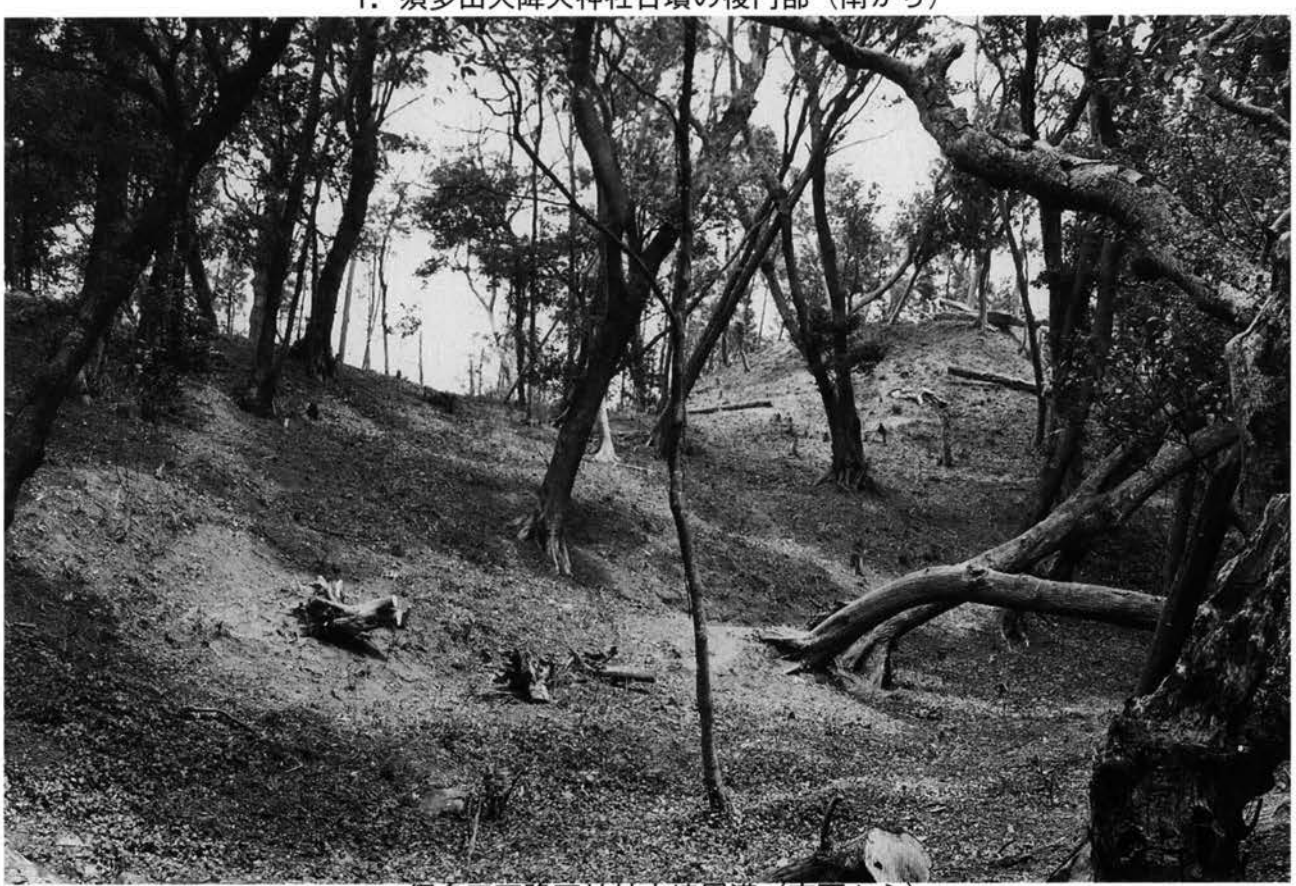
2. 須多田下ノ口古墳周溝空中写真
1991

1．須多田下ノ口古墳空中写真　1992



2．須多田下ノ口古墳周溝第１周溝土器
出土状況（北から）

1．須多田天降天神社古墳の後円部（南から）



2．須多田天降天神社古墳周溝（南西から）

ＰＬ－54　須多田古墳群

1．須多田天降天神社古墳　前方部から後円部を望む

2．須多田上ノ口古墳（北西から）

ミソ塚0001

ミソ塚0002

下ノ口0126

下ノ口0115

下ノ口0121

天降天0107

下ノ口0130

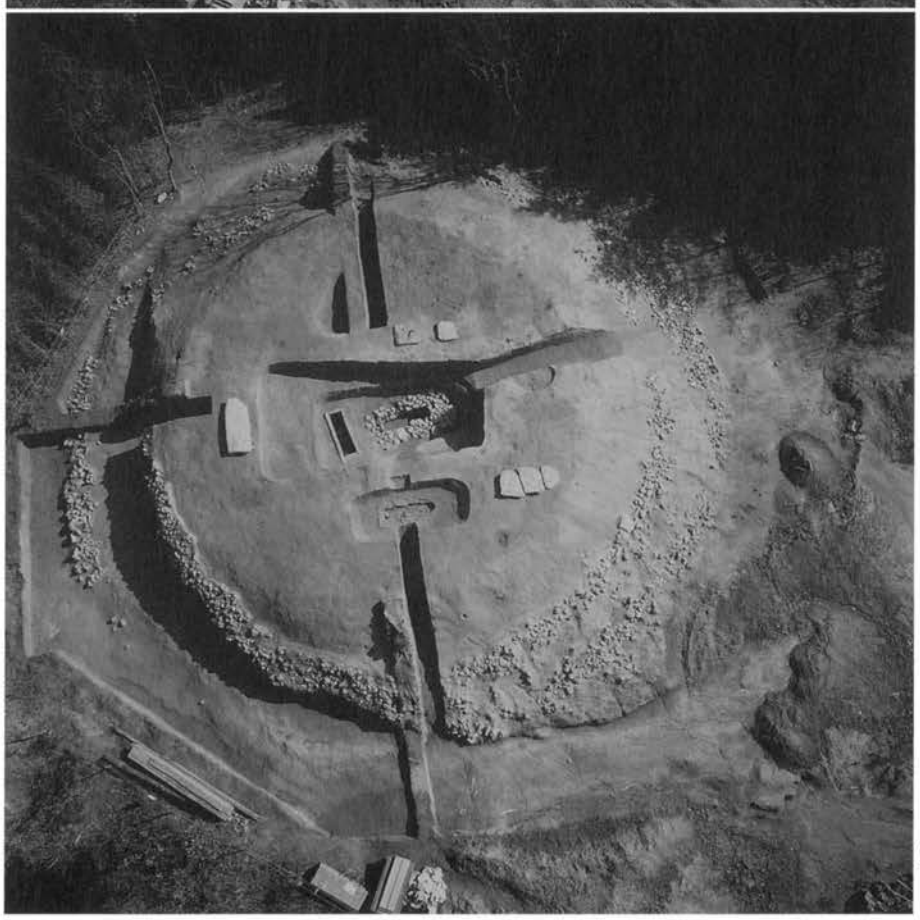
天降天0101

天降天0111

天降天0110

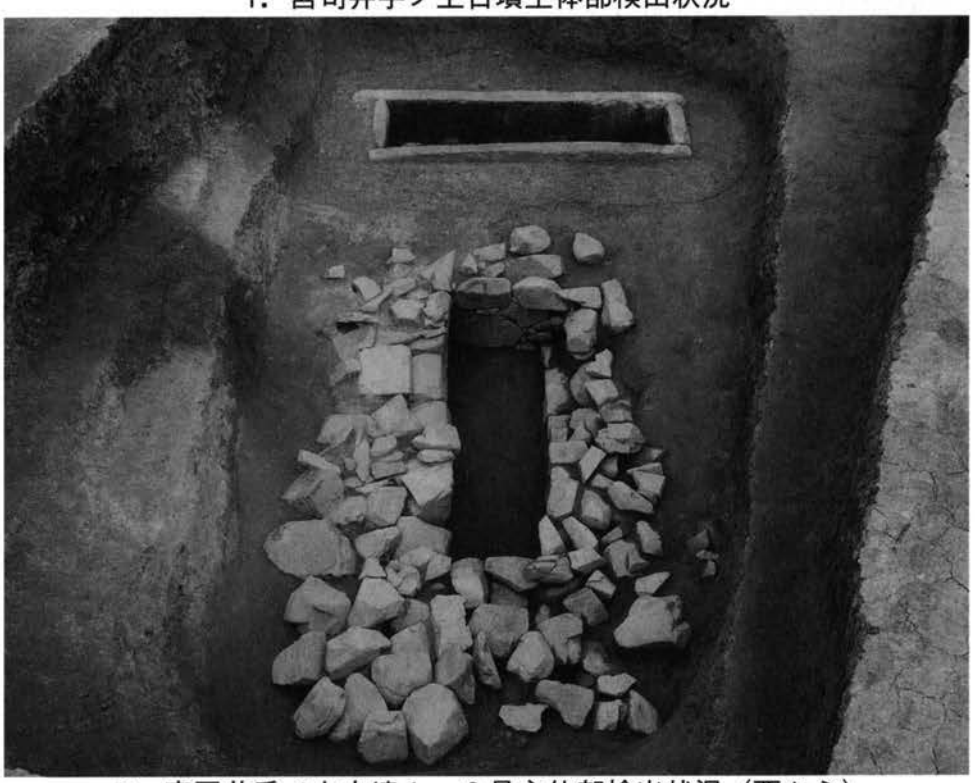
ＰＬ－56　宮司井手ノ上古墳

1．宮司井手ノ上古墳
（北から）1990

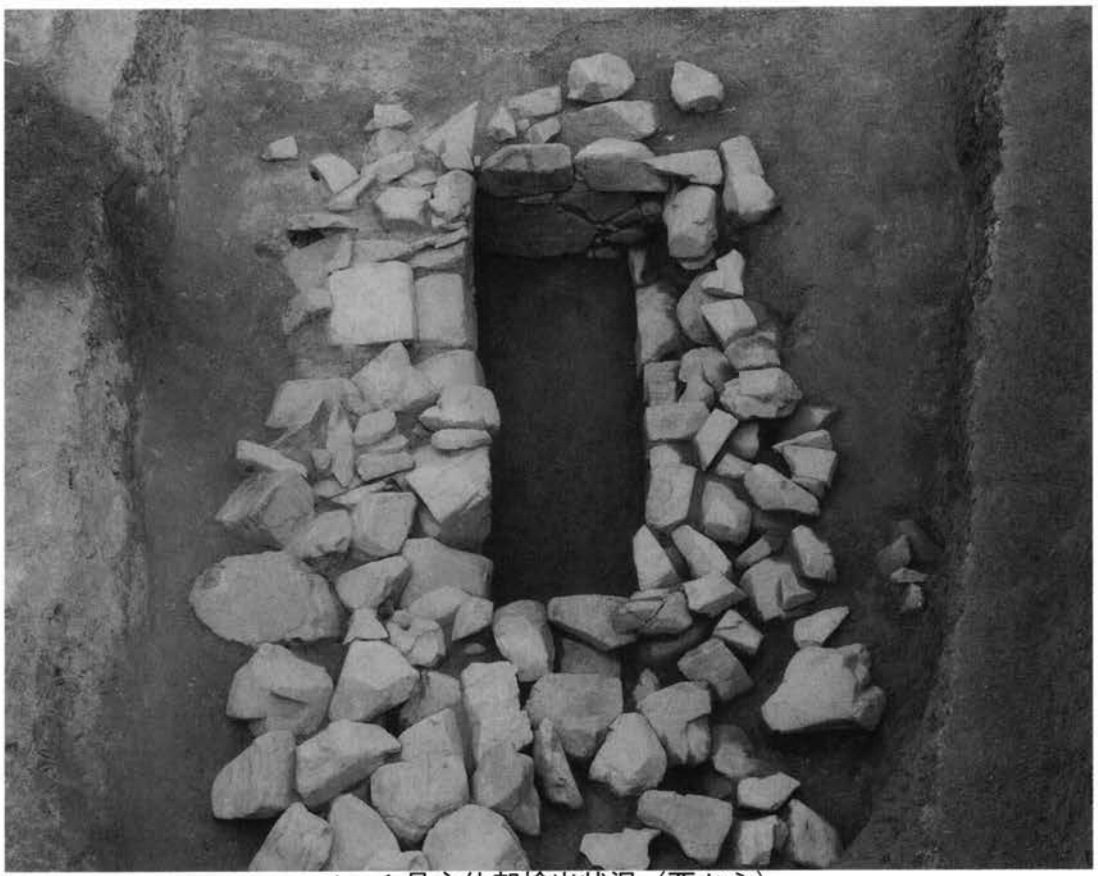


2．宮司井手ノ上古
墳空中写真 1990

1．宮司井手ノ上古墳主体部検出状況



2．宮司井手ノ上古墳１・２号主体部検出状況（西から）

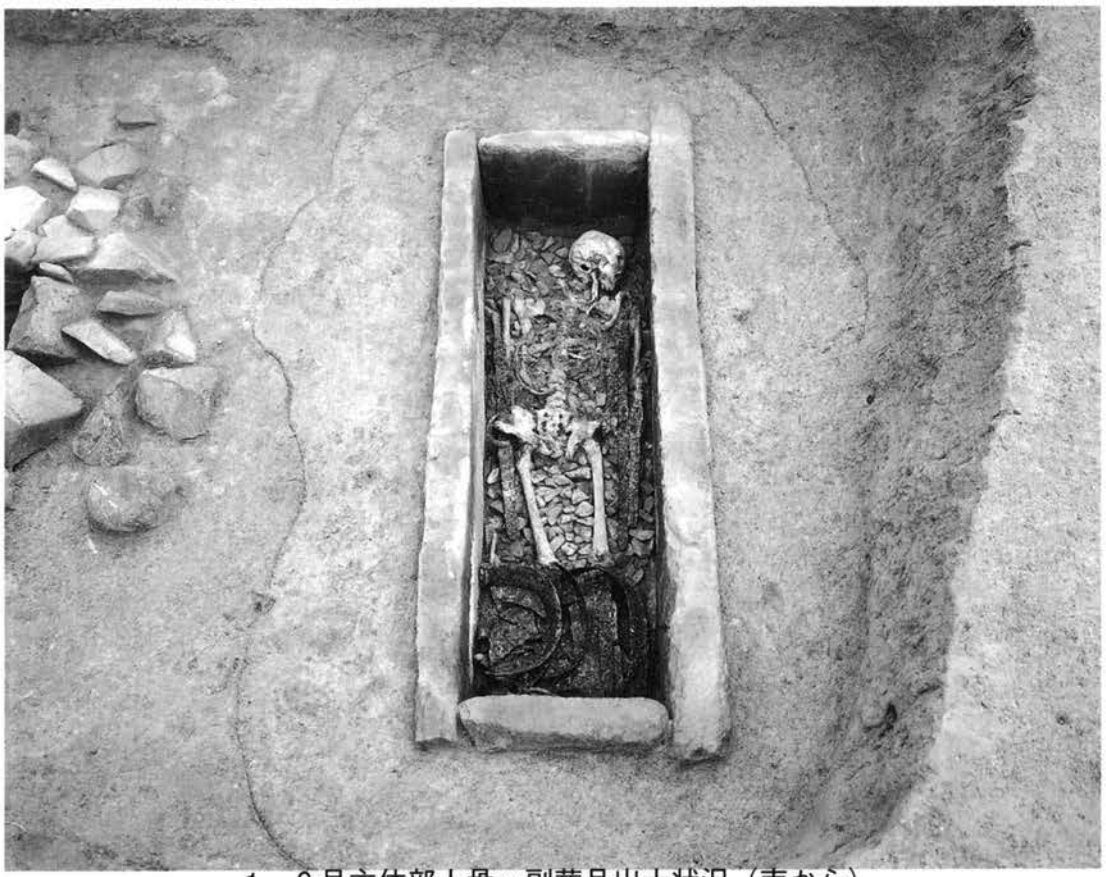


1．１号主体部検出状況（西から）

2．3号主体部検出状況（西から）

1．２号主体部蓋石検出状況（北から）

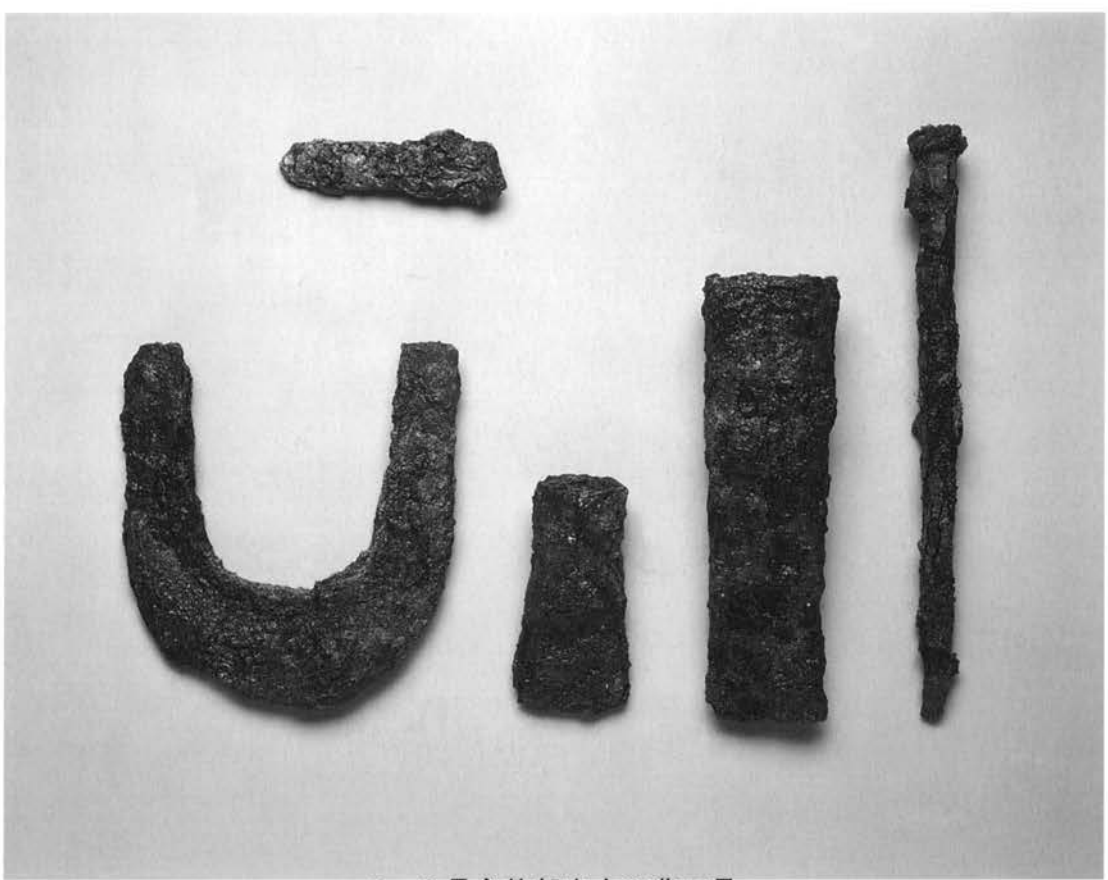
2．２号主体部検出状況（南から）



1．２号主体部人骨・副葬品出土状況（南から）

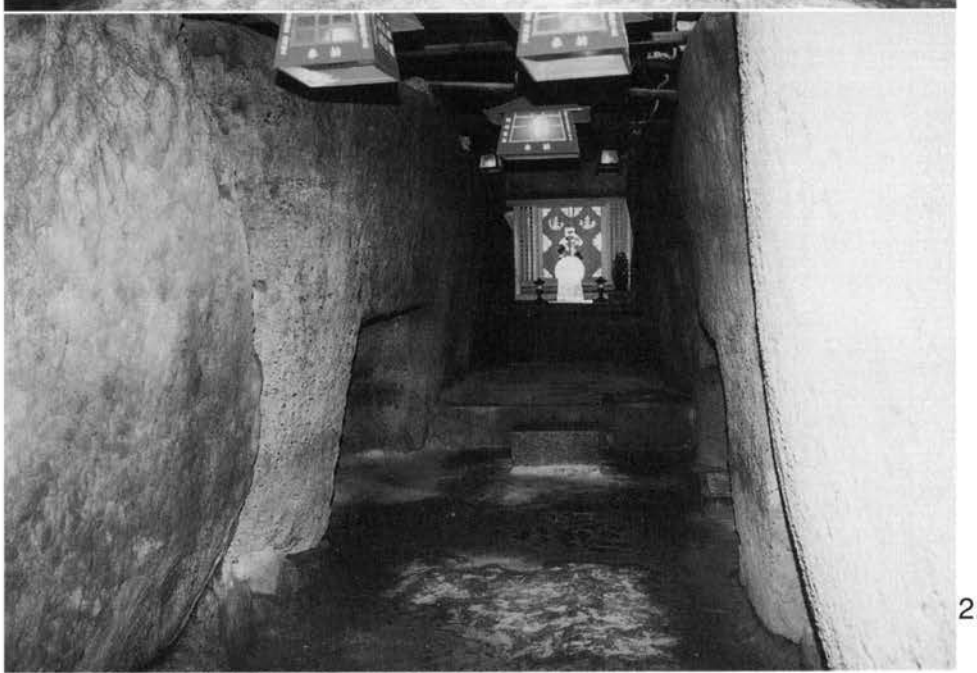
2．２号主体部出土の短甲（前面）

1．２号主体部出土の鉄柄手斧

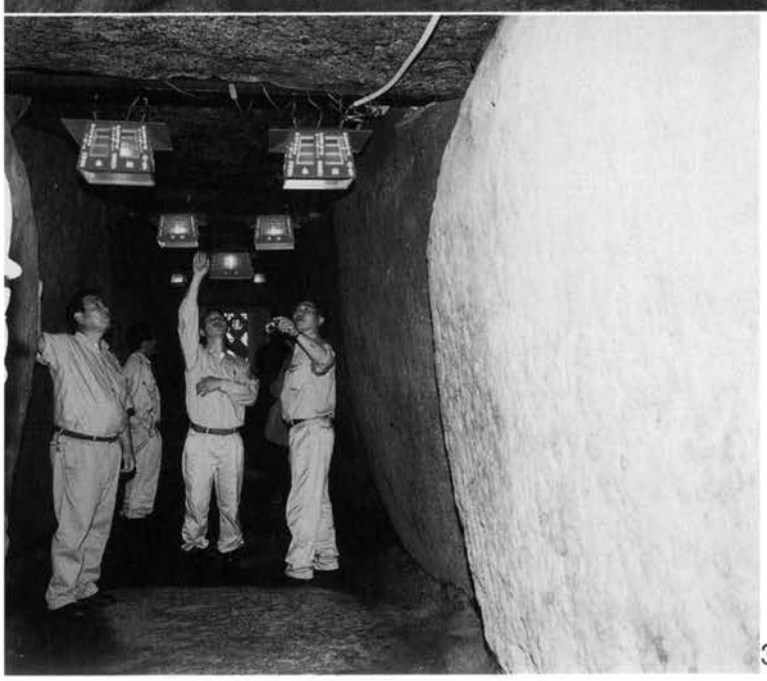


2．２号主体部出土の農工具

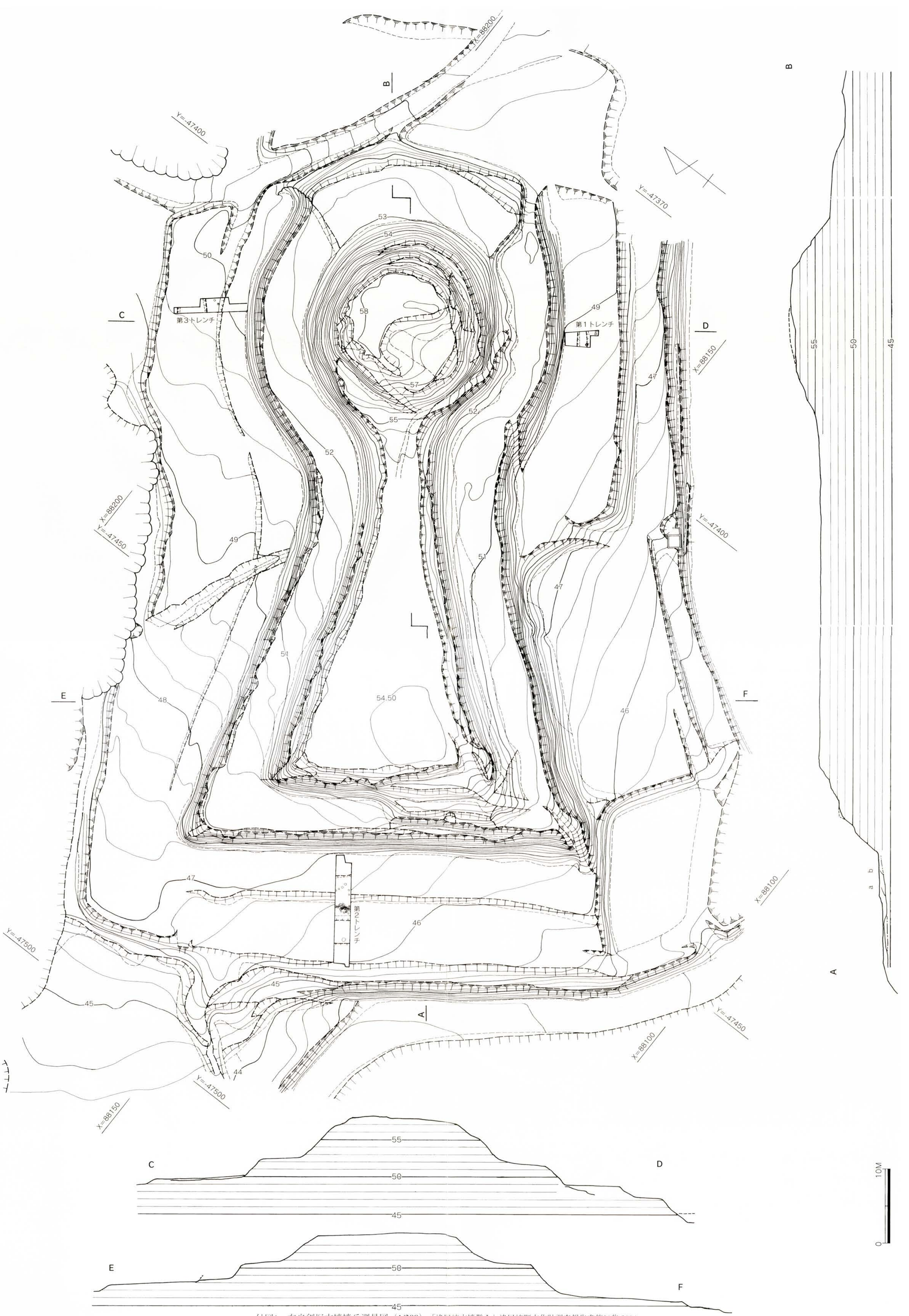
1．横口式石槨
（東から）



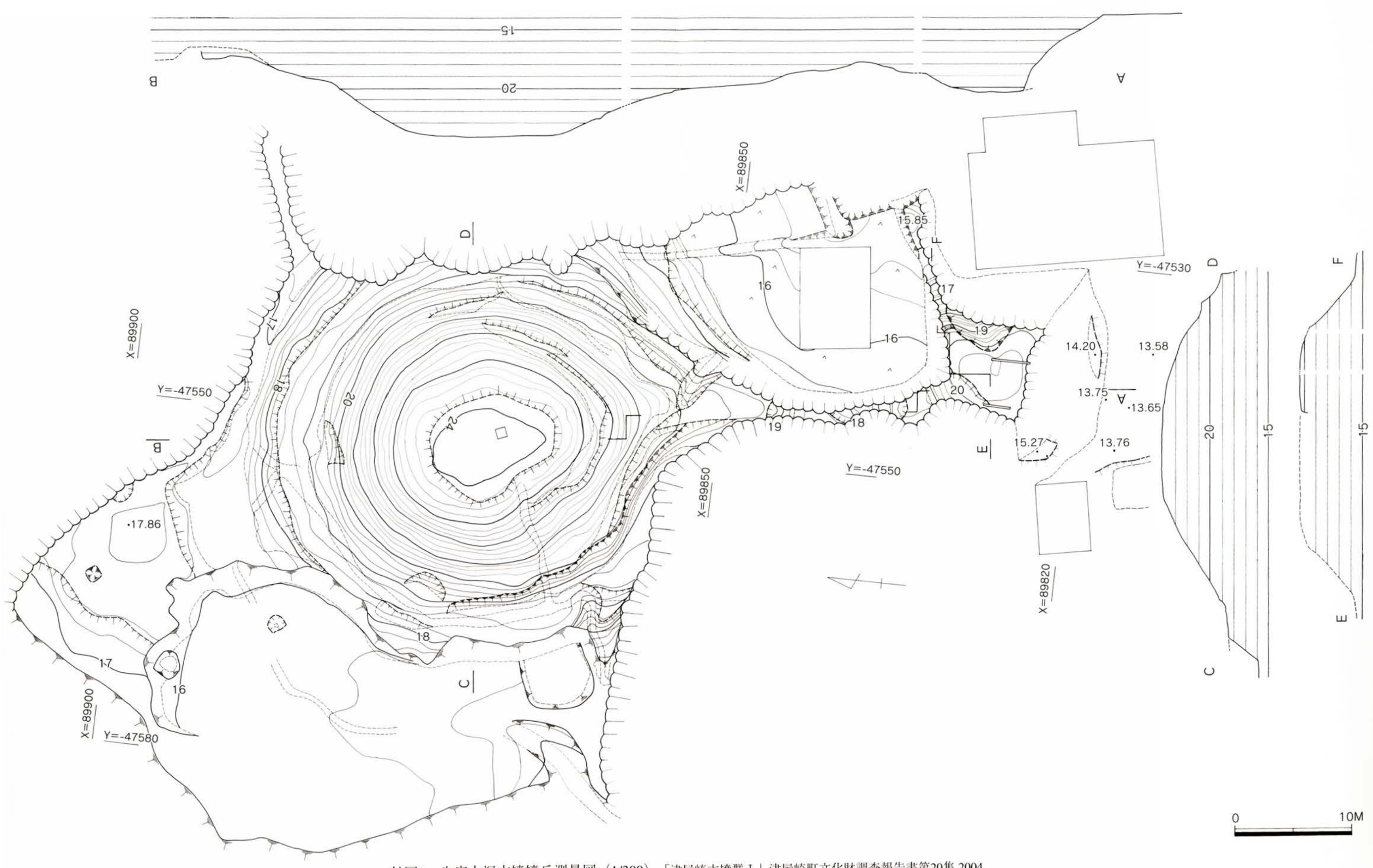
2．龕と羨道部
（東から）



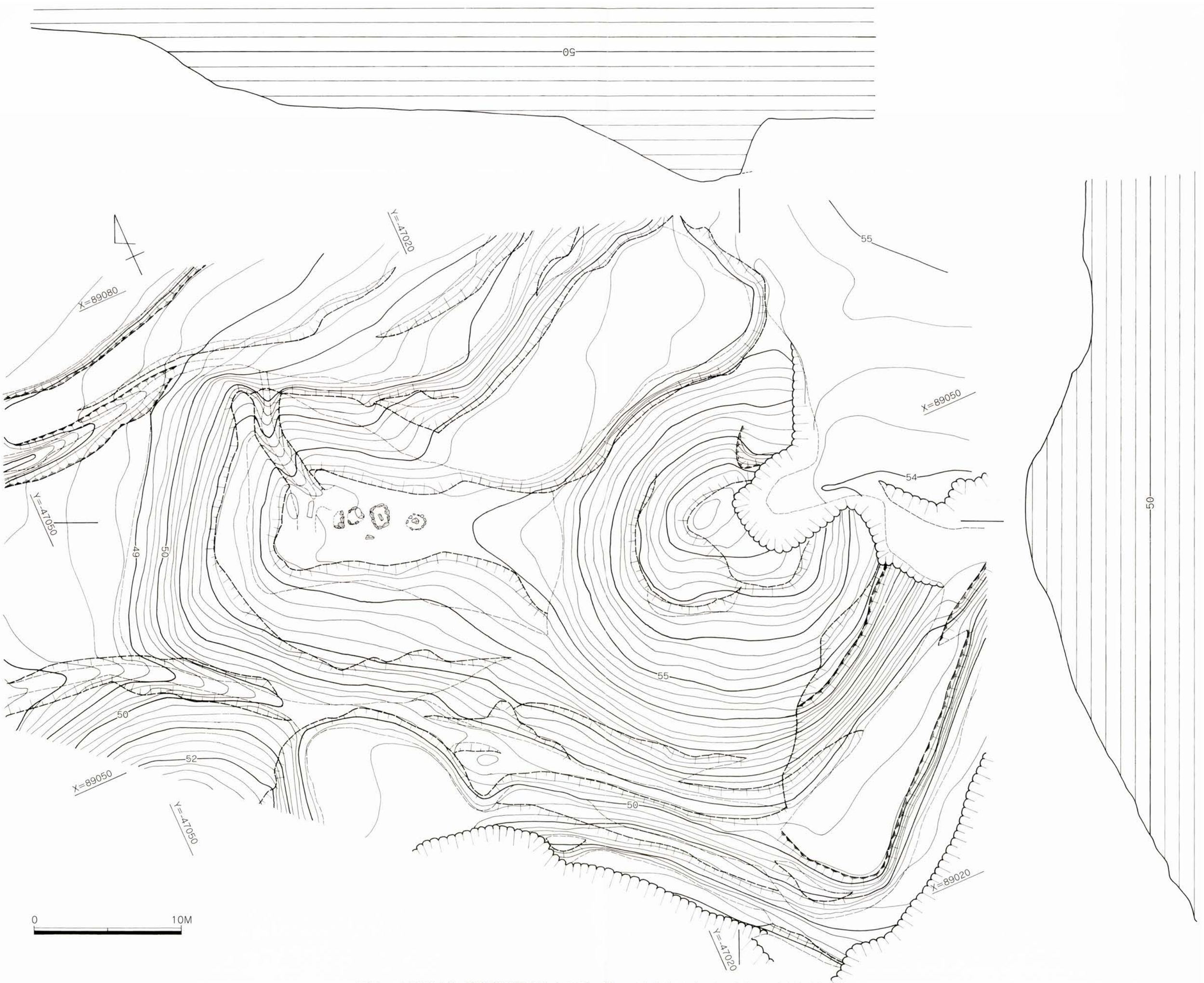
3．　視察風景




付図1　在自剣塚古墳墳丘測量図（1/300）「津屋崎古墳群Ⅰ」津屋崎町文化財調査報告書第20集 2004




付図2　生家大塚古墳墳丘測量図（1/300）「津屋崎古墳群Ⅰ」津屋崎町文化財調査報告書第20集 2004




付図3　大石岡ノ谷1号墳墳丘測量図（1/200）「津屋崎古墳群Ⅰ」津屋崎町文化財調査報告書第20集 2004

付図4　大石岡ノ谷2･3号墳墳丘測量図（1/200）「津屋崎古墳群Ⅰ」津屋崎町文化財調査報告書第20集 2004